

自序

時運の發展に伴ひ我帝國教育界の面目は急轉直下の趨勢を以て一新せり、其人材養成の途の如き亦大に昔日と趣きを異にする所なからんや、此の際に當り吾人が天下の名望家成功家の傳記逸事を網羅して範を社會に示さんとするもの豈徒爾ならんや、然も惜むらくは短日月の間に蒐集編纂せるを以て遺憾なく事實を詳叙し文辭を潤飾すること能はず、隨て大に趣味の缺如せるものあるを恨事とす、吾人は尙奮て是か完成に努め本社之趣旨を徹底して諸賢の高指に添はんことを期す、

編者誌

本卷目錄

—客譽門—

井上辰九郎君  
 伊藤巳代治君  
 飯野吉三郎君  
 稻葉正細君  
 巖谷季雄君  
 磯崎勳君  
 磯本市君  
 今井萬吉君  
 今井又治郎君  
 今西兼二郎君  
 池貝庄太郎君  
 池上仲三郎君

二六三  
 一七七  
 一〇五  
 一六五  
 七三  
 一九四  
 二六七  
 五一  
 一九八  
 一二五  
 三二  
 一一

袴田喜四郎君  
 島中友次君  
 服部金太郎君  
 服部綾雄君  
 秦敏之君  
 林小兵衛君  
 丹羽長徳君  
 堀井松之助君  
 細川謹成君  
 本多忠保君  
 戸次兵吉君  
 道源權治君  
 土居通博君  
 千坂高雅君  
 千葉三郎治君

一九一  
 二〇〇  
 五三  
 二九九  
 二六九  
 九七  
 一六一  
 一七五  
 一五四  
 四〇  
 二五四  
 二七八  
 二七九  
 二三一  
 二五七

千葉松兵衛君	二二	渡邊	二二六
大浦兼武君	九	加藤	一七九
小川六右衛門君	一〇三	加藤	一七九
小倉喜作君	六九	藤	一七九
小澤武雄君	一八二	正	一八五
大西榮助君	五八	義	一八二
大谷嘉兵衛君	二二六	秋	二六二
大倉喜八郎君	二〇三	波	二六二
大隈榮一君	二八七	邊	二六二
大塚敬齋君	二九七		
岡野悌二君	三〇八		
岡埜留吉君	二六六		
岡本武次君	三一四		
岡崎瀧之丞君	九六		
渡邊仁三君	七八		
神谷傳兵衛君	一八九		
神田鐺藏君	一四		
柿沼谷藏君	八〇		
桂太郎君	一		
河村淳君	二九六		
川口佐一郎君	一九九		
川合芳次郎君	八二		
川合芳次郎君	一八五		
加藤正義君	一七九		
加藤秋君	一七九		
渡邊波君	二六二		

田村成義君	三〇一	南波禮吉君	一二六
田村利親君	二八八	村瀨春雄君	一六七
田村利七君	一七一	瀨	
高橋德之助君	一〇二	白井定民君	二四〇
高木兼寛君	二二七	内田幾助君	二五六
高木喜寛君	二九三	瓜生寅君	六八
伊達宗基君	四	梅屋庄吉君	三四
角田真平君	四九	野田半十郎君	三〇三
鍋島直彬君	二二四	久原房之助君	一〇七
中居健藏君	一〇四	黒田和志君	一六〇
中川謙二郎君	一六九	黒田長成君	一五一
中山希賢君	一九五	山川勇木君	四六
中牟田倉之助君	一六三	山田猪三郎君	一〇八
中村源次郎君	三七	山本留次君	六六
長岡護孝君	一六六	山中立木君	二二六

安川敬一郎君	三〇五	葦原榮君	二八三
安田善次郎君	三二一	小松楠彌君	三〇九
藪田忠次郎君	二九五	小久保喜七君	一一一
柳川春葉君	一三一	小松原英太郎君	一一一
松平頼壽君	一一一	遠藤芳之助君	二九四
松平直亮君	二二六	寺崎廣業君	三二七
松浦厚君	一五六	安達仁造君	四四
牧野貞寧君	九	青田綱三君	一一三
升本喜兵衛君	七二	青木信光君	一八一
藤岡市助君	一一二	青地伊一君	三一
藤村喜七君	五六	綾井忠彦君	四七
藤田傳三郎君	二九一	朝吹英二君	二八一
古谷竹之助君	二六〇	吾妻勝剛君	二四一
古河虎之助君	四二	秋光與朝君	六
福澤桃介君	九九	齋藤紀一君	六一

左右田金作君	二四九	澁澤榮一君	三三〇
佐藤三吉君	九四	清水彦次郎君	一七二
佐々熊太郎君	二九〇	下山順一郎君	一一五
佐々木陽太郎君	一二七	平田東助君	八
佐々木政吉君	三〇三	平田道見君	二七四
北里装製男君	一一七	樋口登久治郎君	二五一
北垣國道君	一九二	毛利元昭君	一五〇
喜多長左衛門君	二七六	關口安五郎君	二六五
目賀田種太郎君	二八五	鈴木常助君	七六
宮田源五郎君	三二二	鈴木馬左也君	二四三
宮部久君	一〇〇	金光教	一四四
宮川謙吉君	八九	大成教	一四八
宮川健太郎君	二九八	逆門教	一三五
南挺三君	二八六		
	二七二		

公 爵 桂 太 郎 君

君は山口藩士にして弘化四年十一月を以て生る始め兵部省所轄横濱太田村語學所に於て修學し次て獨逸國に留學すること數年諸職を経て明治七年陸軍大尉に任し爾來第三師團長、臺灣總督、東京灣防禦總督、陸軍大臣等を歴仕し三十四年六月内閣總理大臣となり兼内務大臣たりしも三十九年一月辭職し、四十一年再び内閣總理大臣となり、軍事參議官陸軍大將を兼ね正二位大勳位公爵の榮位榮爵に陞れり。

伯 爵 松 平 賴 壽 君

君家は贈太政大臣徳川家康の季子權中納言源の頼房の二男從四位上左近衛權少將頼重の後なり、爾來幾世賢明相繼き西國の重鎮たり、殊に正四位下左近衛中將頼恕に至ては水戸家より入りて封を襲き南朝史蹟を探究し尊皇の志厚く歷朝要記を献し聖明の名天下に赫灼たり。後頼聰氏に至る、氏は天保五年八月四日の生誕にして文久二年讃州高松城

十二萬石の封を襲き讃岐守と改稱せり、時恰も尊王攘夷の論沸騰して志士天下を横行し至る所腥風瀰漫せるの際にして各藩騷擾殆んど寧日なきの状態に陥り公武の議合はすして遂に戊辰の變革を見るに至れり高松藩は徳川幕府の親藩として始め反亂の鎮撫に従ひしも東征の錦旗鮮明たるに至るや、勤王の大義順逆の大道いかて閑却に附すべきや、即ち歸順の表を具して謹慎の意を表せり、後明治元年六月諸藩と共に版籍を奉還し、同十七年伯爵を授けらる、前年其薨去せらるゝや、君其後を襲かる、君は明治七年十二月を以て生る、天資聰明にして温厚篤實なり、始め學習院に學ひ更に早稻田專門學校に轉し法律學を修む、學績優良にして常に同窓の推重を受け、在學四星霜にして其業を卒はり、暫く開地に在て時運の到るを待てり、時勢は時々刻々に展開して政界の活機將に熟せんとす、

由來華胄社會の貴公子たるや多くは祖先の遺徳により金殿玉樓に儉安の快樂を貪り徒食素餐以て無爲の職りを免れざるあり、是れ君の最も遺憾とする所にして其位置名望よりするも天下國家の爲めに多大の貢

二

献を爲し國民の儀表たる重責を全ふし、皇室の藩屏たる實効を擧げざる可からずとなし奮然厥起して、盟友大木伯と共に政界の中堅に打て出て明治四十一年二月二十八日の決戦に美事當撰の榮を擔ひて貴族院の一角に硬派の旗幟を翻へし、先輩の陣頭に肉薄して刷新の大斧を下さんとす、爾來伯爵同志會の重鎮として政界の一雄將を以て唄はるゝに至れり、本年改撰期に當て盟友諸氏と共に落撰を見ると雖も其清硬の名は愈高く將來の發展は誰か又是を疑ふものあらんや、流石二百有餘年間連綿として西國に覇を唱へ宗家徳川幕府の股肱として忠勤を全ふせし名家の後繼者として一點の瑕疵を認めざるのみならず、政界の汚流を一洗して憲政有終の美を完ふせしめんとす誰か其功を多しとせざるものあらんや

熟々其の居常を窺ふに温雅皓潔圓轉洒脫にして迎接の妙亦掬す可きものあり、主客の間更に絨壁を設けず醇々として語る處信義厚情自ら溢るゝものあり、其嗜好する所は謠曲にして其技入神の域に達し、乘馬は又幼時より修熟する處にして其蘊奧を極め、旅行是又君の一種の性

三

辯にして富岳男體山等に登嶽せるもの屢々なりと云へは又以て多技の人たるを知るべし

君の教育事業に心を傾け人材養成に意を致せるは謙者の嘆稱して措かざる所舊領香川縣比較的進歩の地位を占むるもの君が同縣教育會長として盡瘁せる功績の反應たらずんばあらず、君が將來帝國に與ふべき功勳の偉大なるべきは吾人の敢て疑を存せざる所なり、(本郷區元町一の一電話下谷七八四)

伯爵 伊達 宗基君

當家は關八州に武威を輝かし、獨眼龍の名を萬代の後に迄赫々たらしめたる偉傑、伊達政宗公の末裔にして公の嫡子忠宗家を繼ぎ其子綱宗を経て從四位綱村に至る、綱村二歳にして封家を繼ぐや幼にして政治を見ること能はず、幕府の命に依て伊達宗勝田村宗良の二氏國政を掌る、宗勝叔父の權を以て驕恣なりしが原田甲斐なるもの之を幫助し邦家當に危からんとするや、伊達安藝以下賊忠の義士身を以て君家を保

護し、正邦瞭然たるに至て始めて國家の安寧を得たり、綱村聰明穎智にして治績大に揚り文武の講修甚だ隆盛を極めたり、其子吉村より八世の孫に至る迄奥州の地六十二萬石餘の封を襲き大諸侯の首班に列し、勢望大に高かりしも正四位慶邦氏に至り、維新の際方向を誤り會津藩主松平容保氏と共に王師に抗したるを以て官位を止め城地を沒收せらる、後從五位に敘せらる、君其二男にして慶應二年七月十五日を以て生る、幼名を宣三郎又は龜三郎後ち健千代磨と云ふ、明治元年家督を相續し陸前仙臺に於て二十八萬石を領せり、同二年上表して藩籍を奉還し同十七年七月伯爵を授けらる、君は最も仁慈博愛の情に富まれ明治二十二年第二高等中學校創立費として金五千圓を寄附し、二十七年軍資金として金三千圓を献納し、二十八年仙臺避病院敷地として畑宅地三千二百四十坪餘を寄附し、同二十九年三陸海嘯に付金千圓救恤、三十七八年從軍者家族扶助費として金千二百五十圓寄附、同三十五年宮城、岩手二縣凶作に付金千六百圓賑恤、三十八年宮城縣凶作救助として銀三百五十石寄附等に依り金銀木杯を賜はる、其他献納寄附枚舉

に違わらず、仁慈篤厚の精神として世の推重を得るや大なり、眞に國民の儀範たるに耻ぢざるなり、(府下荏原郡大井町二四八電話芝四三六)

子爵 秋元 興朝君

華胄雲上社界の儀範として名聲内外に噴々たる子爵秋元興朝君夙に顯明の資を以て身を國家の開發に委ね、上 天皇の大權を擁護し奉り下萬民の福祉を増進す、寔に明治聖世の良臣報効の規範たるもの也、聞く當家は内大臣藤原鎌足公の後裔にして十二世關白大政大臣兼道公の後なり、大久保頼綱の長男左衛門次郎泰業弱冠故あつて別に一家を創立し、嘉祿年間上總國秋元庄を領せり因て以て姓となす、爾後數世長朝に至り徳川家康に仕へ上毛總社に居す、慶長年間關ヶ原の役に當て徳川家の命を奉し會津に赴き智略縱横上杉の勢をして白河關を踰ゆる事を得さらしむ、其後甲州谷村より武州川越に移封せらる、其より六世を経て禮朝に至る、禮朝勤王の志厚く錦旗を奉して奥羽の野に轉戦

し屢々奇功を奏せり、鎮定後賞典祿壹萬石を賜はる、其の病を得て退隱するや、君戸田子爵家より入て家督を相續せらる、幼名を和三郎と稱し安政四年五月を以て呱呱を擧ぐ、資性明敏にして活達、夙に和漢洋の諸書に精通せり、早くも海外事情を精査し外國通を以て同人間に推尊せらる、明治十六年巴里公使館書記生となり尋て獨逸伯林府に留學し大に得る所あつて同十八年母國の人となり、暫く故郷の山水に親しみしも、同二十五年辨理公使の重任を帯び更に進んで特命全權公使と爲り、遣外使臣の大命を拜し、我帝國の地位をして九鼎大呂の重を致したるもの其功績擧て數ふ可けんや、後感する所あつて冠を掛けて在野の人となりしも政界の混濁見るに忍びざるものあり、奮然起て伊藤公と共に政友會を組織して其牛耳を探り政界の革新を施さんとす、其功亦偉ならずとせんや、後明治四十一年同族間の英材を率ひ談話會を組織して官僚政治の弊を矯正せんとす、今や談話會の領袖として天下の重望を繫ぎ上院中の一權威者として硬派の旗幟を翻へしつゝあり、其地位より謂へば子爵の榮に在り、政界より謂へば一派の領袖たり、



而して赤誠を披瀝して天下國家に殉せんとす、誰か其の皓潔の志操に感佩せざるものあらんや、

現今政黨に關する所謂志士なるもの大に昔日と觀を異にして利祿の下に蟻集して其殘肴を舐るの陋を學はんとす、曰く盲從、曰く獵官、曰く默契、吾人又謂ふに忍びざるなり、

此の時此の際君の如き純潔の公子の蹶起を見る是れ帝國臣民の齊しく歡呼を放つ所以ならずや、

子爵が現今及將來の立場として濁流に其纓を洗ふの困難を生すべきは識者の夙に諒とする所、希くは大旗の下に我五千萬の生靈を掩護せんことを、(神田區駿河臺北甲賀町六電話本局七二二)

内務大臣 子爵 平田東助君

君は舊米澤藩士にして嘉永二年三月を以て生る弱冠にして露國及獨逸に留學し歸朝後大學南校大舍長となり十一年大藏兼太政官書記官に任

せられ爾來累進して法制局部長、樞密院書記官長、樞密顧問官、法制局長官等に歴任し、二十三年貴族院議員に勅選、三十四年農商務大臣三十五年男爵を授けられ、四十一年七月内務大臣となり、四十四年八月依勳功特に子爵を陞授せられたり、

農商務大臣 子爵 大浦兼武君

君は舊鹿兒島藩士にして嘉永三年五月を以て生る、西南の役少尉より陸軍中尉に進み後累進して二十六年島根縣知事となり、後山口縣知事宮城縣知事を歴て警視總監に任せられ三十三年貴族院議員、三十四年再び警視總監となり、同年遞信大臣に任せらる、四十年男爵を授けられ、四十一年七月農商務大臣となり、四十四年八月依勳功特に子爵を陞授せられたり、

子爵 牧野貞寧君

當家は孝元天皇の後胤武内宿禰の裔、攝關臣の後なり、攝關臣推古天皇

の朝に當り田口朝臣の姓を賜はり、其末葉或は田口を稱し、或は牧野を稱す其遠孫牧野右馬允成定に至り徳川家康に仕へ三河國牛窪の城主と爲る、其子康成屢々軍功あり其子忠成封を越後國長岡に移す、忠成の弟成儀越中守と稱す將軍秀忠、家光二世に仕へ別家を起す是れ實に當家の始祖たり、其子成貞五代將軍綱吉に事へ補翼の功あり、天和二年下總國關宿に封せられ加増七萬三千石を食む、嫡子成春寶永二年三州吉田に移り八萬石を領す、其の後日向延岡に轉し遂に常州笠間に移封す、爾來連綿として君に至る、君は從四位貞直氏の長男にして安政四年六月十日を以て千代田城下に生る、幼名を金丸と云ふ、幼より文武に長し戊辰の役屢々藩兵を出して東北の各地に轉戦し殊功を樹つ後朝廷功を賞し金五千兩を賜はる、明治二年今の名に改め笠間藩知事となり從五位に叙せらる、同四年東京府に賞屬し知事を免す此年慶應義塾同人社に學び更に學習院に轉じ文學科及別則兼修科を卒業せらる、明治十七年七月子爵を授けらる、同二十年十二月被叙從四位三十三年三月補缺選舉に際し貴族院議員に當選せられ爾來引續き其職にあり、

明治四十四年七月の改選期に當て最多數の得點を以て當撰重任の榮を荷へり、同三十一年被叙正四位、同三十八年被叙從三位、同四十年日露事件の功に依り敍勳四等旭日小綬章を賜ふ、君資性温厚篤實博愛慈善に富み公共事業等に義捐せられし事枚舉に遑あらず、徳望隆々たるもの豈偶然ならんや、(芝區伊皿子町二四ノ一電話芝二五九七)

文部大臣 小松原英太郎君

君は岡山縣士族にして嘉永五年二月を以て生る明治十四年外務權少書記官に任じ、爾來外務少書記官兼太政官少書記官、參事院議官補兼太政官權大書記官、外務書記官(獨逸國在勤)公使館書記官、內務省參事官、內務大臣秘書官、埼玉縣知事、內務省警保局長、静岡縣知事、長崎縣知事、司法次官、內務次官、內務總務長官兼內務省官房長、錦鷄間祇候等に歷任し三十三年貴族院議員に勅任せらる、四十一年七月桂内閣の組織せらるゝや入て文部大臣となり以て現今に及べり、

工學博士 藤岡市助君

一一

夫れ泰山は一塊土より成り其高に及でや棟梁の材茲に生じ連城の玉茲に存す、大海は涓滴の水より成り其深きに及でや魚龍茲に躍り鱗介茲に湧く、人生亦然り想ふに將來盛名を天下に擧げ他人の企及すべからざる一大功業を成就するの名士は其幼時より穎脱を示すこと古今東西殆んど其轍を同ふせり、吾徒茲に傳せんと欲する君の如きは正さに如上の消息に洩れざる當代稀有の傑士たり、聞説く君は出身山口縣の人、安政四年三月十四日を以て呱呱を揚ぐ、弱冠學問を好み年齢漸やく長して青雲の志抑へ難く決然東都に來り工部大學校に入り電氣工學科を修む、明治十四年五月學術優等を以て卒業す、君在學中實修の爲往時一大難工事たる北海道雷電嶺上に完全なる電信線を架設し或は海底電線の沈架に或は陸上電線の架設に従事したるが如き蓋し君の學識手腕世人の稱讚措かざる所なり、尋で工部大學教授に任せられ官命を帯びて米國費府萬國電氣博覽會に出張して審査委員となる、此時に當り歐

米著名の大家に親炙して斯學を研磨し造詣する所多し歸朝後君は本邦に電燈事業を擴張せんとし東西に奔走し有力者を遊説す時恰かも東京銀行集會所の開業式に際す好機逸すべからずとなし、澁澤榮一氏に謀り同氏の快諾を得て爰に同所内に君の考案創製に係る發電機を裝設し食堂及餘興場に電燈を點火せり、蓋し本邦電燈使用の嚆矢なりと云ふ明治二十四年工學博士の學位を受く、是より先き明治十九年君は大學を辭し矢島作郎氏と謀り、東京電燈會社を發起し入りて技師長となり同氏に隨ひ歐米各國を巡回し専ら電燈事業を視察して歸朝せり、次で東京、京都、神戸其他各地電燈事業の勃興に盡力し大に其の手腕を揮ひ名聲頓に揚がれり、君は實業の旁はらに工科大學講師の囑托を受け、又一面には逓信省に於て電氣事業取締規則制定其他の調査委員に擧らる、君の炯眼深く期待する所あり、明治三十一年決然公私の職を辭して更に歐米各國を遊歴し、電氣鐵道水力電氣事業に關する百般事物の調査を遂げ得る所頗ふる多し、歸朝後更に小田原電氣鐵道、京濱電氣鐵道、東京電車鐵道及市街鐵道等の幾多複雑なる工案設計に従

一三

事し辛艱なる手腕を揮ひ大に世人の喝采を博せり、後又歐米各國を漫遊し高速度電氣鐵道、高架電氣鐵道等を調査し歸朝するに及んで東京大阪間高速度電氣鐵道及東京市内高架電氣鐵道等を發起せり、又内外人士の共同出資に係る東京電氣株式會社の專務取締役に推され忠實業務の發展に努め着々事業隆盛の佳境に到來せしもの蓋し君の經營其宜しきが爲ならん、尙君は屢に京橋區瀧山町に藤岡電氣事務所を設置し電氣事業發起者の顧問機關に供せしに内外起業者競て君の門に出入し君の教示を乞ふもの絶ゆることなしと云ふ君人と爲り温良篤實頗ぶる君子の風采に富み世俗の濁流に泥まず超然自家の本領に據つて終始一貫斯界の向上發展の爲めに努力を重ねつゝあり、(麻布區東町二四電話芝五四〇)

實業家 神谷傳兵衛君

凡そ成功の秘訣は誠實、忍耐、勤勉の三要素を具備し、先見の明識を有するにありとは普通一般に通用せられつゝある常套訓誨たり、而も

突飛的なる大成功に至つては既に此の範圍を超越して一種不可思議の緣由に依り偶然の動機が天運の光明に接し前途の荆棘を啓て滔々盛況の域に達し遂に空前の偉業を完成するに至る、是れ古今東西の歴史に徴して明瞭なる所なり茲に傳せんとする神谷傳兵衛君の如き固より誠實、忍耐、勤勉、先見等の資に乏しからずと雖も、其成效の事蹟を案するに恰も天の暗示に因り何等かの先導に従て着々幸運の域に達せる所謂天授の秘鑰に接せるの觀なき能はざるなり、其事業が偶然の結果より生じ、其成功が空前の効果を收めたる事實より見れば當に人間以外の偉力が前途を啓發したるを窺知するに難からざるなり、抑も君は三河國幡豆郡衣崎松木島村の人神谷兵助氏の七男にして其祖先は名族宇都宮氏の末裔驍將神谷石見守高正の五男同姓高春より出て後遂に歸農して同地の平民と伍するに至れるものなり、君往年祖先以來の事蹟を探究し、神谷氏を稱する宗支の關係を有する數家の爲め谷中天王寺々内に一基の墓碑を建立し、法要を供し、亡靈を吊慰せりと傳ふ君は元どかく由緒ある名家に生れ乍ら空しく農桑の間に生涯を終

らん事を慨し、常に鵬翼を張らんと欲せしも不幸多病脆弱にして活動する能はず、空しく大志を抱懐して槽檻の間に蛭伏するに至れり、年齒十五歳の頃は腰部及腹部の劇痛甚だしく如何なる名醫も施すに術なく殆んど絶望の淵に陥れり、當時未開野蠻の弊風上下を浸潤する折柄とて是れ物の怪、亡霊の祟りなりと唱へて俗に所謂百萬遍なるものを修し、其怪異の離脱を謀らんとせしこと幾回なるを知らず、而も其當時は少しも効驗なく不治の難病として放抛するの已むなきに至れり、後一時病勢の減退せしより好める漁魚の爲め近海に棹して雑魚を捕獲し以て唯一の快樂となせり、或夜例の如く漁具を携へて出漁したるに大に得る所あり、一時休憩を爲さんとして近傍の一小島に至り一睡の夢を結びし間に其傍らに置きたる網を始め其他の漁具を紛失せり、君悄然として家に歸れば紛失せし漁具は既に自家に在り老母は此の不可思議の出来事に就て大に見る處あり、君を戒めて爾來決して出漁すべからず、且魚類等を食ふに當て骨を捨つ可からざる旨を告げ、人道の眞義を訓諭せり、君此の訓戒に心服して以來漁魚を廢し且魚類は凡て

骨を捨てずして食ふを以て例とせり、君か長上の言を信じ敬虔の徳を備ふること斯の如し、其凡庸一俗の人にあらざる以て推知すべきなり君齡十八歳にして横濱に出で、某商店に仕ふるに當り不幸にして稍治癒せんとせし腹部劇痛の病軀は再び發して苦痛に堪へず、在港の名醫に診療を乞ふも例に因て如何ともなし難く唯一の方法として葡萄酒の飲用を爲して身體の健康を保ち自然治癒の時期を待つの外なきを注意せらる、是に於て君は葡萄酒を購求して飲用したるに精神爽快にして一時病苦を忘るゝの効驗あり、而して其葡萄酒たるや多く舶來品にして價格甚だ不廉なるを以て到底薄給の身に在ては常用するに苦むや大なり、君是に於て千思萬考して遂に日本在來の葡萄より精製するの方法を或る西洋人より傳習し、遂に精良純潔にして奏効顯著なる葡萄酒を醸造するに至れり、君是を飲用するに西洋舶來のものに比して更に遜色なく疾病爲めに大に快癒に傾けり、明治十二年君蹶起して帝都に上り淺草區花川戸町に居をトし、一小酒舖を開始せり、偶々友人の德憑に因り葡萄酒の發賣を爲したるに其始

めや微々として振はず、少量の醸造を以て満足せり、君當時の状況を語て曰く、現今より見れば實に繪にも嘶しにもならざる次第にて或る年の如きは僅か五斗の醸造を以て最上の成績なりとして満足したることありと、以て如何に當時規模の小なりしかを窺ふ可し、君又語て曰く、葡萄酒の發賣を爲すに當り先以て是に名稱を附せざる可からず、其命に當て又大に困し、み考慮數日遂に嚴父の雅號香竄なるを想起し、其號を採て香竄葡萄酒と稱せりと、是れ單純なる理由なりと雖も君の孝心の深厚なる志操の堅實なるを窺知するに難からざるなり、爾來時運は滔々として展開し、文化の美風は朝野に普く衛生思想の遂次發達するに及び、葡萄酒飲用の利益は病原を去り健康を保維する唯一の滋養興奮劑なるを悟るに至り、需用者俄かに激増して供給爲めに追はるゝ盛況を呈するに及び、最も一面近藤利兵衛氏の協力亦與て偉大の力ありしは世の認むる所なりと雖も亦以て君の企畫機宜に適せるに基因せずんばならず、今や香竄葡萄酒の名は全國に普ねく如何なる山村僻地に至るも之を知らざるものなく、又其奏効偉大なるを試みざ

るものなきの状況に至れり、君は尙其隱匿に就て改善の道を講じ、日夜苦慮を重ねつゝあり、

往年君肩胸の邊に屢々疼痛を感じて毎夜按摩の療治を経ざれば安眠すること能はず、最も不可思議の事實として其原因討究中なりしに一昨四十二年に至り、偶然にも胸邊に當て一小腫物の生ずるあり、精研堂醫院に至り、院長栗本學士の治療を乞ふに栗本學士是を診察して曰く腫物は儘かに針様のものを含めりと、君笑て其理由なきを語る、栗本學士然らば是を抜き取らんとて浴術を施せば果して一本の縫針錐を生じて數年體內に止まりし面影を存して抜け出でたり、是に於て君不可思議に堪へず、少壯時代を回顧すれば十二歳の時過て針球を踏み敷本の針は足部に止まり、次第に昇進して腰部より背部を経て肩に至り而て胸邊に來り、茲に始めて外部に顯はれたるものなるを知り、數十年來疼痛に困しみしも全く此の針一本のむざなるを悟り、今や釋然として多年のなぞを解することを得たりと云ふ、

即ち此の針一本が香竄葡萄酒を生み出し、君亦此不可思議なる事由によりて家運隆昌の基を開きたり、實に葡萄酒と君とは何等かの暗示默契ありし理由を知る可く更に亦君の不可思議の天恵に浴したるを知ることを得ん、

二〇

君は又明治三十年頃より茨城縣下牛久に於て數百町歩の葡萄園を拓き模範的設備を完成し、更に牛久生葡萄酒の命名の下に近藤商店より發賣を爲せるに是又大に社會の歡迎を得て日に殷盛を見るに至れり、是れ等葡萄酒は内外國の博覽會、共進會等に出品して名譽金銀賞牌を受領せるもの枚舉に遑あらず、今や海外各國にまで輸出せられて販路愈々擴大に涉れり、

君又酒精製造に盡瘁し、明治二十六年本所中之郷に酒精製造所を設置し盛に其製造販賣を爲し、更に北海道旭川の一角に地を相し宏莊雄大なる酒精製造所を建設し、外國最近の發明に係る新規の機械を輸入して盛に酒精及び醸造を爲し、令兄桂助氏をして是が監督の任に當らしむ又化學の大斗宇都宮三郎氏の説に基き芝區三田に酒精試験所を設立し

純良なる日本酢及西洋酢を併せて製造しつゝあり、

此の他養豚業、石油事業等に於ても効果を收め、現今尙、旭製藥株式會社に一臂の力を割きつゝあり、

斯の如く君の事業は年と共に發展して家運隆盛を招致し、數百萬の巨財を積み天下第一流の豪富に伍するに至れり、

君公共事業に多大の功勞少からず、殊に明治三十七八年日露戰役の際に當て金銀器物及貴金屬美術品等を集め悉く是を日本銀行に提供して戰役資金の補給に努めたるに至ては最も人の爲し難き所、至誠義烈の士にあらずんば焉ぞ斯の如き皓潔の舉に出でんや、

君又仁慈博愛の情に富み、店員手代用人に至る迄、常に愛憐の至情を以て優遇し後進發達の路を啓き最も懇切を極めたり、尙明治四十四年日本濟生會の舉を賛し金壹萬圓の義捐を爲せり、亦以て人格如何を窺ふに難からざるなり、

君か舊時奮闘せられたる苦辛の狀況を留めて後世子孫の戒めとなさんとし、當時着用せし盲縞の衣類を貯藏して寶物とせらると聞く、亦以

二一

て子孫訓誨の實を得たりと謂はざる可けんや、

噫此の空前の大成功者天資の幸福を一身に集め、常に忠孝節義を守り  
仁慈博愛を旨とし、至誠天を動かし、篤行人を感動せしむ、隆々とし  
て盛況を極むるもの豈偶然ならんや、(邸 本所區向島須崎町一八電話  
下谷六七三、店 淺草區花川戸町二電話下谷六一二)

### 實業家 千葉松兵衛君

温厚篤實の風貌は以て社會の重望を繋ぎ、機智縦横の才氣は以て商業  
の發展を策す、斯界の重鎮たるもの誰か是に匹儔すべきものあらんや  
煙草官營以前銀座の一角に據て村井及岩谷の諸氏と相拮抗して更に一  
段の光輝を放ち、當時の識者をして嘆賞せしめたる美譽あり、現代實  
業界の明星として推敬するもの豈偶然ならんや、

君は先代松兵衛氏の長男にして元治元年一月二十四日を以て生る、幼  
にして明敏、年十有四歳にして出て京橋區東港町の煙草問屋渡邊三吉

氏に仕へ、精勵群を抜き機智同儕を歴し、主家の信認大に厚かりしも  
不幸主人の病没に遭遇して家に歸り、殿父の事業を補佐して孜々とし  
て勉め、營々として勵み以て家運の隆盛を計れり、君殿君と謀り「大  
江戸」なる細巻煙草を製造して廣く販賣を爲し以て輸入煙草を防遏せ  
んとせしも或る支障の爲めに失敗に歸し、久しく恨を吞んで時機の熟  
せるを待ち、翌明治十八年家督を相續して徐ろに發展の準備を計れり  
是れ恰も蛟龍の雨を望んで翔翹の機を窺ふに似たり、先づ「牡丹」印と  
稱せる紙巻煙草の製造を開始せり、當時君の氣概は最も旺盛にして外  
國煙草を壓倒せんこと其方寸の内にとし、此の信念は寸時も其襟  
懷より脱せざりき、先づ原料を輸入して着々効果を收めんと企畫し、  
木村勝氏と協力一致して、同三十一年七月合名會社木村商店を組織し  
奮戦苦闘せられて輸入煙草を壓迫せり、其商風の機敏なりしは世の齊  
しく驚嘆する所なり、爾後皇太子殿下の御慶事記念として「菊世界」なる  
純精佳良なる巻煙草を發賣して社會の歡迎を受け、滔々として新流行  
を見るに至り、さしも健剛なりし岩谷天狗、村井ヒーローの堅壘を壓



し、空しく後に堂若たらしめたり、後木村商店を解散し、専ら自家經營に努め益々隆昌の域に到達せり、後煙草官營の舉あるや、茲に一切の事業を擧げて政府に引渡し、爾來銀座の店舗は和洋煙草、雜貨等の販賣を爲しつゝあり、

君は功成り名遂げて今や閑地に就き、銀座の商店は新進氣鋭に富める令息千葉直五郎氏をして營業の全權を管せしめつゝあり、茲に吾人が最も推敬に堪へざるは君の人を見るの明鑑と、人を容るゝの宏量とを備へらるゝ一事なり、自家營業の一切を令息直五郎氏に委して其手腕を發揮せしめて益々其彩華を放たしめ、又彼の薩摩原頭に一大工場を有して丁々の音日夕絶へず、規模の廣大を以て有名なる池貝鐵工所主池貝庄太郎氏の人格を信じ、大部の資産を注入して同氏の發達を援助し、多成功の偉大を告げしめたるは世の嘆服して措かざる所現今其の相談役顧問の地位にあり、而して池貝鐵工場が其の表面に顯はれたる事實としては令弟千葉恒次郎氏取締役として業務擔當の衝に當り、池貝庄太郎氏松尾彌太郎氏外三氏と共に合同出資を以て組織し

恒次郎氏は現に築地に居住して君家の經濟、出納を擔任せるを以て關係上君は同所の出資者たる資格を有し、樞機に參畫せられつゝある所になり、同所は果して年々隆昌を極め、一の損害だも生ぜざるは君が最も信仰せる天地金之神の威徳に因るものならんか、君は元と精神上の安心立命を得んと欲し、佛教、儒道、耶蘇教、又は陶宮術、天源術等に至る迄、研究を重ね、能く其濫奥を叩き造詣頗る深厚なり、而も以て足れりとせず、多年研鑽を経たる結果として日本の國粹より流露せる、金光教即ち教祖金光大神の遺訓を以て適切な教理なりと爲し其布教に盡瘁せられつゝあり、現今宗教界の陋弊其極に達し、混沌として玉石を辨せず、淫祠邪教の跋扈するに當り、君の如き皓潔の人士が熱心其矯弊に努め、真理適切な教訓を世に與へんとするは吾人の感佩に堪へざる所なり、

家庭は父母を始め令息夫妻に至るまで三夫婦とも健在して最も融和圓滿、渾然として靄氣堂に滿つ、是皆宗教信念の然らしむる所たるは敢て疑を入れず、社會人士が君に學ぶ所あらば天下の福祉又何物か是に

加へん。

二六

君は天地唯一金の神の存在を認め、敬虔の念厚く精神修養の徹底を極め、獨り其安心立命を得るを以て足れりとせず、吾人々類と共に其の福祉を分たんとす、殊に我國未だ國教なるものなきを歎じ、各種宗教の原理を究め金光教即ち天地金の神の偉力廣大なるを知り、同宗を天下に流布し以て其恩恵に浴せしめんとす、其志や偉なりと謂ふ可し、曾て早田玄洞氏が著述せし「金光教側面觀中、立教の由來、中の部」に「吾等は金光教々祖の遺訓と佐藤教正の著書とを讀み、立教開旨の初に當り、教祖の心靈が二個の動機に接觸せるを認む、即ち其一は當時の神官僧侶が全く自己の本分を忘却し、迷妄の説を以て人心を蠱惑するを憤慨するに出で、其二は當時の人心は墮落を重ね、殆んど人間の間たる價值を失墜せんとするを心配したが、金光教開立の理由となつて居る、彼は一世の衆生を迷途に引入れんとするの惡魔、即ち當時の神官僧侶輩の前面に大手を廣げて、汝の本分に歸れと命令し、又一世の衆生惑溺の淵頭に立つて其慈悲の手を垂れて我にすがれ、我汝

に轉迷開悟の法を與へんと叫び出したものである」此の一節あるに及んで吾人は金光教の興りたる由來を窺ふを得たり、

佐藤範雄氏著「説教十座」は神誠神訓の眞義を布愆して一讀明了ならしめたるもの、而も金光大神の遺訓たる神誠神訓を誦せば其教理の明晰たるべきを以て其全文を掲げん

### 眞道の心得 (十二戒)

一神國の人に生れて神と皇上との大恩を知らぬ事、一天の恩を知りて地の恩を知らぬ事、一幼少の時を忘れて親に不孝の事、一眞の道に居ながら眞の道を履まぬ事、一口に眞を語りつゝ心に眞の無き事、一我身の苦難を知らぬ事、一人の不行狀を見て我身の不行狀になる事、一物毎に時節を待たず苦をする事、一壯健な時家業を疎にし物毎に驕る事、一信心する人の眞の信心なき事、

### 道教の大綱

一今月今日と一心に頼めおかげは和賀心にあり、一疑ひを離れて廣き

二七

眞の大道を開き見よ我身は神徳の中にいかされてあり、一生きても死ても天と地とは我住家と思へよ、一天にまかせよ地にすがれよ、一神は我本體の大祖ぞ信心は親に孝行するもおなじ事、一神は晝夜も遠きも近きも問はざるものを信頼心に隔なく祈れ、一清き所も穢き所も隔てなく天地の神は御守あるぞ我心に不浄を犯すな、一表行よりは心行をせよ、一大地の内に於て金の神の大徳に洩るゝ處はなき事ぞ、一御地内をみだりに穢すなよ、一今より何事にも方位は忌す我教の昔に復れよ、一我身は我身ながら皆神と皇上との身と思ひ知れよ、一食物は皆人の命の爲に天地の神の造り與へ給ふものぞ、一神信心して靈験の顯を不思議とはいふまじきものぞ、一信心して靈験のなき時は是ぞ不思議なる事ぞ、一我信する神ばかり尊で餘の神を侮る事なかれ、一信心する人の眞の神徳を知らぬ事、一慾得にふけりて身を苦しむる事なかれ、一四季の變はりは人の力に及ばぬ事ぞ物事時節に任せよ、一天地の事は人の眼をもて知りて知り難きものを恐るべし恐るべし

## 信心の心得

一信心は家内に不和の無きが元なり、一眞の道に入れば第一に心の疑の雲を拂へよ、一眞に難有と思ふ心は眞に靈験の始なり、一神徳を受けよ人徳を得よ、一いきたくば神徳を積で長生をせよ、一我心で我身を救ひ助けよ、一信心する人は何事にも眞心になれよ、一眞の道を行く人は肉眼を置て心眼を開けよ、一神の恵を人知らず親の心を知らず、一神信心の無き人は親に孝の無きも人の道を知らぬも同事ぞや、一我情我慾を放れて眞の道を知れよ、一我心で我身をいかす事もあり殺す事もあり、一大酒大食するは絶食の元になるぞ、一食物は我心で毒にも薬にもなるものぞ、一何を喰にも飲にも難有頂く心を忘れなよ一體の丈夫を願へ、一體を作れ何事も體が元なり、一心配する心で信心をせよ、一障子一とへがまゝならぬ人の身ぞ、一まめなとも信心の油断をすな、一信心は本心の玉を研くものぞや、一若い者は本心の柱に虫を入らせなよ、一まん心が大けがのもととなり、一要小心せよ我心の鬼が我身をせめるぞ、一討向ふ者には負て時節に任せ、一過ぎたる事を思ひ出して腹立苦をするなよ、一心で憎で口で愛すなよ、一信心す

る人は常に守を心に懸て居れよ、一心に懸る守は穢るゝ事は無きものぞ、一我子の可愛さを知りて神の氏子を守りくださる事を悟れよ、一信心してまめで家業を務めよ君の爲なり國の爲なり、一不淨の有る時は先にことわり置て願ある事を頼めよ、一人の身が大事か我身が大事か人も我身も皆人、一天が下に他人といふ事は無きものぞ、一蔭と日なたの心を持つなよ、一縁談に相性を改め見合より信の心を見合よ、一家柄人筋を改めるより互に人情がらを改めよ、一子を産は我力で産とは思ふな皆大祖神の恵む處ぞ、一懐妊の時腹帯をするより心に眞の帯をせよ、一出産の時よかり物によかるより神に心を任せよかれよ、一疑ひを去て信心して見よ靈驗は我心にあり、一我身が我自由に成らぬものぞ、一忌穢は我心で犯す事もあり拂ふ事もあり、一祈て靈驗の在るも無きも我心なり、一要心は前から倒れぬ内の杖ぞ、一悪い事をいうて待つなよ先を樂しめ、一やれ痛やといふ心で難有や今靈驗をといふ心になれよ、一神の教も眞の道も知らぬ人のあはれさ、一神は聲もなしかたちも見えず疑は限りなし恐る可し疑を去れよ、一真心の道

を迷はず失はず末の末まで教へ傳へよ、

以上神誠神訓にして立教の緣由亦是に存せり、同宗が開始以來僅々五六十年の短日月にして滔々天下に流布せられ、東京大坂の中央大都を初め西は九陞筑紫の端より北は北海の荒原に至るまで各國各地に分教會を設け、現に百五十二萬人の信徒を有せり、

君は即ち同宗の信徒にして最も發展盡瘁の勞を執り、巨資を投じて布教に勤む尙明治四十四年濟生會の組織せらるゝや金一萬圓を納付して其舉を賛す、君の如き篤行の士は現代多く見ざる所なり、宜なり徳望隆々名聲赫々として帝都に異彩を放ちつゝあるや、眞に敬すべく仰ぐ可き皓潔の紳士ならずや、(店 京橋區銀座一ノ四電話京橋長一〇五六 邸京橋區白魚川岸三九號地電話京橋二〇六)

池貝鐵工  
所長

池貝庄太郎君

帝國工業界に一頭地を抜き製品の正確と信用の豊富とを以て名聲籍甚

たる池貝鐵工所は鋭意其發展に力め、石油發動機工業用機械其他海軍省必需品等に向て益々改善の實を擧げ、常に顧客主義精力主義等を發揮して専ら社會の公益を企畫せられつゝあり、而して其盛況を招致せるもの社長池貝庄太郎君以下高級幹部諸氏の奮闘機宜を得たるに基因せずんばあらざるなり。

抑も社長池貝庄太郎君は東京市の人明治二年十月廿三日日本郷區妻戀町に於て生る父を重右衛門氏と稱し君は其長男なり、年齒十四の若齡を以て横濱西村器械製造所に入り、辛苦艱難を事ともせず、匪勉精勵同儕を抜き居ること三歳にして略其技に通せり、更に芝浦田中工場に轉じて努力數年技大に熟せり、明治二十三年十一月獨立自營を以て金杉河口に工場を創設せり、是れ現今盛運の萌芽たりしなり、次に柴井町に移住し業務愈々盛に家運益々揚れり、同三十四年更に一大工場を建設し一層の勇躍を爲すに至れり、是れ現今の工場店舗たるものなり、明治三十九年時運の趨勢を洞觀して組織を變更し、合資會社となし池貝鐵工所と稱するに至れり、資性温厚篤實にして仁慈の志深く、常に

部下を憐み其發達を企畫す、故に一片の不平を唱ふるものなく一致協力以て事業の發展に努力す、近來他の不景氣を嘆ずるに反し、洋々以て盛運を招きつゝあるもの豈所以なしとせんや、

君が始めて同所相談役千葉松兵衛氏と相知るは巻煙草器械の製造に於て君が手腕を發揮したるに因てなり、爾後千葉氏と交情親密を加へ、意志自から疏通して遂に其協力に依り合資組織を以て發展を見るに至りしなり、千葉氏君を評して曰く其温厚にして宏量なるは自から人を以て欣慕せしめ、緻密にして精勵なるは自から業務の進捗を招致す、斯の如きは當代稀有の實業家なりと眞に肯綮を得たるものなり、現今君外五氏の合資に因て一層の發展を爲し、君當面の責務に當り諸氏は是を補翼し、一致の歩調を以て益々歩武を進む、些少の瑕瑾なく些少の不平なきは同所の誇りとする所にして盛運の由來又是に歸せずんばあらず、

君又敬神の志厚く金光敎祖金光大神を其邸内に奉祠し毎歲祭典を執行し以て盛運を謝せり、又以て當代有數の實業家と謂ふ可し、(芝區三田

## 實業家 梅屋 庄吉君

君が突如として中央帝都に名聲を大ならしめたるものは、活動寫眞の「フィルム」製造を以て名あるM「バライ」商會の隆盛を極めたるに基因せり。抑もM「バライ」商會は其の自營を以て帝都の一角に活動寫眞の常設館を設け嶄新奇抜の趣向を以て最も闡明なる映畫をなせるに因て社會の高評を博し、一面映畫に要する「フィルム」を最低の廉價を以て同業者間に供給するに因て名聲噴々たるに至れり。由來活動寫眞は社會の狀態人情の機微其の他一切萬物の一舉一動に至る迄苟も其機械の鏡裏に映じ來るものは餘す所なく紹介せるを以て其の興味津津々たること決して講談説話、稗史小説、書畫演劇等の比にあらず。故に觀客に感動を與ふる所甚だ深刻を極む。茲に於て乎君大に悟る所あり。徒らに猥醜陋體を映せば一時觀客の感興を惹くことを得べきも風教の上に於て意外の大害を醸すや必せり。如かず是を教育上の機關として適切有益の

方法に利用せんにはと爾來舊思想を打破して専ら社會の進運に貢献せんとす。試みに其寫映を一瞥すれば世界萬國の人情風俗より珍奇の出來事、人事上の轉化變動苟も勸善懲惡の資料教育上必要なるものに係り、人目を娛しましめ、人心を歎ばしむるものは一として其の映畫に上らざるはなく、殊に意匠の巧妙、映畫の鮮明なるは社會の公評たり。彼の俳優講談師輩が教導職の榮譽を荷ふに於ては活動寫眞從業者は、より以上の榮譽を保たざる可からず。吾人は君の如き皓潔の志操を以て義俠心の旺盛なる俊才を得たるを喜ぶ。斯界の發展向上は益し遠きにあらざるべし。

聞く君は本性本多と稱し明治元年十月二十六日を以て生る。累世水戸藩に仕へて名門たり。稍長するに及んで長崎に赴き専ら貿易事業に従事せしも其不羈磊落の性情と鬱勃たる青春の意氣とは遂に君を驅て海外渡航の壯舉を企てせしめぬ。爾來幾多の事業を経營し、猛烈なる緒突的邁進は目的の徹底を見ずんば止まず。即ち香港新嘉坡を根據地となし、馬來半島、南洋諸島に亘て一大勢力を扶植し、遂に一大資産を

築造するを得たり、されど性來の義侠は屢々在留同胞の爲めに聲援を與へ、異境に成功の好果を奏せしもの甚だ尠からず、本邦冒險家、旅行家及志士が同地を通過するに當て私財を投じて其素志を果たさしめたるもの又鮮少なからず、是等の逸話は大和精華の美談として今尙は識者の間に喧傳せられつゝあり、後年香港皇后街に寫眞舖を經營せられしが偶々活動寫眞の前途に着目し、之が研究を遂げ機を見て興行を開始するや大に社會の喝采を博し利益又隨て鮮少なからざりしも計らず外人と一大競争を始め、苦戰奮闘を重ね奇策縦横の敏腕を揮て遂ひに彼を壓倒せり、明治三十八年の頃歸朝して母國の人となり、間もなくM「バタイ」會社を組織し、茲に始めて意義ある新生活に入るを得たり、君が斯界に有する崇高の見地は超然として群を抜き活動寫眞と教育の關係を立脚地とし弊風を矯正し、眞乎大和民族の精華を扶植し、文明的新思想を涵養せんと企圖せり、近來又M「バタイ」株式會社を組織し一大資本を以て其の目的の貫徹を遂げんと期し目下創立委員長として努力を重ねつゝあり、君が經歷の梗概は斯の如し、其の手腕の敏活なる

は電光石火の慨ありて眞に端腕に苦む、而して宗教崇拜の念厚く遠門教の玄理を究めて精神の修養を積み自信力の厚き常に勇往邁進して荷も遂げずんば已まざるの氣慨あり、些々たる成功些々たる失敗の如きは更に其眼中に存せず大度宏量眞に敬服に堪たり、而も其人格の瀟洒閑雅なる實に貴公子の風貌を備へ一見直ちに上流社會の縉紳たるを知る可く幾多商戰場裡を往來して櫛風沐雨の境涯を辿りたるを疑ふものあり、此の瀟柳の質を以て此の大名を成す又昔時の張子房を偲ばずんばあらず、とまれ當代實業界の好典型たるを失はず、吾人は其理想の實現せられて大發展を見るの日を期待せずんばあらざるなり、(北多摩郡大久保百人町三五〇電話番町二一八五)

西部軌道株式會社常務取締役

實業家 中村源次郎君

人生は意氣を尊ぶ、意氣は人間の價值……禍福は拘へる繩の如く、成敗は固く是天の數……天運の循環人事の消長豈夫れ限りある人力

の以て能く制し得る所ならんや、唯理に従ひ義に斷じ人事を盡して止まんのみ、我中村源次郎君の經歷は最も起伏に富み榮枯地を換へ盛衰時に變ず、而も一貫せる任俠義奮は最後の胤を得て紳士の班に列して家聲大に揚れり、君は元と名門の出、若冠既に備さに世の辛酸を嘗むれり、伯父村瀬秀甫氏に就て圍碁を學び技大に熟して碁品有段たるに至り、後感する所在つて實業界の人となり、爾來悲風慘雨、紅淚千條、熱々世の辛辣に泣き、澎湃濤々たる蒼海の一粟以て頼るなきを歎じ放浪定めなき羈旅にそいろ前途の茫漠たるを悲しみしも勇往邁進倒れて後已むの氣概を鼓舞し、臥薪嘗膽、夙起宵寢はものは有らん限りの艱難と苦闘し、鬼神の働き非凡の勇氣能く運命を開拓して茲に一道の光明を認め遂に成功の月桂冠を頂くに至れり

抑も君家は忠勇義烈の模範たる楠公の正系にして楠正秀の末裔なり、正秀信州芋川の城主として威望最も高かりしも後世に至て亡命して同國柏原の地に隱遁し、歸農して中村姓を冠せり、爾來連綿として同地の舊族を以て稱せらる、伯父權右衛門氏今尙同地に健在せり、君の嚴

父分家して江戸小石川に一家を創設す、君は明治元年五月十八日府下板橋に於て生れ、天資穎明にして任俠の氣眉宇の間に顯はる、幼にして村瀬秀甫氏に寄寓して碁道を學び、後實業界に入て百難に遭遇すること筆紙の能く盡す所にあらず、後請負業に従事して稍頭角を顯はすに至り、一面信託業を創始し、奮闘例に因て電光石火を欺き、奇智縱横當に端睨すべからざるものあり、任俠にして愛憐の情深く、世の信認を得ること大に、順境に進むの歩武は滑車の軌道を馳するに似たり、帝都の西郊堀之内への通路は人車織るが如く繁雜熱鬧を極むと雖も交通機關不備の爲め其不便を感ずるや大なり、君此の盛況を察して鐵道の布設を計畫し堀之内軌道株式會社と名け東西に奔馳して株主募集に着手せしに恰も時運に投じて應募者多敷を占むるに至れり、元來同鐵道は新宿を起點として堀之内荻窪を経て田無町に通ずる短線なるも經濟界の變遷、商況の不振不可抗力の支障に因て困難を來たし、一たび倒壊の悲運に接せんとせしも君の奮闘尙能く其命脈を繋ぎ、更に西武軌道株式會社と改稱し、大部分の資本は君の投資に因て成り、苦戰奮



四〇  
圖を繼續して以て工事の竣工を告げ、既に涼鐘車、客車等の設備を終はり、不日開通の式典を舉げんとす、吾人は君の功勞の偉大なるに感謝せずんばならず、尙其地所部は郡部に亘りて莫大の土地を所有管理して最も盛況を極めつゝありと傳ふ、君の忍耐力行、至誠一貫の熱實は能く幾多の障礙を排除して洋々たる現今の成功を告ぐるに至りぬ、誰か其精力の非凡なるに感嘆の聲を發せざるものあらんや、當代實業界の飛將軍を以て稱するもの亦偶然ならざるを知る可し、(本所區小梅瓦町一二電話下谷二五二三、別邸淺草區下平右衛門町二六電話下谷三九八二)

### 本 多 忠 保 君

帝都印刷界の老雄として誣はれ夙に凸版會社を創立して斯界に一新を劃し、名聲隆々たる本多忠保君は舊幕臣岡部駿河守の二男にして安政元年五月を以て生る、十三歳にして出で、本多雪山氏の養子となり其姓を冒せり、明治五年研學の爲め横濱に至り修文館に入つて外國語を

研修し、學績大に良好にして常に同窓の推す所となり、居ること數年其業を卒るや、明治十一年印刷局に奉仕し、當時の御雇教師たる外人「キヨソチ」氏と共に印刷事業の發展を計り、研究を重ねること數年技大に進めり、明治二十四年「キヨソチ」氏解僱歸國せるにより、爾來後繼者として事實上の責に當り、精勵努力を爲すこと數星霜上下の信望多大なるに至れり、明治三十二年感悟する處あつて冠を掛け、同三十三年河合辰太郎氏と謀り資本金四萬一千圓を以て凸版印刷合資會社を創立せり、是れ凸版印刷業の嚆矢にして且つ君が驥足を我印刷界に伸ぶるの第一階梯たりしなり、君は即ち重役兼技師長として滿腔の誠意を捧げて奮闘努力せるに依て業務は益々發展擴張せられて確實なる地歩を占むるに至れり、是に於てか更に増資して二十萬圓となし、銳意其發展を計り隆昌を招致せるを以て、明治四十一年一般經濟界の不況なるにも拘はらず、一躍五十萬圓の株式會社となすに至る、君又取締役兼技師長となり、爾來の精勵は一層の盛運を來たし、現に帝都有數の印刷會社として斯界に重きを致さるゝに至れり、君が十有餘年間

同會社の爲めに盡瘁せられたる功勳は決して尠少にあらず、往年尙斯界の向上發展を計らんとし、令息を歐米各國に派遣し、其實地の演習を爲さしめ、歸來大に其革新を計らんとす、君が斯界に熱注せらるゝの偉跡は社會の既に定評ある所にして吾人が敢て贅辭を加ふるの要を見ず、君近來餘暇を利用して一管の繪筆を以て好める繪畫に數年の勞を慰せんとせらると傳ふ、其の襟懷豈羨すべきにあらずや、(本郷區向ヶ岡彌生町三電話下谷一八二四)

### 鑛業家 古河虎之助君

明治四十四年八月都下の新紙傳へて曰く、今回勳三等瑞寶章を授けられたる古河虎之助氏は國家教育の進歩に資せんが爲め去る四十二年より九十八萬餘圓の私財を投じ東北帝國大學農科大學及九州帝國大學工科大學の設置に必要な建物即ち教室實驗室等を建設して之を寄附せんことを志し尙該建設工事を文部省に依託することの便宜なるを認め爲めに要する經費七萬圓を更に提供して工事に關する一切の事務を同

省に依託し九州及び東北兩帝國大學は本年九月より授業を開始する事となりたり、是れ古河氏の貢獻によりて得たるものなるが尙秋田鑛山専門學校創立費として六萬圓を寄附する等奇特の行爲多く其功績顯著なるより今回勳三等に叙し瑞寶章を授けられたる也  
百有餘萬圓を投じ國家經營の大學及び専門學校の教育擴張に力を盡せる如きは誠に美譽と云ふ可し、抑も君は明治の銅山王を以て稱せられたる古河市兵衛氏の愛子なり、市兵衛氏往年他界の人となるや、陸奥宗光伯の二男潤吉氏入て其後を襲ひ守成の道を盡して事業増々擴大を致せしも明治三十九年病魔の冒す所となり不幸其夭折を見るに至り、君若齡を以て其家督を相續し能く祖業を守りて發展擴張を謀り、井上侯、濫澤男、原敬氏等を顧問とし、木村長七岡崎邦輔氏以下俊秀の高級幹部員の補翼に依り着々として効果を奏せり、君幼にして慶應義塾普通部を卒業し、次で米國コロンビヤ大學に學び地質採鑛撰鑛冶金及び鑛山行政の諸科を修めたり、歸朝後専ら祖業に従事し明敏の聞へ高く各公共事業等に多大の援助を

興へ社會の崇敬を受くること深厚なり、學事教育等に熱注し貢獻少からず遂に今夏勳三等に叙せらる、本年又濟生會の組織あるや數十萬圓を義捐せり、此他美事善行尠からず、世の仰望を得るもの亦故なしとせんや、(京橋區築地二ノ一〇電話長京橋一〇〇〇)

四四

### 實業家 安達 仁造君

君は雲州松江の城主松平直亮氏の支藩松平直敬氏の舊臣にして安政元年同地母里城下に生る、王政維新の後職を北海道開拓使廳に奉じ茲に偶然米國人「ライマン」氏の下に鑛山學を研究するの機會を得たり、後開拓使の工部省に移るに及び、阿仁鑛山に勤務することニケ年大に重用せらるゝ所ありしも遂に辭して恩師「ライマン」氏の跡を慕て米國に航せり、同國費府にある「ライマン」氏を訪ひ其紹介を以て「ペンシルバニヤ」洲地質調査所に入り、鑛業上の調査の爲め各地の鑛業所を巡視し、艱難辛苦を忍びて研究に従事し、更に鐵鑛及石炭業の調査に腐心し、前後

八年間彼土に在て研修の功を積み、次で歐洲に渡航し斯學の踏查實修を極めて歸朝せり、偶々日本郵船會社に於て九州炭鑛の創業あり、君の新智識は直ちに歓迎せられて同社に入り、勝野炭山の採掘に従事し幾多の支障を排して好果を奏し爾來同所の經營に當りつゝありしも同二十八年同炭鑛が古河家に移ると同時に君又同家に入り故銅山王の知遇を得て重用せられ一面には該鑛山事務所長として渾身の精力を注ぎ他面には二十六年より三十六年迄筑豊鑛業組合總長に推され同地の鑛主を糾合して確固たる基礎を樹立し、安川、貝島麻生等の斯界第一流の鑛主と共に本部支部等の土地を買收し、尙門司俱樂部を組織したるが如き當に特筆すべき偉功なりとす、又鑛業條例改正の爲に同組合總長として帝國議會に請願し、當路の大官を訪問し其意見を陳述し、遂に其志望を果たしたるが如き功勞少なしとせず同三十六年古河鑛業會社理事として中央帝都の人となり更に同家監事として當主虎之助氏を補佐し、先代市兵衛氏附托の任務を果たさんとす其志や豈偉なりと謂はざる可けんや、(芝區公園一一ノ八電話芝一九四七)

四五

横濱正金銀行  
取締役兼支配人 山川 勇 木君

正金銀行が海外貿易機關として創立せられし以來既に三十有餘年を経過せり、此の間に於ける同行の浮沈は一再到止まらざりき、是れ其營業が海外諸國に涉り、經濟界の波瀾激變を極め、爲替相場等の動搖倏忽を計られざるを以て意外の影響を受くることあればなり、君同行に入て以來慧眼早くも前途の趨勢を達觀して企畫する所機宜に適し、其非凡の材幹は着々効を奏して信認大に加はるに至れり、過年株主の推撰に因て取締役兼支配人たる要職に進み、爾來の奮闘は例に依て彩華を放ち、内外人をして一に其手腕に信賴せしむ、明治三十七八年日露戰役後に於ける經濟界は俄然偉大の膨張を來たし、各種事業の勃興に應じて貿易界の旺盛は眞に空前の盛況を示せり、君が慧眼早くも支店増設の議を立て數ヶ所の支店を開設して金融の圓滿を計れり、其効果や頼に揚り、逐年偉大の發展を見るに及べり、頭

取高橋男君を信する甚だ深厚にして營業萬般の企策は多く君に一任し以て其犀利の敏腕を揮はしむ、此の頭取にして此の偉材を重用す、正金銀行の隆昌決して偶然ならざるを知るべし、君資性温醇にして閑雅、洋々たる宏量能く衆を容る故に部下の心服亦淺からず、縦横の奇才能く統御の實を擧げ堂々として歩武を進むる處眞に一糸の紊亂を見ず、銀行界裡の俊雄たるもの誰か亦是に抗せん、概傳に依れば君は石川縣士族山川全樂氏の長男にして安政二年三月二十一日を以て生る、幼にして穎敏和澆の諸書を涉獵して造詣甚だ深し夙に正金銀行に入て柱礎と仰がる、先年横濱商業會議所議員に推され爾來銀行の餘力を提げて盡瘁を重ねつゝあり、(横濱市宮崎町五八)

實業家 綾 井 忠 彦君

明治聖代の大成功者として世既に村井吉兵衛氏を稱す、其男性的活躍振は當に壯觀を以て天下の耳目を聳動せり、而て其帷幕に大手腕家あ

りて機智を振ひ是が企畫を施せし所謂村井氏の股肱なるものありしを忘る可からず、彼の松原氏は營業方面に當り、綾井忠彦君は會計の難局に當り、共に其職責を全ふし村井氏をして毫も後顧の憂なからしめたるは事實なり、兩者補翼の功又偉大なりと云はざる可けんや、聞く君は大分縣士族伊藤清藏氏の二男にして明治四年一月十八日を以て生る、舊名を倭藏と稱し、幼少にして穎敏夙に出藍の賞譽あり、其普通學を卒はるや上京して東京郵便電信學校に入り益雪の功を積むこと數年、其業を卒はるや明治二十三年驟然萬里の波濤を蹴て米國に留學し同二十八年を以て歸朝せり、同年十月綾井忠吉郎氏の養子となり同二十九年六月分家して一家を創立せり、同三十一年株式會社村井兄弟商會に招聘せられ入て其出納役と爲れり、常に綿密なる頭腦を以て收支一切の衝に當り聊か遲緩滯滞を見ず隨て信認大に加はるに至れり後村井銀行の創立せらるゝや推されて營業副部長となり一意專念行務に執掌し、身を忘れて勞を厭はず多年一日の如く盡瘁せられしを以て其位置順に進昇して同四十年營業部長たる名譽の椅子を占むるに至れり

り、思ふに君が手腕は先天的守成にありて常に何等の權謀術數を須ひず、只管滿腔の誠意を以て家憲を嚴守し、自から率先して範を部下に示す、斯の如きは浮華輕佻なる現代實業家の企及し能ふ所ならんや、  
(府下豊多摩郡代々畑村代々木山谷三〇〇電話番町一五〇七)

前臨時市區  
改正局長

角 田 眞 平 君

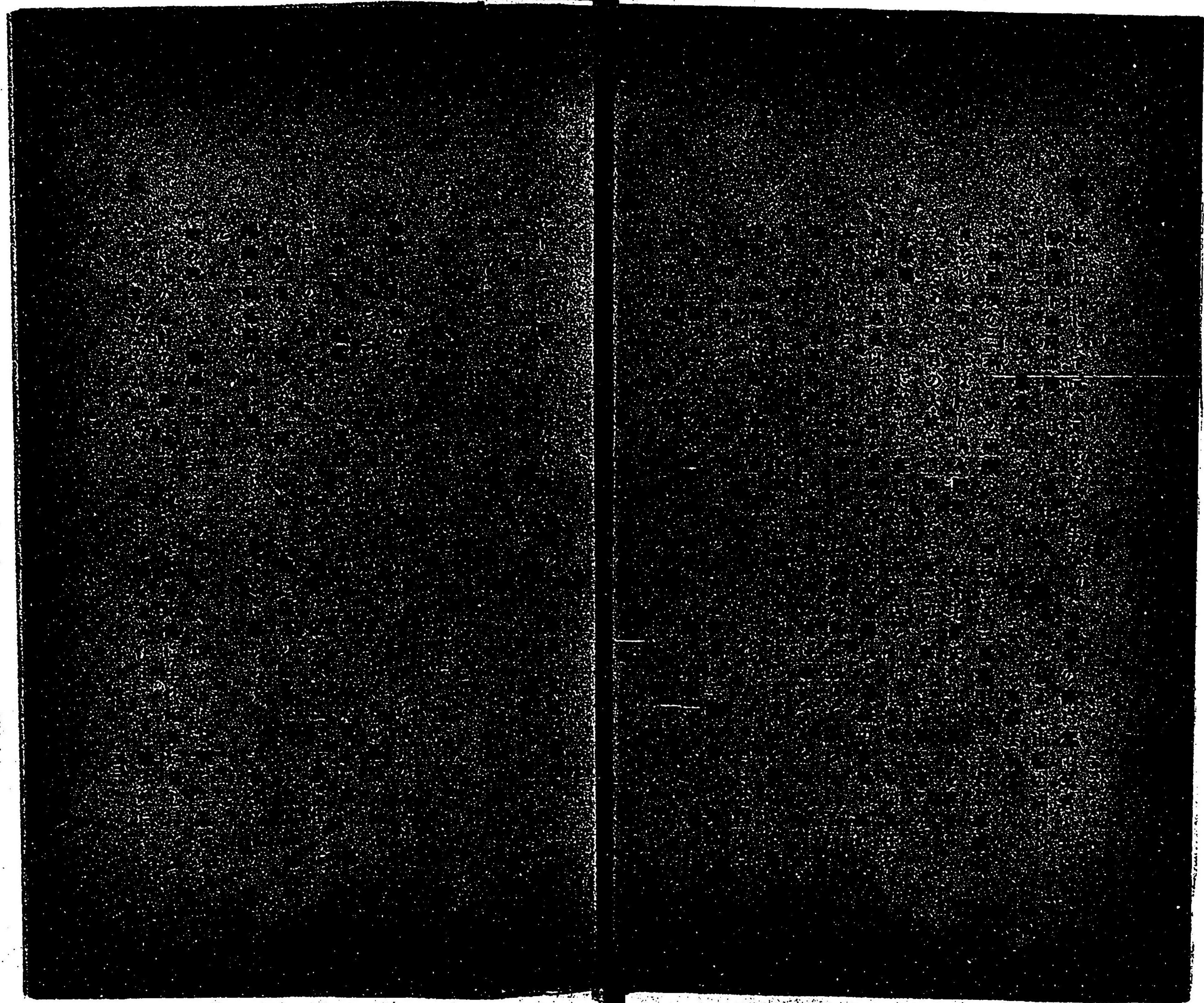
會ては政界の雄將として改進黨の牛耳を執り、法曹界の巨人として重望を繁き、其一舉一動は直ちに社會の視聽を集む、往年臨時市區改正局長として我帝都八百八街の改善に心身を捧げ、都大路の區劃を定め秩序整然たらしめ、東洋首都の美觀を副ゆるに至れり、今又市會議員の重鎮として電車市有の議に關與し、當局主務大臣を始め、東京鐵道會社重役と折衝和衷の勞を執り、市民の輿望を滿たしたる皓潔の志操は一般の感謝して措かざる所たり、尙將來に於ける企畫に就ては君に俟つ所多大なるべきは市民の齊しく認むる所なり、抑も君は靜岡縣沼津町の出身にして安政四年を以て生る、夙に英才鄉關に名ありしが

明治七年曾我子爵の勸誘に因て上京し、爾來天下の傑士沼間守一氏其他の先輩碩儒に就て和漢洋の學を修め、傍ら政界に關與して遼義社、嚶鳴社等に加盟し、論究討議大に爲す所あり、後法律に志して其研鑽に従ひ、明治十三年遂に狀師となり名聲大に揚れり、同十五年改進黨の組織せらるゝや、民權の伸張、國會の開設を唱導し黨務の擴張に盡瘁せり、同十七年東京府會議員に推され同二十一年東京代言人組合長となり、同二十三年衆議院議員補欠選舉に當て鳩山氏と中原を駢馳して遂に勝利を得、茲に名譽の月桂冠を戴きて帝國憲政の樞機に參與するに至りぬ、同三十二年再び府會議員に當撰するや市部會議長となり、府政の權威を一身に集む、同三十五年衆議院議員に再撰し爾來累次當撰して同四十年に至る、此間常に下院一方の雄鎮として論議見識共に重きを致せり、明治三十九年東京市が臨時市區改正局を設置するや、君は其局長となり、至難中の最至難たる該事業の衝に當つて着々功を奏せり、同四十三年四月世界漫遊の途に上り、歐米全土を跋渉して七月歸朝せり、此の行に因て得られたる處亦尠からず、近くは日本燐礦株

式會社を創立して社長となり、尙東京株式取引所調査部長に擧げらる等君の經綸が新に實業界に注がれんとする一轉化たるを窺ふ可し、君平素文事を好み俳偕を能くし竹冷宗匠の名斯界に嘖々たり、其著又社會の歡迎を受けて天下後進の好同伴たり、昨四十三年臨時市區改正の終了と共に退職せられ現今市會議員の職に在り、久しく市の興望として且多年の宿題たる電車市有に關し、其熱誠を披瀝して奔走盡瘁を重ね、市民の渴仰を受けて信望愈々高きを加へり亦以て當代の偉材たりと謂ふ可し、(牛込區東五軒町一三電話番町二七六)

公證人 今井萬吉君

資性温厚にして篤實、學殖豊富にして經驗亦淺からず、明晰なる頭腦と謹嚴なる志操とを以て社會の信認を得るや多大なり、暫く實業界に馳駢して雄名を鳴らし、今や公證人と爲つて正確の人格を發揮す、斯界の重鎮として推敬せられつゝあるもの豈所以なしとせんや、君は舊



幕臣の出にして元治元年を以て生る。明治維新の際に當て父君と共に静岡縣下榛原郡勝間田村に移住し、夙に普通學を修めて出藍の稱あり、常に大志を抱て鳳翼を伸べんと欲し、驟然上京して東京法學院に入り、法律經濟の二科を修め、研鑽の功を積むこと三星霜、明治二十六年學績優良を以て業を卒はれり、偶々同郷の人木下七郎氏株式仲買店を經營せんとするあり、君の人格を信賴して店務一切を擧げて其衝に當らんことを懇囑せり、茲に於て乎奮起して金萬商店を創始し、營業全般の責任を負ひ勇往邁進、以て店務の進歩を計り、刻苦精勵、以て業務の發展を謀れり、其効空しからずして、金萬商店の名は嶄然斯界に頭角を顯はすに至れり、君は素より温厚篤實の人、投機事業は其性情に適せざるを知る、衷心常に苦慮する所あり、茲に於て乎斷然引退を決し、全責任を擧げて後繼者南波禮吉氏に譲り、其商店と關係を絶つに至れり、爾來君は公證人となり、同役場を芝區内に設置し、一切の事務を執掌し、至誠熱實、以て其敏活を計り、正義の眼公平の措置を以て、委囑者に満足を得しめ、志操人格共に一般社會の信認を博し、近來現所に移轉して一層の發展を見るに至

れり、家政順に掲り洋々として春海の如く數萬の資財を蓄積して和氣堂に滿てり、又以て稀有の人才たるにあらずや、(芝區新幸町舊六電話新橋三九〇三)

### 實業家 服部金太郎君

帝國時計商の巨擘として夙に名聲を内外に發揚せられ、信用の多大と資産の豊富とを以て益々好潮の域に進める服部金太郎君の經歷を窺ふに、後進子弟の龜鑑として賞讃す可きもの尠からず、始め貧困に處して、備に世の辛酸を嘗め、父母に奉じて孝養の全きを致し、主家に仕へて忠誠を擡んで、幾多の支障を排除して、遂に商運の隆盛を招致す、其勤勉精勵、苦戰奮闘の跡は歴々として指擧するに難からず、今其概要を説か

ん、  
始め君の父は郷國尾張を去りて帝都に來り、夜店を出して漸く一家を支へしもの家計の困難亦言ふを要せず、君此貧に生れ、此貧に長じ、早く其辛さを嘗め、よく其味を知る、一日論語を求めむとて父に請ふ、父曰く之



五十四  
れを求むるが如き餘裕一匁もなしと、君此時痛く悲み大に勤勉貯蓄の緊急なるを覺れりと、蓋君の今日ある偶然にあらず、年漸く十二の時京橋八官町の辻唐物店に雇はれて丁稚となる、年少なりと雖も家を思ふと頗る厚く一日も早く業を覺え父母を安じ參らせんと勤勵怠らざりしが十五歳の頃不圖思へらく唐物商は資本を要すると莫大赤貧余の如きもの之れを覺えて何をかなさんと、忽ち其志を翻し遂に日本橋區の某時計師の弟子に入る、然れども初めは容易に業を習ふ能はず多くは子守等の雑用に使用せらるゝのみ、殘念に堪はずと雖も亦如何ともす可からず涙を飲んで時の至るを待つ、其餘暇に經傳餘師を購ふて夜な夜な之れを獨習す、後故ありて下谷の某時計商に雇はれ居ること二年不幸にして主家の倒産するに遇ふ、解雇せられて去らんとするや金七圓を主人に捧げ告て曰く之奴が數年蓄積する所其額少なりと雖も希くは以て今後の資を補はれん事をと、嗚呼何ぞそれ主人を思ふの厚きや、直に家に歸りて時計商となり晝は業を勵み夜は漢學英學を學び少時も怠らず、十四年遂に店を京橋采女町に開くや十六年不幸にも火災に遇

五十五  
ひ僅かの資本過半烏有に歸す、已むを得ず木挽町に轉じ小店を開き晝間は此處に働き夜は同業者間に奔走し夜の目もねずに立ち働き一時一分空消するなし、茲に於てか勤勉の効漸く顯はれ資産日に多きを加へ二十年遂に銀座通りに移轉するを得るに至る、此頃より時計の需要次第に其多きを加へ年を追ふて其輸入高を増進す、君私かに思へらく拱手して只だ輸入品の販賣に安ずるは國家經濟上不利甚だし如何にもして完全なる時計を國內に於て製出し以て外國品と對抗せんと欲し、廿五年本所柳島に精工舎を設立し先づ掛時計の製造を始む、廿八年更に一步を進めて懐中時計の製造に着手す、此事業たるや其困難意想の外にありと雖も君屈せず撓まず三十二年及三十九年兩度自ら歐米に航し詳く其製造の實況を調査し來り、今や千有餘人の職工を用ひ七十人の店員を使ひ盛に製造販賣に従事し、内地は勿論海外諸國に輸出するもの年々巨額に達し、今や帝國第一流の時計商として名聲籍甚たるに至れり、  
君資性快活にして客に接する最も懇切を極む、店員皆其徳に倣ひ嚆々

として和氣堂に滿つ、實に慕ふ可く仰ぐ可きにあらずや、

君又仁慈博愛の志厚く公共事業に資を投じ貧民救助に義捐する等舉げて數ふ可からず、彼の濟生會の組織せらるゝや巨萬の義捐を爲して世の賞讃を受く前に當代稀に見る實業家たるにあらずや、(任郎芝區愛宕下町四ノ五電話芝二三〇〇、商店京橋區銀座四ノ八電話京橋一三〇〇、一三〇一、一三〇二)

實業家 藤村喜七君

夫れ砲煙天に隈さり劍光閃々たる亂世之立身は破格的なり、四民泰平を謳歌する治世之立身は忠實的なり、而して前者は英雄的資性を要し後者は忠實的資性を要す、茲に傳せんと欲する君の如きは後者の消息に洩れざるの人ならん想起す我邦實業界裡創業殊に古く後更に炯眼早く宇内の趨勢に鑑み嶄新秀麗なる珍物良品を輸入し今や盛名海の内外に鳴るもの是れ三越吳服店ならずや、而して之が樞要に座し機智縱横斯界の泰斗たる月桂冠を戴くに至りしもの蓋し君が非凡の才腕他の把

欠

MISSING

の先覺の明豈驚嘆せざるを得んや、後更に神戸税關に轉任し次に税關長に進めり、此の間開港事務に關し大に研鑽を遂げ各國の領事と折衝の難局に當り公論爭議して殆んど完全の協約を遂げたるか如きは最も偉功中の偉功に屬せり、後故あつて一旦冠を掛けて在郷の人となりしも溢世の俊才永く閑地に就くを赦さず、更に鐵道局に職を奉じ、種々の難工事に當て肺肝を碎き奮闘を繼續して以て大成功を遂げたるは世の齊しく認むる所なり、今其一班を擧ぐれば天王山より敦賀に通ずる鐵道工事に従事するや、晝夜を分たず刻苦精勵以て其竣工を迅速に擧げたるが如き當時の美談とする所たり、又桂川鐵橋架設工事の如きは西洋新進の博士も殆んど困憊せる難工事たりしも君は嚴冬堅氷の中に立つて指揮監督に従事し終に竣成の功を見たるが如きは識者間に喧傳せられつゝありし一偉談なり、君が職務に忠實なるは常に勇往邁進所開猪突的態度に出て爲めに身體に傷害を招き脚部の操縦不隨なるに至る、又以て當時の精勵を卜するに足らん、現今の大成を見るもの豈所以なしとせんや、(府下淀橋字角筈五十人町八七一電話番町一一〇八)

實業家 山本留次君

六六

帝國實業家の偉傑大橋佐平氏縦横の才略を揮て一小舗より身を起し博文館の基礎を固め、尙進んで各種の事業に鞅掌し奏功極めて迅速倏急の間有数の富豪として名聲噴々たるに至れり、君は其近親として早くも大橋氏に従つて帝都に出で其指揮の下に活動し、其股肱として盡瘁せるの功擧げて數ふ可からず、思慮綿密にして而も活氣洋溢、計籌能く肯綮を得て一も齟齬あるなし、大橋氏の成功君の手腕に待つ所大なりしは吾人今更嗟々を要せざる所なり、君が明治二十年初めて帝都の人となりしより同三十年に至る十年間は全く大橋氏に寄遇して企策を施せし時代にして刻苦精勵以て誠忠を拔んでられし偉跡を印せる時期なりとす、同三十年七月伯父佐平氏從兄新太郎氏と謀り合資會社博進社を組織し専ら洋紙販賣をなす、君選ばれて専務理事として現今に及べり、同社の規模の大なるは世の既に認識する所にして其盛況を極むるに至れる

もの皆君の敏腕に基因せずんばあらざるなり、同三十二年十二月支店を大阪に設け東西相呼應して活躍を試み其發展擴張は江河の決するが如く滔々斯界を壓して帝國第一流の洋紙店たるに至れり、明治三十六年十月合資會社博愛堂を創立して其幹事に推選せられ、同三十八年二月株式會社東亞公司を設立して取締役に推さる、同年十二月商業視察として清韓兩國に涉り、各主要地の狀況を踏査し商品の集散、經濟の消長、工業の盛衰、等精細なる調査を遂げ大に得る所あり、歸朝後同社の専務取締役となり、滿腔の抱負を披瀝して盡瘁の功空しからず、逐日殷盛を加ふるに至り、大阪、上海、漢口、天津、其他の樞要地に支店及出張店を設け日清貿易の巨擘たる地位に進捗せり、明治四十二年九月文運堂を創立し、文房具類の製造販賣を爲し三越呉服店及博文館にて發賣せしに最も好況を呈せり、同四十三年五月商業視察の爲め歐米各國に渡航し同年十一月歸朝せり、同四十四年四月博進社の組織を變更し資本金を三百萬圓に増加し、舊の如く専務取締

六七

六八  
役として奮闘を繼續せり、新進氣鋭の實業家として社會の稱讃を博しつゝあり、(神田區駿河臺北甲賀町三電話本局一八)

實業家 内田 幾助君

帝都實業家中成功の模範として天下に誇るべき人才に乏しからずと雖も先見の明を有し企畫寸毫の齟齬なく著々効果を收めたる君の如きは最も稀なり、抑も、君は府下北豊島郡練馬村の人内田八三郎氏の長男にして周次郎氏の令兄なり、夙に大志を抱懷して帝都に出で本所區吉田町に一小陋舗を構へ空拳を揮て活動に従事せり、而も薄資にして窮乏の身到底普通の商業に従事するや難し、是に於て君一流の名案を出し、廢物利用の道を求め、古銅鐵の賣買を開始せり當時同業者なるもの僅かに二三に過ぎず、日々の収益意外の多額に上れり、君又工夫を凝らし古銅鐵眞鍮等の分析を爲し以て普ねく需用を満たせり、時運の展開に伴ひ斯業の發展最も著しく君の先見正に的中して家運年と共に隆盛を極むるに至れり、爾來帝都を始め大阪京都等樞要都市に確實な

る取引店を有し、品質の精良價格の低廉遙かに輸入品を凌駕せり、今や一年間の販賣高五十有餘萬圓の巨額に達せり以て其の隆昌を窺ふ可し、君質素朴訥の風今尙昔日を忘れず、綿衣綿服を纏て常に店頭に立ち店員と伍して商業に従事す、人或は孰れか主人たるやを疑ふ奇觀あり、往年世子を失ひ一時落膽無情を感ずる切なるものあり、爾來公共事業及貧民救助等に義捐するもの多く、名聲頓に發揚して本所の奇人として稱せらる、

曾て米國製鋼會社の一員帝都の各工場を巡視し君の盛名を望んで其店頭を訪ふ、君忌憚なく先見の所思を述べて驚嘆せしめたる美譚は今尙ほ斯界に喧傳せられつゝあり、精勵以て群を抜き醇朴以て美風を爲す、亦當代得易からざる實業家なり、(本所區吉田町一六電話長下谷一二一八)

實業家 小倉 喜作君

自助の精神自奮の氣力以て最後の効果を收むべきは吾人の暇々を要せざる所なり、小倉喜作君幼より日本立志篇又は西國立志編等を讀み、古今東西の烈士が成功の跡を慕ひ、自助自奮の精力を發揮し、商業に因て身を立てんと欲し、相續すべき財産を擧げて父母に托し、空拳に揮て飄然東都に出づ、時維れ明治二十一年なり、而も知人の頼るべきなく茫々として前途の指針なきに似たり、君決心堅きこと鐵の如く前途只勤勉あるのみと屢々慘憺の情況に接せるも更に屈撓の意なく孜々汲々として勉めて止まず、伯爵林友幸氏方の雇員となり同氏の勤陶を受くること大なり後、某氏の補助に因て砂糖類の販賣を爲せしに恰も時機に適して滔々家運の隆昌を見るに至れり、明治二十七年始めて歸郷して父母を拜し、成功の運に至れるを告げ、以て孝道の至情を致せり、爾來逐日殷盛を加へ、帝都有數の資産家たるに至れり、明治二十九年令弟をして渡米せしめ桑港に店舗を設け、専ら貿易事業に従事せしむ、企策功を奏して最盛の狀況を呈せり、同三十五年芝區愛宕町三丁目に支店を設け是又隆盛を見るに至れり、同三十九年又一の令弟を

七〇

して渡米せしめ桑港支店の發展に助力を與へしむ、二弟既に米國に渡航し協力其發達を計り、君又帝都中樞の地に在て指揮監督を怠らず、將來の大成就知り難からんや、曾て日清戰役に當て經節を納付して巨利を博したるが如く奇慧常に同業者に先鞭を付けつゝあり、君は斯の如く成功の地歩に進むも世俗の陋態に倣はず、當に一見地を立て、能く集め能く散するの道を講ず、幼時立志編の如き高潔の書に因て養成せられたるの志操は能く公共事業等の共益事業に力を致し、救濟事業に義捐を吝まざるは一特質たりと云ふ可し、曾て日露戰役當時出征軍人家族に對し救援の實を擧げたる如きは世の齊しく感歎する所たり、現今芝區兵事議會幹事、教育會評議員、衛生會評議員、金刀比羅神社總代、區會議員等の職に在て奔走盡瘁の功偉大なりと云ふ、君の如く偉人傑士の事跡を慕ひ、能く讀み、能く誦し、以て成功の果を收むるもの天下幾人かある、後進以て鑑とすべきなり、芝區琴平町二電話新橋九六八

七一

實業家 升本喜兵衛君

七二

黄金崇拜の風我朝野を歴し、向上虚榮の夢我上下を風靡す、現代思潮が徒らに末節に走り、富貴に淫し名利に黨し、汚流滔々として俗を爲すの時皓潔君の如く仁慈博愛の實を擧ぐるものあるを聞く誠に清新の感に堪へざるなり、

君は松本兵藏氏の三男にして嘉永二年一月を以て生る、幼名を幸次郎と稱し夙に穎敏を以て稱せらる、先代喜樂氏の養ふ所となり、明治二十三年家督を相續して現名に改む、

先代喜樂氏は一小店舗より起りて現今の基礎を作りし稀代の人傑にして世の尊敬甚だ厚く成功の龜鑑として歌はれし偉人なり、性仁慈にして貧困を憐むこと殊に深く屢々施與を行て賑恤せられしもの巨額に上れりと傳へり、君此の仁者の薰化に依り賑恤の志篤く公共事業は勿論貧民に施米し醫療費を給し其他有ゆる方法に依て救助の實を盡せり、牛込の升本と云へば直ちに其救恤者たるを偲はしむ、斯の如きは天下

廣しと雖も他の企及する所にあらざるなり、

明治三十年牛込麴町兩區の富豪と計り中央貯蓄銀行を創立し、専務若しくは常務取締役として盡瘁し、後頭取の要職に進めり、

往年上菱醬油株式會社の創立を爲し推されて取締役たりしも同四十二年に至て是を買収し組織を變更して合資會社となし、令息喜八郎氏と共に是が經營に従事して益々盛大を極めり、

公人としては現に市會議員、區會議員、所得税調査委員等を兼ね一貫の赤誠以て其職責を全ふしつゝあり、眞に實業家の偉人を以て稱す可きにあらずや、(牛込區揚場町四電話番町六二四、一八五三)

文藝家 巖谷季雄君

帝國文藝界の大斗にしてお伽話の開祖たる巖谷澗山人の盛名は噴々として喧傳せられ、今や寒村僻地に到る迄其名を知らざるものなきに至れり、近來又お伽話芝居の興味津津たる演劇を創始し、有樂座に據て異彩を放ち、少年子弟の歡迎を受くるや多大なり、帝國嶄新の文藝は

七三



多く君を俟て愈々燦然たるに至る。天授の氣品能く他の企及す可き所にあらざるなり。

七四

君は帝國臨池界の巨擘巖谷一六先生の第三子にして明治三年六月六日を以て生る。彼の有名なる故工學博士巖谷立太郎氏及工學博士東京市技師長日下部辨次郎氏の令弟なり。號を大江小波、漣山人、と稱せり。故尾崎紅葉、石橋思案氏等と相提携して硯友社を組織し、多年其牛耳を執りて嶄然頭角を顯はせり。二十三の若冠にして早くも京都日出新聞の文學主任となり、次で博文館に轉じ、小説及お伽噺等に筆を採りて斯界に精華を放ち、尙俳諧に至ては又其濫域を極め新派秋聲會中の重鎮を以て聞ゆ。樂天居士小波は其俳號なり、曾ては邦語教師として獨逸伯林東洋語學校に招聘せられ茲に教鞭を執ること數年、東亞文藝界の代表的人材として頗る好評を博し、更に一見地を立て、明治三十五年母國の人となり、縦横の論議以て我文壇を賑はせり、同三十九年文部省の囑托により教科書編纂の勞を執り、更に早稻田大學文學科の講師となり、尙三越呉服店の子供部顧問、有樂座お伽俱樂部の顧問を兼ね

進んで帝國文藝界の大立物たるに至れり、  
明治四十二年渡米實業團と共に米國を周遊して大に得る所あり、歸來新洋行土産及渡米實業團誌等の著あり皆世に行はる、同四十四年文藝委員會、通俗教育調査委員會の設けらるゝや擧げられて其兩委員に任せらる、以て君が如何に斯界に餘鏗を顯はしつゝあるかを窺知することを得ん、(芝區高輪南町五三電話芝二三七三)

### 實業家 田中伊三郎君

温厚篤實の風姿は寧ろ婦女子の如く、仁慈博愛の氣概は眞に古聖に似たり、吾人田中伊三郎君を見るや當に此の感を深ふす而も霸氣旺盛せる處誠に推敬に絶へたり、君現今田中合名會社の代表社員、東京電燈株式會社の營業部長として名聲噴々たり、今其閱歷如何を窺ふに君は長野縣士族伊藤諫治氏の三男にして慶應元年三月二日を以て生る、上京して田中經一郎氏の長女やす子の入夫となり、家督を相続して戸主となり以て其姓を冒せり、夙に敏腕を以て鳴り世の信望を得るや大な

七五

り、明治三十一年東京電燈株式會社が増資して二百萬圓となすや君は入て其營業の衝に當り、營業課長より進で營業部長となり同社の爲めに盡瘁すること尠からず、同三十七年資本金十萬圓を以て田中合名會社を組織し土木建築勞力の請負及物品販賣業を目的として營業を開始するや君は其出資者の一員として是が業務擔當社員たる養父を補佐して大に功績の見る可きものあり、後養父に代て代表社員たるに及んで其老熟の敏腕を揮ひ以て業務の擴張を計り現今の隆昌を致せり、君は尙株式會社興信銀行監査役、株式會社城東銀行の取締役として其機軸を採り企策する所甚大なり、現今帝都多數の實業家として名聲社會に籍甚たるに至れり、君は又鑛山事業に就て大に見る所あり、熱心以て其研鑽に勉めつゝありと聞く他日其成功を見るの日は鑛業界に一新を劃するならん歟、(京橋區宗十郎町二一電話新橋二二二三)

實業家 鈴木常助君

鑑南株式界の波瀾は變幻常なく一高一低更に捕捉す可からず、巨萬の輸贏倏忽にして決す男子の快舉是より大なるものあらんや、君能く此の間に處して操縦宜を得誠實と勤勉とを以て常に主義綱領となし店員を督し華客の便宜を企畫す、茲に於て乎社會の信用日に殷盛を極め今や斯界の重鎮たるに至れり、吾人或る老舗に就て公評を確かしむるに「鈴木君の商業振りは眞摯熱實質素確實を旨とするを以て突飛的彩華を放なすと雖も一歩一歩の地盤を固め且つ顧客の便宜を経とし薄利を緯とするが故に更に蹉跌の憂なく基礎の堅實なるは斯界の第一位を占む」と誠に肯綮を得たる適評と云ふ可し、

君は愛知縣の人鈴木仲右衛門氏の長男にして明治九年一月三日を以て生る幼にして穎敏衆に冠絶し既に吞舟の氣慨あり、早くも和漢の學を修めて造詣する所淺からず、明治十三年五月十日家督を相續せり、爾來幾多の商業に従事し思想綿密にして企畫常に効を奏せり、明治四十年一蹴起帝都に出て知友某氏と共に株式市場に出入し鋭鋒漸く顯はるゝや斯界の先輩と交を訂し其所説屢々適中して人をして驚嘆せしむ、

尋て株式取引所仲買人となり、熱誠以て業務の發展を謀り、社會の信認を得ること偉大にして家運頓に揚りて名聲中外に喧傳せらる。君が商機を見るに敏にして施設常に機宜に適して着々功を擧ぐ其先天的獨特の技倆あるや吾人の喋々を要せず、

君資性任俠高士の風ありて常に人の心復を得、又仁慈博愛にして救濟事業に熱注し多額の義捐を爲して吝まず、四十三年八月府下一帯の大洪水の際の如きは卒先して救護に力めしは世の齊しく歎稱する所たり斯の如く士を愛し究乏を憐むは寧ろ君の性癖たりと云ふ可し、吾人は君の將來ある可きを知り益々發展擴張を見るの日の近からんことを期待するものなり、

小池合資會社 代表者代理 渡邊 仁三君

抑も君は山梨縣甲府市柳町の人、淺川友八氏の二男にして文久元年を以て生る、資性穎敏早くも山梨徵典館幕府學問所に入り、和漢の學を修め、後同所が師範學校となるや尋て全科を終了し、明治十二年を以

て卒業せり、暫く地方の小學校に教鞭を執り育英事業に従事せしか時代の風潮に感ずる所あり遂に決然上京して諸老大家の經營になる斯文學會に入れり、同會は専ら修身齊家の道を講し道義の隆興を謀るを以て主眼とす、偶々高島嘉右衛門氏來て講話を試むる事あり、君大に感悟する所あつて、神奈川大間山の高島別邸を叩き其所思を述べて門下生たらんことを懇請す、先生快諾して親しく訓陶する所あり、君就て學ぶこと年餘、後或事情の爲めに一旦歸郷して實業界に入り、暫く農桑の間に雌伏して時機の展開を待ちつゝありしに偶々令弟小池國三氏か株式取引所仲買店を創設するあり、君再び上京して是が事務を補佐し茲に兄弟相提携して斯界に突撃を試み、施設大に機宜に適して隆運を招致し名聲斯界に冠絶するに至れり、明治四十年組織を變して合資會社となし君其代表社員代理として一層の奮勵を重ね確實なる商風は社會の信用を博すること多大にして取引高の如き多く其首班に列し、信望益々高きを加ふるに至れり、君沈毅寡言にして多く語らず、而も明晰なる頭腦は能く機先を制御し

て一毫を過つなし、高島氏仕込の人格は温健閑雅の品位を保ち、謙遜辭讓眞に君子の風あり、比較的名利に恬淡にして子々たらず其守操の堅實なるは儒道の造詣深きを示す、汚濁滔々たる現代に在て清廉君の如きは最も稀なり、同社か益々隆盛を見るもの蓋し君の偉大の功に基因せずんばあらざるなり、

君常に人心の收攬に勉め敢て投機を試みず、社員の統一と顧客の眷顧を謀る、是君の君たる所以にして同社隆運の秘鑰たるものなり君を學ぶもの以て留意せよ、(四ッ谷區右京町二一電話番号町一二一)

### 實業家 柿沼谷藏君

温容燦として長者の風を備へ一見直ちに高德の君子人たるを知る、試みに其居常を窺へは宗教を尊信する深厚にして殊に佛教に歸依すること厚く、仁慈博愛を以て念とし、孤獨を憐み貧弱を助け、公共事業に資を献し、救済事業に援助を與ふるもの年々巨額の高に達し識者をして常に感嘆に堪へざらしむ、宜なり其清風能く人をして欣慕措く能は

ざらしむるものあるや、現代思潮か利祿に是れ走り浮華輕佻に傾く時に當て君の如き君子人を得たるは國家社會の爲めに慶賀の意を表せずして可ならんや、

君は群馬縣邑樂郡館林町の人増山清藏氏の二男にして安政元年六月十日を以て生る、若冠にして帝都に出て商業の見習を爲す、機智縦横の敏才は屢々斯界の俊雄をして後世畏る可きを歎せしめたり、明治十二年一月先代柿沼谷藏氏の請囑に依り入て養嗣子となり、次で家督を相續して現名に改む、爾來孜々として勉め汲々として勵み、店員を督し事務の進捗を計る、明治二十年堀江町四丁目三番地の舊店を廢し更に小網町一丁目に移轉し從來の商業範圍を擴大にして品質の精良を撰み價格の低廉を計り一般需用の便宜を與へしより信用又一段の厚きを致し、幾もなく帝都第一流の和洋系、紡績糸問屋たるに至れり、爾來中央實業界に飛躍し往年東京瓦斯株式會社、金町製瓦會社、下野紡績株式會社、東京製糸會社第一生命保險株式會社の創設に與り大に力を致したるも現今主力を下野紡績會社に傾注せられつゝあり、多年

日本橋區會議員の椅子を擁して區政刷新に努め、商業會議所特別議員として貢献する所抄からず、更に土方伯を會頭に頂ける滿韓起業協會に於ては其重鎮として樞機を採り着々として効果を奏せられたり、圓轉滑盤の回轉倏忽にして吾人か敬服せる此の俊雄今や老境に入り鬢髮稍々霜を頂くと雖も前途尙多大の囑望を以て滿たされぬ、其企畫する所又偉大なるものあらん乎、(邸小石川區竹早町九〇電話番町九店日本橋區小網町一ノ一一電話浪花長一五七、五二〇、一四四七)

實業家 川合芳次郎君

帝都實業界の重鎮として名聲籍甚たる君は又宗教界の俊才として幾多の盡瘁を重ね斯界獨特の達眼を以て重器せらる眞に稀有の人才と謂ふ可し、抑も君は三重縣伊賀國上野町川合伊助の四男にして安政二年十月八日を以て生る、幼より神佛を崇敬し斯界の研鑽に耽り、佛教、儒道、神道其他の宗教を極めて造詣する所頗る深厚なり、其郷里にあるや米穀の賣買に従事し、遠く京阪地方を往來して活發の氣概を發揮せ

り、明治八年大阪に於て商店を開設し、同十二年更に横濱に出て、兩替業を創始せり、三重製茶會社の重役山口直治氏(現農商務大臣大浦武氏元警視總監たりし足立綱之氏の義父なり)元と東京府大參事たりし當時の奇縁に因て大に盡瘁補導せらるゝあり、爲めに商況大に隆盛を極め尙且製茶貿易界の有力者中條淵平氏の眷顧を得て益々長足の歩武を進め、加ふるに君が先見命中の識眼を備ふるあり、一瀉千里の趨勢を以て發展し來り第一銀行の元山氏三井銀行支店長田村利七氏の如き屢々君の商店を経て金融を謀るに及び、一日入換貨の取引高殆んど百萬圓に達せり、當時君の意氣旺盛なるや知る可きなり、而て十七年朝鮮事件の爆發するや財界に一頓挫を來たし、銀行會社の倒産するもの頻々として相繼ぐに及び、君が第一の得意たる丸三銀行の破産に依り其影響を受けさしも隆昌を極めたる君の商店も破産の厄に遭ひ遂に失敗の淵に沈落せり、茲に於て乎君は飄然として感悟するあり、斷然投機界を脱して實業に従事するに至れり、其理由を聞くに、相場なるものは恰も窈窕たる傾城に執着せるが如く儲ければやり、負ければやる、金が無くなつて始めて目を醒ますも

のにして其時は既に如何ともなす可からざる悲境に立つものなり、然し相場の秘傳としては佛教の理合即ち有無亦有亦空非有非空の如くモウはマダ、マダはモウ、マダはモウ、マダはマダの四種の理合にして是を捕捉するに苦む、故に利を得んと欲すれば手合に就くより不手合に向へ賣方競ふときは珠の如く之をひろひ買方競ふときは芥の如く之を賣り捨るの格言に依らざる可からず、是れ最も至難中の難事にして容易に機微に接せざるものなりと至言と云ふ可し。

爾來美術品及其他の貿易業を開始せり、十八年六月日宗の僧根本某なるものと宗論を戦はし、遂に日宗に歸依するに至り大藏經を購求して商業の傍ら専心之を研究せり、敬信の念愈深く信仰の念愈堅く其所有地三千餘坪を投して一寺を横濱市久保山に建立し妙鏡山川合寺と稱せり、偶々北米市俄古に萬國宗教大會の開設あるや、君日蓮宗代表者として參列し大に其宗義を發揮せり、

明治二十三年美術商會を組織し是が會長となり、又横濱貿易會社長となる、二十六年開龍世界大博覽會横濱組合委員長に撰ばれ又總代とし

て渡航し同二十七年歸朝せり、二十八年第四回内國勸業博覽會神奈川縣總代に撰ばれ、二十九年以來銀行會社の經營に志し、東京貯金銀行始め四五の銀行及王城炭礦、生命保險、火災保險、製紙、製油等の各會社を創設し又は整理し又は縁合により社長頭取となり、十有餘の銀行會社を監督し大に國利民福を企圖せられし、其逸事美談甚だ少からず、彼の王城炭礦が元と白水炭礦と稱し二十五萬圓の會社にして初期の社長は元群馬縣知事佐藤與三氏なりしが、其後再三變更し二十九年頃は當時飛鳥りも落る有勢の大江卓氏の社長にて其重役株主も益田孝益田克徳、圓尾崎三郎、梅浦精一等の諸氏なり、小松川隆氏の時代は十二回目の社長にして逐年欠損相繼ぎ信用地に落ち遂に一株僅かに二圓に低落せり、君株主の懇請に依て社長となり、大整理をなし、王城炭礦株式會社と改稱し、更に採掘に着手したるに大に良好の結果を得て年々の収益多大なるに至り一割二割乃至三割五分の配當を爲し尙臨時に定款を變更して四十割の配當を爲したるが如き空前の好果を奏せり、爾來三割五分の配當を持續し三十九年に至ては一株三百七十八圓

を呼ぶに至れり、是に於て更に五十萬圓の増資を決行せしに權利株一  
株三十圓、十二圓五十錢拂込七十五圓の高價に達せり、而て君が主力  
を傾注せる日宗火災か函館其他の大火に因て解散の厄に遭ふや君其隋  
力に依て遂にこの炭礦會社を辭するに至る、爾來同社が經營困難に陥  
り、自下一株十八圓を呼び、十二圓五十錢拂込僅かに一圓と云ふに至  
りては實に驚倒の外なきなり、

八六

君曾て妙宗俱樂部を組織し、屢々教理の深遠なるを説き尙進んで佛教  
の眞髓は法華經にあり釋尊四十二年間説かれたる各種の諸經は凡て是  
れ權經にして單に法華經を説くの前提たるに過ぎず、其理由を知らん  
と欲せば無量義經に因て是を悟れ、同經以後八年間説かれたる法華經  
は正に其精髓たるものなり、

彌陀佛四十八願中第十八曰く我佛を得て十方の衆生至心信行して我國  
に生れんと欲せば乃至十念せん、若し生せずんば正覺たらし、但五逆  
正法誹謗するものを除くとあり此の正法とは即ち之れ法華經なり、  
法華經提婆達多品には、佛け諸の比丘に告げ給はく未來世の中に若し

善男子善女人在て妙法華經の提婆達多品を聞て淨心に信敬して疑惑を  
生ぜざらん者は地獄、餓鬼、畜生に墮ちずして十方の佛前に生せん所  
生の處には常に此經をきかん若し人天の中に生れば勝妙の樂を受くと  
あり、其信仰の果を計り其輕重の差を知らば誰か法華經の偉力を疑は  
んやと説破せり、危哉君が奇矯の言を爲すや果して歸途暗夜に狙撃せ  
られて數ヶ所に銃丸を負へり、彈丸今尙顔手の中に存せり、此の他暗  
打刀杖の難に遇ひ、身川中に投せられたるもの一再に留まらず、如何  
に君が同宗の爲めに盡瘁せられたるかを窺ふ可し、又妙鏡誌及東流佛  
教略誌を著はし佛教十六宗三十餘派の教理を簡易に分解し、禮誦式を  
發行して日宗三百有餘萬の信徒朝暮の禮式を一にせんとし、又數萬圓  
を投じて日宗大學を建設し、興學布教に努力しつゝあり、  
君昔時を語て曰く明治三年大政官紙幣の發行に因り金違ひの爲め米價  
十石七十兩位のもの、俄かに百二十七兩に暴騰せり、同四年は豐年な  
るを以て十石三十七圓迄に低落せり、當時京都三條町に北條太平と云  
ふものあり、七條に取引所を設け策略を以て米價の釣上げを謀り、時

八七

八八  
價四圓七十錢餘のものを七圓五十錢の高直を呼ぶに至れり、當時君は同志と相提携して正米を買収して賣緊きの策を施せり、爲めに伏見大阪の船賃平日十錢内外のもの上騰して五十錢を唱ふるに至る以て運搬の頻繁なりしを推知す可し、借て其受授の際に至て紛紜を生じ、遂に官府に是非を訴ふるに及べり、京都府大參事榎村正直北條の縁戚なるを以て迅速の解決を與へず、荏苒日子を送り、翌年裁判所設置せられ北島治房氏來つて始めて決定を見るを得たり、又當時は交通の便開けず伊賀より京阪地方に出でんとするには必ず嶮岨の山道を経ざる可からず、或夜二三と共に宇治より命谷を越へて歸宅せんとするや、七人の暴漢路傍に當て佃居せり、是に於て一分銀を與へて通過せしも途中狙撃を慮ばかりて竹竿の先に提燈を付け是を横へて進む、果して暴漢銃を以て狙撃せしも此の奇計に因て危難を免かれたり、君又宗教の研鑽を爲すや數次斷食手燈一足三拜等の荒行を行ひ以て精神の修養に努め、屢々人をして驚嘆せしめたりと傳ふ、又逸話として明治二十六年九月ペリーシツク汽船に乗じ米國に航し村井吉兵衛氏とパリスホテル

に就き三階の一室を借り一日四分の一の宿料十五弗宛を要求せられて喫驚し、日本茶店より一圓の辦當を購ひ、オーケランド進行途中に於て喫したる茶番的旅行を爲したるの奇談あり、斯の如く君が現今に至れる逸事奇譚少からずと雖も要するに日宗の力に依て唯一慰安の道を求め、進退皆此の見地に因て決し、行住座臥共に常樂我淨の風にそよぎ此の襟懷を脱せず、故に勇者も之を挫ぐこと能はず、權者も之を奪ふこと能はず、唯我獨尊の氣慨自から流露せられて渾然一權威を形成するに至れるなり、(芝區二本榎一ノ五二電話芝一〇〇五)

東京製絨株式會社社長 宮 部 久君

聞く君は水戸藩士宮部孝三郎氏の長男にして弘化元年三月十日を以て生る、幼名を辰之助後久右衛門と稱し、更に久と改稱せり、諱を敏行號を愈青と稱せり、幼少學を好み文事を能くす、同藩の志士關鐵之助及原市之進に就て經史詩文を學び其衣鉢を受けて氣骨稜々たり、能く



師父の言を守り文武兩道の道奥を極む。安政四年十二月十一日不幸にして嚴父の夭折を見るに及び十四の若齡を以て早くも一家の全責任を負ふに至れり。而かも食祿極めて富豊ならずして殆んど一家を支持するに堪へず、挺身職を郡衙の見習に奉ず。時恰も尊王攘夷の論沸騰して國步艱難の時に際せり。櫻田門外井伊閣老襲撃の壯舉あり又志士劍を列ねて英國使節の邸を襲ふの珍事あり天下騒然として人心恟々たり君勤王の志士と交を訂し或は補助し或は隱匿し幕吏の追究を免かれしめたるの義侠は識者の夙に感歎する所たり。君勤王の正論に組し慷慨の氣焔頗る高かりしも奸黨の勢威甚だ猖獗を極め元治元年甲子の歲時期將に迫まらんとす。君等同志の士を結合して藩主に建議し時弊を矯め藩論を定めんとす。藩主支藩松平大炊頭を目代とし國老榊原新左衛門及君等の黨をして水戸城に入らしめんとす。時に田丸藤田の諸氏筑波に破れ其與黨各所に彷徨して混沌たる状態を呈せり。水戸在城の奸黨目代の入城を拒み防戦の狀あり那珂湊に避け幕兵と戦ふ後ち田沼侯使をして目代を欺きて水戸城下に誘ひ是を屠服せしむ。是に於て君の

與黨たる一千二百有餘名は幕府の嚴命に因て各藩に幽囚の身とはなりぬ。明治元年維新の變革に依り赦されて歸國するを得たり。時に君齡二十五歳なり。食祿舊に復して郡衙の主簿に進めり。同二年藩主朝命に依り北海道天鹽國四郡を支配地となすや翌三年會計主簿として赴任し。同地の形勢を遂観し先づ漁獵改善の第一歩として天鹽川の浚渫を計りて功を奏し。爾來不毛の開拓に身心を勞し萬般の事業其緒に就かんとするに及んで廢藩置縣となり。支配地の經營を開拓使に引繼ぎ同五年冠を掛けて故山に歸臥するに至れり。同六年蹶起して帝都に出で石坂周藏氏の經營に係れる石油會社に入り。傍ら金銭貸附の業を開き夙起宵寝の艱苦を嘗め一意専心業務の發展を計りしかば社會の信認日に深厚を加るに至れり。同七年川崎銀行に招聘せられ尋で千葉支店詰となり。同十年東京本店詰に轉じて尙千葉支店を監せり。同十一年第百銀行の創立に與り其支配人に推され頭取原六郎氏を補佐して經營大に努めたり。同十四年故あつて第百銀行及川崎銀行を辭任し。同十五年得盛舎と稱し牛乳搾取販賣を創始せり。先是千葉に該業を開始し保

生舎と號す同縣牛乳搾取販賣業の嚆矢たり、同十九年東京牛乳搾取業組合を組織するや、推されて其組合頭取となり、次で東京米商會所肝煎に推され同二十三年七月之を辭せり、先是二十一年十一月故川崎八右衛門氏等と詢り資本金三十萬圓を以て東京毛絲紡織株式會社を東京府下王子に創立し、君其副社長に撰ばれ同二十四年更に社長となる、抑も同社創立の起源を討尋するに當時洋服の流行を極め毛織物の需用隨て殷盛を見るに至らんとす其額年々巨額に上り貿易上甚だ不利の傾向あるを以て内地に於て是を製造し其幾分の防退を見るを得ば國家の爲め利する所亦多大なるものあらんと所謂國家的眼光より打算して同志と共に企畫したるものに屬せり、斯は創始の事業にして職工の不熟練等は屢々會社の危懼を醸せしも忍耐克己の情に富める君一流の敏腕を揮ひ、操縦宜しきを待て稍其緒に就かんとするに際し同年七月故ありて辭任せり、後社運日に困難の逆境に陥り每期欠損を生じて殆んど成功の目途なきに及ばんとす是に於て乎同二十五年七月再び選ばれて社長となり其經營の術に當れり、此年始めて若干の利益を得株主の決

議を以て大に感謝の意を表せらる、同二十六年六月を以て東京製絨株式會社と改稱す、民間製絨事業の鼻祖たるもの君の辛苦經營に因て稍整理の効を顯はし、尋で二十七八年日清戰役に際し俄然軍用品及地方官被服地の需用を滿たし大に盛運を招致し資本金を増加して百萬圓となし順境の地歩に進めり、尋で三十七八日露戰役の起るや、君全力を傾注して軍需品の需用を滿たし報公の義務を全ふし社運の隆昌を極むるに至り利益配當の割合に比して固定財産の償却諸積立金の多額を計り以て會社の基礎を鞏固にし信用の厚きを致せり茲に於て資本金を倍加し貳百萬圓となす創業以來二十有餘年間一日の如く同社の爲めに盡瘁し、同社とは離る可からざる緣由となり其間に處して時勢の變遷商況の浮沈は延ひて會社の盛衰に波及し辛苦經營其職責重大なるを以て献身的の活動を爲し爲めに腦神經症に係りたるを以て任期の満了を機とし明治四十一年七月退任し閑地に就て専ら靜養を計り漸く其快復を見るに至れり、此の間二年有半にして會社の状態は事業不振毛織物不況の影響等に因て損失を招き前任當局者袖を列ねて辭職せるを以て

再三君を推選して就職を催す。君固辭して容易に起たざりしが同四十三年十二月二十七日株主臨時總會に於て懇請せられ三度社長の職に就けり。老齡鏗鏘として壯者を凌ぎ日夜休養の暇なく刻苦精勵以て社運の挽回を圖れり其成功を見るや蓋し遠きにあらざるべし。

又個人の事業としては去る三十八年の頃より計畫し家族の資産の一部を分つて豊王製紙所と稱し和紙機械抄紙所を王子町に創設し輸出向「ツビー」紙及内地用半紙巻紙元結水引の原料紙、鐵道院用薄葉紙等を製出し漸次聲價を博するに至れり。同四十四年一月合資會社豊王製紙所と改稱し、君無限責任代表者となり爾來紙界の信用を博すると共に今や紙質の改良に伴ひ販路日に開け最も盛況を極むるに至れり。

公職としては府會議員區會議長學務委員公共團體等に多年盡瘁の功を積みしも同三十七年再三の任期満了と共に退任し、今や實業界に在て一方の覇を唱へつゝあり、(東京市下谷區竹町二七電話下谷五二六)

順天堂病院副  
院長醫學士

佐

藤

佐君

帝國杏林界の白眉たる君は舊佐倉藩士井上信利の三男にして安政四年二月を以て生る。幼名を虎三氏と稱し同藩士宇都木常藏氏の私塾に入て和漢の學を修め更に十一歳にして佐藤氏の私塾に轉じ多年研學の功を積まる。師佐藤尙中氏大學大博士を拜するや君又隨て上京し、明治四年始めて大學東校に開設せられたる獨英式教育に幼年生として入り品行方正學術優秀の故を以て直ちに官費生に拔擢せらる。後疾病の爲め退學の止むなきに至り療養に勉むるもの二年、同八年再び大學に入り、貸費生の優遇を受けて校の模範を以て稱せらる。同十四年益々辛雪苦の功空しからずして最優等を以て醫科大學を卒業し、醫學士の稱號を領せり。後佐藤尙中氏の養ふ所となり其性を冠するに至れり。

明治十五年一月獨逸二國に留學し、伯林維那の大學等に於て內科學を研鑽し、斯界の大家に親炙して其淵奥を極む。同十九年歸朝して直ちに順天堂病院に入り副院長の位置を占むるに至れり。院長佐藤進氏は外科の巨擘として名聲噴々たるの人、君は同氏を補佐して内科の一生面を開き、治術の巧妙を以て稱せらる。寔に斯界の双壁たるものなり

明治三十年宮中の台命を拜して侍醫となり九重雲深き所、玉體の拜診を爲す、一家の面目斯界の光榮又何者か是に加へん、後正六位に叙せられ三十五年日本藥局調査委員を命せらる、佐藤家は佐藤巖信より出て累世任侠の氣概に富み武士道の真髓を傳へ特に森殿の家憲を存するあり、君亦遺風を受けて至誠熱實以て業務に當れり、順天堂病院の隆盛にして範を天下に示すに至れるもの豈偶然の結果ならんや、(本郷區湯島新花町九八電話下谷二〇二〇)

實業家 岡崎瀧之丞君

蛟龍雨を望み猛虎風に嘯く、是れ時機を得て奔騰雄飛せんとするの状を示せるもの也、鎧南株式界の重鎮岡崎瀧之丞君將に此の氣概を以て愛知縣の一角より出て、中央帝都の遊子となり、天下群雄の心血を瀧ぎ閃電石火の秘策を弄し、榮枯寸秒を競ふの株式界に身を投じ、屢々危嶮に遭遇して更に屈撓の情なく、剛毅、忍耐を以て事に當り、機智明敏を以て策を立つ、故に波瀾天を衝て來るも畏れず、沈落海底に没

するも意とせず、最終の結果を計り、未然の歸着を極め、一意専心邁往の道を講ず、而も猪突の暴動を戒め、能く前途の荆棘を啓き堂々として歩武を進む、其堅實の手腕は既に斯界に認識せられて老雄の注目を曳き現今の盛名を爲すに至れり、抑も君は愛知縣羽栗郡宮田村の人にして夙に明敏を以て開ゆ、商業に依て身を立て名を成さんと欲し、會ては絹織物又は製糸業に従事せられて稍功を奏し、後上京して株式界に入し、屢々巨利を博し、明治四十一年現住所に株式取引所仲買店を設立し、顧客主義に基き多大の信用を博し、着實至誠を以て斯界に頭角を顯はせり、君資性温厚にして篤實、公共事業貧民救助等に盡瘁し巨額の義捐を爲して敢て名を求めず、皓潔の紳士として其彩華を放ちつゝあり、又以て得易からざる俊材と云ふ可し、(日本橋區南茅場町一五電話浪花一六六一、長二四九一、三八一八)

實業家 林 小兵衛君

至誠を以て人に接し、熱實を以て業に臨まば必ずや成功の月桂冠を得て隆昌を極むること疑を容れざるなり、由來株式界に於ける價格の高低倏急にして變轉究極なく一朝千金を儲得するものあり又巨萬の資財を蕩盡して不幸を訴ふるものありて榮枯盛衰日夕を計られず故を以て皆射倖の時期を窺ひ飛耳張目争て變動の機會を捉へんとす、是れ斯界の狀況なり然も深淵の眞理は敢て他の實業と異なるなく至誠熱實の効果の偉大なるは斯界老練家の稱導する處君既に其の然る所以を察し、店員を戒め常に浮華輕佻の行爲なく華客に對する最も鄭重を極めり、爾來店運日に殷盛を極め斯界の重鎮を以て稱せらるゝに至れり、其商風の獨特なるや亦知る可きなり、

聞く君は大坂市の出身にして安政四年二月八日を以て生る、父を藤田辰造と稱し君は其三男なり、先代小兵衛氏の爲めに知られ其養子となり以て名を襲へり、幼にして機敏才略衆に冠たり、大澤幸次郎氏の商店に入り、精勵群を抜き信用内外に厚く大に將來に矚目せらる、後獨立して株式仲買店を經營し商機の蘊奥を捉へて家運隆盛を招致し斯界

有數なる老舗として社會の信認を博するに至れり、(日本橋區兜町三電  
話浪花長五二一、長九九九、七七二、五一五三、四八四九、五八二五)

實業家 福澤 桃介君

新進氣鋭の實業家として社會の信望偉大なる福澤桃介君は抑も如何の經歷を有するか、君は元と埼玉縣の出身にして姓を岩崎と稱せり、幼にして磊落不羈頗る恬淡の譽れあり、夙に和漢の學に精通し上京して慶應義塾に入り、機智雄辯常に同窓に冠絶せり、福澤論吉氏其非凡の才略を愛し其女を以て是に嫁す、茲に於て君福澤姓を冒すに至れり、明治三十七八年に於ける日露戰役の終局を告ぐるや財界の膨脹甚大にして各種事業の勃興は眞に驚くべきの好況を呈せり、君大に前途を達觀し、先づ株式界に突貫して巧みに其機微を捕捉し、一瀉千里の勢を以て數十萬圓の資財を贏ち得、餘勢を提げて各會社に關係し、其樞機を握つて偉功を奏せり、其脱兎の如き敏捷の措置は實業界裡の老雄をして空しく後へに堂若たらしめ猛進又猛進遂に現今の大成を見るに至

れり、然も尙足れりとせず各方面に向て盛に活躍を試みられつゝあり  
資性活達にして洒落、爽然たる交際振りは慶應義塾時代より習熟せる  
獨特の技倆にして所謂三田一流の鋒鏘を流露せるもの也、將來ある新  
進の實業家たるは天下の定評にして吾人亦蛇足を要せざるなり、(東京  
府下澁谷四三三六、電話特長七五三)

### 宮田源五郎君

帝都第一流の竹商として名聲を内外に馳せたる宮田源五郎君は幼にし  
て聰慧、始め碩儒岡千仞の門に入て漢籍を學び、更に慶應義塾に轉じ  
て文明の學を修め造詣する處甚だ深し、由來君家は累世竹商を以て名  
あり、長兄某氏其衝に當りしも不幸にして夭折せしを以て君は其遺孤  
を扶助して祖業に従事せざるを得ざるの機會に接せり、茲に於て乎、  
君は斷然中途退學して一意専心店務に従事し緻密なる頭腦と周到なる  
注意を以て家運の隆昌を謀り各地を跋渉して竹類の調査を重ね更に村  
田保氏の水産事業の講話を聞て感激し、爾來竹類に對する精細なる研

究を遂げて大に得る處あり、往年帝國農科大學に於て竹類の調査を爲  
さんとするに當り有名なる博士大家某氏が君を訪問して其研究の效果  
を徵せんとす、君實地研究せる細密の事項を擧げて詳々として説く所  
あり、某氏大に驚嘆して屢々君が店頭を訪ひて其説明を聞き實地研鑽  
に従事せられたる事あり、又農科大學へ竹類の標本三十有餘種を提供  
して斯界の研究に資せんとせらる君が竹類に對する研究の豊富なる此  
の逸事を以て知る可きなり、  
君は店務に映掌する傍ら人道の眞義道德の根源等に就て大に其蘊奥を  
叩き金光教の教義を信奉して多年斯道に盡瘁し同教者の尊重する所た  
り、往年日露戰役の起るや同教會有志者と相謀り赤心一致會を設立し  
出征軍人及家族遺族等の扶助慰問に盡瘁し近年又報教の至誠より金光  
教布教興學基本財團の設立に努め現に其理事として經營怠らず、更に  
四十一年九月金光教至誠會の組織せらるゝや推されて其幹事長となり  
同教東京地方に於ける布教發展と人世救濟事業とに努力し逐年隆盛を  
見るに至らしめぬ、其組織の自然的にして温情の洋々たるは實に敬服

の外なきなり、

君既に庶務に精勵し宗教に熱注せらる、其志操の皓潔にして素朴の清風を存するは吾人の嚆々を要せず、眞に欣慕すべき崇高の人格を備へたりと謂ふ可し、(京橋區炭町一一電話京橋一三〇九)

横濱貿易倉庫  
支配人 高橋 徳之助君

君が熱實至誠にして皓潔雪の如く華美虚飾を戒め實踐躬行に力めつゝあるは世既に公評ある處吾人茲に嚆々を要せず、終始一貫の精力主義は能く家運の隆盛を招致し、金港の名門たる高橋家の異彩をして益々光輝あらしむ斯の如きは當代の精華にして後進の以て仰ぐべきの儀範たらずんばあらざるなり、聞く君は千葉縣平民小宮常吉氏の二男にして明治七年一月十一日を以て生る、二十八年横濱の富豪前貴族院議員勳四等高橋喜惣治氏の養子となり、三十七年東京帝國大學法科大學を卒業し法學士の稱號を領せり、後横濱貿易倉庫に入て支配人となり、爾來縦横の才略を揮ひ社會の信用を博し、同會社の事業をして發展擴

張の盛況に至らしめ、其主持せる精力主義は遺憾なく發揮せられて多々益々辨するの概を示せり、爾て其家庭を窺ふに長幼序あり夫婦別あり、人倫の大道沛然として行はれ禮節を重んじ躬行を慎む、眞に高風慕ふ可きにあらずや、(横濱市西戸部町一三〇)

小川 六右衛門君

由來北越人士は堅忍にして經營の才に富めり、故に空拳能く偉功を遂げ財界の實力を以て帝都に雄飛するもの尠からず、君亦北越の出幾多の苦境に立て屈擣の狀なく毅然として奮闘を繼續し屢々敗れて屢々成る、一高一低常なき株式界に立て一貫の努力は眞に北越人士の好典型たり、聞く君は越後國頸城郡早川村大字瀧河原の人小川富士太郎氏の男にして明治十二年を以て生る幼より吞舟の氣慨ありて帝都に其鵬志を伸べんと欲す、父母の諾せざるを以て暫く蓬茅の間に雌伏せしも遂に決然上京し、横山源太郎首藤健助今井文吉氏等の各商店に歷仕して備さに株式界の商風に通せり、今井文吉氏退隱の後仲買人となり、專

ら顧客の便宜を計り信用の多大なるを得たり、東鐵株買収の敗將と評せるものありしも確的なる人格と堅忍の資性とは決して是に屈撓するものにあらず英氣を養ひ時機を計り捲土重來の快舉は蓋し遠きにあらざるを知る可し、(日本橋區兜町三電話浪花四八九、一四九四、一七二七、三五四五、四五二八)

實業家 中居健藏君

老齡鑠鑠として壯者を凌ぎ、剛毅膽勇能く企畫を施す、牙籌精密にして細微を認らず、文明の進化に伴ひ營業の指針を定め一道の光明に接して脱兎の如く邁往の策を執る、而も資性温厚にして長者の風を備へ迎客の深情實に欣慕すべきあり、徳望旺盛の稱ある亦宜なると謂ふ可し。

君は埼玉縣の出身にして天保十二年三月を以て生る、父を福田安左衛門氏と稱し長兄を安之進氏と云へり、累世土地の名門を以て鳴り二十三世里正を勤績せり、若年十二にして出で東京の中居氏を襲ぎ木綿

商を營み大に社會の信用を博し家運益々隆昌を極むるに至れり、明治十五年支配人を置き營業方針に刷新を施し以て店務の進歩を計れり、二十三年區會議員に推され三十二年府會議員に擧げられ、同三十三年株式會社東京共立銀行を創設し頭取兼專務取締役となり同行の樞機を執り其發展に貢献する處尠からず、往年令息宗太郎氏をして店務の總括に當らしめ、君専ら公共事業の爲めに盡瘁せらる、區政の刷新府政の改善に努力し最も清硬の名を博せり、而して又仁慈の念深く救濟事業に資を投じ陰に陽に貧民を庇護せしもの幾干なるを知らず、老軀を提げて公益の爲めに盡瘁す、君の如きは蓋し異數と云ふ可し、(住所淺草區今戸町七電話下谷六〇七店日本橋橋町一ノ四電話浪花二三〇六)

飯野吉三郎君

帝都の西郊穩田の奇人飯野吉三郎君夙に豪放磊落純日本主義を鼓吹し世界統一論を唱導し屢々奇禍に陥る、其賦想して精神の一致を計り無我の境に入るや古今東西森羅萬象の相參差し相交渉する處瞭然として



其思想に感應し來る眞に奇人たるを失はず、既に二十年前に於て日清日露の事端あるを悟り、茫々たる宇宙に大精神の存在するを確認し六合の平和を永遠に維持するを眞理と解し此の眞理の解決は日本帝國の責任たるを揚言す、政府官憲以て無稽の暴言となし遂に狂人となして獄に投せり、君尙依然として熱烈是を提言して止まず、其出獄するや精神團を組織し道場を設けて精神の修養に力む、河野千坂等の名士を始として四方有爲の人才相往來して結合の鞏固を計れり、抑も宇宙の眞理は高遠にして是が全般を窺ふに難く是を宗教より觀し、是を政治より説くも愈々紛亂し愈々隔離す、古往今來幾多の先哲が苦辛慘澹するも是が解決を得ざるは其全般の八分を解して二分の殘餘を洞見し得ざるに基因せり、而て此の二分の確證を得るの日は萬般の疑點は氷解して六合の大勢茲に確定して又動かす可らざるに至る、此の解決を求めて暗澹たる六合の平和を欲する是れ精神團の主義綱領なりとす、吾人試みに其解決如何を問へば君笑て答へず然れども其心事に釋然たるものあるが如し、須臾にして曰く眞に天祐を保有し給ふは世界廣し

と雖も我 天皇陛下あるのみと言外無言の感を示せり吾人は切に其精神團の健全にして國社の増進に資する所大ならん事を至願して止まざるなり、概傳に依れば君は岐阜縣岩村藩の劍道指南たる同姓益衛氏の三男にして慶應三年八月二日を以て東都の邸内に生る、幼より奇骨あり四方を週遊して志操を鍊り筋骨を固む、夙に宇内の大勢を速觀して往々過激の言論に涉り一時世の忌憚に觸れて奇禍を買へり、今や穩田の一角に據て光輝大に揚れり、(東京府下千駄谷字穩田二五電話芝四六四、一七四九、二六〇二)

### 鑛山業 久原房之助君

君が鑛業に關する經驗の多大にして確的の識見を有するは斯界大家の既に驚嘆する所なり、現今最も隆昌を極めつゝあるもの豈偶然ならんや、抑も君は明治二年を以て生れ夙に慶應義塾に學び學績優良を以て卒業せり、後藤田組の招聘に因て入社し、小坂銅山の事務に當り、精勵衆を抜き刻苦經營に従事し重役の信認甚だ深厚なり、三十一年に至

一〇八  
り藤田組の高級幹部の元老が同業の前途を危惧して廢坑となさんとす君是を聞て大に驚き極力反對して其不可を陳じ、銀山としては價値なしと雖も銅山としては大に有望なるを以てす、高級幹部員其熱誠に感じ、更に君をして小坂銅山長たらしめ、其經營を一任せり、君は爾來積弊を一掃し上下相親和一致して其業に當りしかば其功空しからずして逐年隆昌に赴き現今の大規模を確立するに至れり、三十五年同銅山の經營を武田恭作氏に譲り、本店詰となりしも近來獨立を以て鑛山業に従事し、數ヶの有望鑛山を有して勢威冲天の概あり、帝國有數の鑛山たる茨城縣日立鑛山の如きは君の所有に屬せり、現今現住所に鑛業事務所を設置し厚母二郎氏の如き専ら企畫に參與して補翼の任を盡せり、最も將來ある新進の鑛業家として名聲大に揚がれり、資性温厚にして最も孝養の道を盡し、沈毅雅量能く人を容る、世の崇敬を受くるもの亦所以なしとせんや、(京橋區銀座一ノ一八電話京橋一七、一八、一九)

氣球製作所  
々々長

山田猪三郎君

世界に歴史ありて以來最も精銳なる武器を以てしたる激烈なる大戦闘なりと云へる日露戦役を去ること未だ十年を出でず而かも武器は早くも過渡時代となれり世界列國に於ける兵器の研究力は日一日より進んで此に一線を劃し尙し現代及び將來に起るべき戦争はと問はゞ即ち空中戦を豫期せざる可らず

抑々國家を擁護し之を強大にし且つ長久ならしむるものは一に武器の精銳如何に繫るとせば空中飛行器の如きは至大至要のものに屬し一日も之が研究を怠るべからず一日も早く完全に之を製作せざるべからず孰近我國威の發揚と共に諸種の事物は一瀉千里の傾向を以て發展し來り海に陸に利用の道を啓き諸事悉く列強と馳騁せんとするの勢を顯はすに至れり今や我國の狀態として飛行船の製作を確實ならしむるは最も緊要なり山田君は十有數年以前より既に大に見る所ありて心身を斯業に捧げ爾來熱烈なる研鑽を累ね茲に其の大成を看んとするに至れり我が帝國斯界の先鞭者として又其の偉勳者として吾人は先づ君を推さざるを得ず其の熱烈なる態度其の細心なる注意は總て幾多發明に資す

る所あり

初め君は陸軍當局者の意を受けて一意専心此の發明に従事し爾來寢食を忘れ辛酸を嘗めて是が研鑽に努め歳月を積むこと六星霜明治三十五年に至りて稍や完全に近き氣球を發明し漸次是れに改善を施し遂に其の獨創に係る純日本式氣球の完成を告て是を陸軍省に納付するに至れり此の効果は日露戰役に當て一大光輝を放てり彼の旅順包圍軍の敵情偵察に些かも遺憾なからしめたるもの一に此の氣球に基因せりと傳ふ豈偉大の功勳と稱せざるを得んや君が此の發明を爲すに當て狂熱他を顧みず世俗の冷罵を負ひ風船狂を以て目せらるゝに至れり嗚呼此の風船狂世人の夢想だもせざる偉勳の階段を冷罵の中に築きつゝありしなり君が名譽の月桂冠を戴くや彼等は始めて側目して其の光榮に驚倒せり尋で君は現今全世界の發明界の燒點たる空中飛行船の創作に着手するに至り其の數理的綿密なる頭腦は晝夜間斷なく機微の發見に注がれぬ昨夏第一號船の製作を竣はり試験の結果直に第二號船に着手し今春竣成して將さに飛揚の第二步に入らんとするや天候の支障に因て中途休

止の不幸を見るに至りしも獨特の氣囊を有し完全の地步に進める該器は奈何ぞ手を空しうせんや本年五月再び飛行試験を行ひて良好なる成績を得たり而して又第三號船は七月中旬完成し今既に試験準備中なりと聞く其の成功は獨り君が自ら信するのみならず這般の消息を得たる一般人士は最も深く信認して措かざる所なり君が獨特の創見に因る從來の成績に徴し東洋大帝國の誇りとして世界に一大異彩を輝かさんと蓋し遠からざるを知るべし、抑も君は南海紀州の出身にして曾ては海軍事業に従事せしも緻密の頭腦は發明界の偉傑たるに適し爾來慘憺たる幾多の徑路を経て遂に能く今の大名を博するに至れり我國發明界のオーソリチーたるもの君を措て將た又誰かあらん、(東京市芝區高輪北町五十三番地電話芝一四七一工務所荏原郡大崎町居木橋四二〇電話芝一八四四)

銀行家 池上 仲三 郎君

信州の偉人田中平八豪宕の氣概を以て京濱間に盛名を擧げ自から天下

の糸平と稱し帝國財界に於て縦横の敏腕を揮へり、没後尙其逸事美談は天下に喧傳せられて立志成功の鵠鑑たり、君又其の後輩として帝都に出で苦戰奮闘を重ね幾多の銀行會社に關して偉功を奏し遂に巨萬の財を蓄積して財界の重鎮となり、信州男兒の特有たる剛毅雄膽堅忍不拔の氣概を發揮し、先輩田中平八の遺業に多大の力を盡し光輝ある彼の事業をして益々彩華を放たしめんとす、社會の推敬を受くるもの豈所以なしとせんや、

抑も君は長野縣高田の人安政四年十月を以て生る、幼にして穎悟和漢の學を修め財政經濟の諸學に精通せり、早くも縣下の興業殖産に注目し土木治水の改良を計り公共事業に貢獻する所尠からず、明治二十年撰ばれて縣會議員となり頗る清硬の名を博せるも偶々感悟する所あり断然政界を去て實業界に志を寄せ北海道に涉り鑛山事業に關して苦心經營する所あり、稍其緒に就くに及んで是を後輩に托して上京し、明治二十九年田中平八高島嘉右衛門の贊助を得て生命保險會社を創設して其専務取締役となり、外に北海道鑛山株式會社を創立して其副社長

となれり、同年九月田中平八の遺志を繼承せる帝國貯蓄銀行の設立を見るや入て其取締役となり、尙又同行の母行たる合資會社田中銀行に投資して取締役となる、是より先き横濱の豪商大濱忠三郎と謀て諏訪電氣株式會社を起して取締役となり尙商品取引所理事に推擧せられ爾來君は田中銀行を中心として幾多會社の經營に努力し帝國財界の一權威として名聲籍甚たるに至れり、(下谷區花園町一一電話下谷一一八三)

### 青田 綱三君

君は舊相馬藩士にして弘化元年八月十九日を以て生る、維新の際相馬家の近習目付兼小納戸役を命せらる、明治三年更に同家の家扶に進み同四年廢藩置縣に際して藩主に扈從して帝都に出て爾來二十六年迄舊主家の爲めに純忠を盡し財政整理の任を全ふし以て主家の基礎を確立せり、由來同家は二宮尊徳の説を納れ富田高慶の言に聞き殖産興業勤儉蓄積の道を講じ、逐年功成りて財政富豊なるに至り人心漸く荒怠の念を生じ稍紊亂の緒を開き將來憂虞に堪へざりしものあり、君断然大

斧鉞を以て釐革を謀る、奇禍の隨て生ずるは古今東西の歴史に散見する處君亦此の數に漏れず、一部人士の怨恨を受け、忠志却て惡逆の讒りを受けしも天道正を照らし善惡直ちに炳然たるに至り、君が冤枉氷解すると共に一層の信用を博するを得たり、後總武鐵道布設に盡瘁し其成立を見るや推されて同社の重役となり、樞機に參畫して施設する所大に効を奏し、名聲頓に實業界に發揚せり、三十四年更に同社長となり幾多の企畫に多大の苦衷を重ね事務の進捗鐵路の延長等に傾注し高架鐵道布設に當て本所區民の反抗に對し適宜敏捷の處置を施し終に目的を敢行し現今同區民をして却て其徳を謳歌せしむるに至らしむ、其卓見明識眞に敬服の外なきなり、明治二十二年十二月始めて總武鐵道株式會社に創立委員の一人として君の署名を見るや人其成功を云爲せりと雖も着々其効果を擧ぐるに及んで人皆驚嘆せざるはなし、彼の相馬事件なるものは野心家の中傷に外ならず、とまれる當代得難き實業家として世の推敬を拂はれつゝあるは吾人の贊辯を要せざる所なり

〔下谷區三ノ輪町入九電話下谷六五〕

藥學博士帝國  
東京大學教授

### 下山順一郎君

天の將さに植物の花を開かんとするや先づ嚴寒を凌ぎ、天の將に大任を人に下さんとするや先づ其心志を苦ましむ、故に人の苟も事を成し名を揚んとするや先づ崎嶇崔嵬たる行路の難を経ざる可らず想ふに丈夫世に處する須らく機會に乗じて時勢を洞見し非凡の活眼と遠識を以て本領となすを要す、吾人茲に後進の爲め立志の龜鑑となさんと欲する君の如きは如上の消息に洩れざるの傑士と稱すべきなり

抑も君の閱歷を按ずるに尾州犬山の藩士にして嘉永六年二月を以て呱呱の聲を揚ぐ、弱冠伶俐寡言にして大志あり、資性文學を好み益雪の苦學を経、造詣甚だ深し、果然君は人材を以て拔擢せられ明治三年遂に貢進生となり大學南校に入り専ら獨逸學を修め後更に大學醫學部に入りて製藥學を研究す當時學生靡然として他科に傾走するの時運に當て君は毅然として期する所あり、乃ち藥學を研修せり、君在學數年學業全く卒へ明治十一年藥學士の稱號を領し、直ちに陸軍藥劑官に任

せられ次で東京大學助教、山林學校教授等に任せられ循々乎として後進の薫育に努力す。同十六年日本藥局法編纂御用係となり鋭意其職務に従事し後更に官命を帯びて獨逸に留學し孜々として斯界の大家に親炙し其蘊奥を究むること數年、學業既に成り、歸朝するや直ちに擧げられて醫科大學教授に任せられ尙高等學校教授を兼任す。三十二年藥學博士の學位を授けらる。蓋し本邦藥學博士の學位を受領せるは君を以て嚆矢とす。尙君は東京藥學校の如き幾多の公衆書生の爲め深遠なる學識を以て忠實的之が養成に心身を傾注して多年一日の如し、尙往時より施行せられつゝある藥劑師試験委員に撰擧せられ連綿以て今日に至れり。君公務の餘暇、其博聞強記卓逸なる所見を以て斯界の爲め著述せる書籍甚だ多く世人の好評噴々たり。君天資温厚篤實、人に接するに快濶更に城壁を設けず、謙遜己れを持し頗ふる當世滔々たる濁流を蟬脱せるの概あり。噫君の如きは鷄群の一鶴たりと云ふも敢て題言にあらざるなり。(下谷區上根岸町八六電話下谷四十一番)

實業家 佐々木政吉君

義氣旺盛にして人の宛乏を憐み挺身其難に赴ひて一家の煩累を辭せず屢々公共事業に關して盡瘁の勞を執り私財を抛て成功せしめたるもの幾干なるを知らず天下知名の大家君が援護に因て其位置と名望とを保維せしもの一二に止まらず、皓潔純誠にして敢て名利に馳せず恭謙身を持し遜讓人に接す醇々として語り滾々として説く皆其肺腑より出で、一の虚飾なく一の浮華なし眞に當代輕佻の輩をして慚死せしむるに足る。數十年來踏襲せる一貫の任俠は常に困憊を救ひ倒壊を補ふにあつて、以て黒幕的活動に止まり社會に大なる名聲を發揚せずと雖も其美質徳性は既に識者の間に喧傳せられて噴々たるものあり、常に大名を欲せず實踐躬行を主義とし超然毀譽の外に立ち邁進以て任とす遂に是れ地中のものにあらざるなり。

今其經歷の梗概を叙し後進發奮の資料たらしめん。

抑も君は岩手縣一ノ関町の産、累世小間物商を營めるを以て殿父喜右

衛門氏は君をして祖業に従事せしめんとす君幼にして聰慧四方の志あり年十三にして石の巻に出て伯父松田正助氏方に於て紙荒物問屋業に鞅掌するもの五年、更に帝都に出で日本橋區伊勢町の茶問屋江市屋に仕へ、刻苦精勵以て業に従ひ、奇智雄略以て効を擧ぐ、居ること三歳にして斯業の蘊奥に精通せり、茲に於て獨立自營を以て同區本石町三丁目茶問屋を開始し横濱市北仲通に支店を設け専ら海外輸出に従事し商況大に隆盛を招致したるも前途を洞觀して翻然業を廢せり、明治二十四年の交君思へらく仙臺邸に於て醸造せる所謂仙臺味噌は藩祖政宗公が軍用として始めて製造せられ其美味にして滋養分に富むこと天下に冠絶し、仙臺の名産として社會に歌はる、是が發展販賣を計るは即ち東北の産業を大ならしむる所以なりと銳意其衝に當り宮内省を以て數十萬樽の買上を命せられ、帝國軍艦に於ては數百日間酷暑嚴寒に堪へて更に變質せず依然佳味を持續し海用としては最良なる糧食品たることを證明せられたり、由來本品は仙臺屋敷の秘法にして是を常

用すれば胃病の煩なく活發なる氣力を保維し、酷暑嚴寒等の氣候の變化に逢て更に風味を損じ變色の憂なきは天下の公評にして敢て誇大の言にあらず、今や滔々巨額の需用を満たし、家運の隆昌を致せるは先識の明鑑ありと謂はざる可けんや、  
 鰥寡孤獨を憐み貧民を救助するは君の一種の性癖にして陰に陽に仁恤を施せしもの尠からず、曾て東北地方の大飢饉あるや君卒先して救濟事業に従事し、栗原郡外數郡の地勢と情況とを察し、大資金を投じて木炭を製造せしめ一面是を帝都に輸送し各官衙を説て需用の路を開き幹旋誘導至らざるなく幾十萬の貧民をして頻死の域を脱せしめたるは今尙朝野人士の賞讃して措かざる所たり、  
 又四十三年八月東京府下大洪水に當て罹災民の救助に従ひ兩國々技館に收容せる八千の宛民に味噌豆腐等を給し尙店員の外加村少佐指揮の下に朝日香取二艦の水兵數十名及力士數十名の力を籍り汎濫汪溢せる濁流に數十雙の小舟を棹し萬餘の罹災民に味噌汁を給與したるが如きは世の齊しく嘆賞する所たり、

宮城縣下に於ける大山林柳下事件に關し各關係者間に紛議を生じ訟廷を煩はし疑獄を起す煩累數村に亘つて喧囂容易に治むべくもあらず君驟起して幹旋に力め長短利害を明かにし説述大に力ありしかば衆悅服して議速かに決せり是れ君が熱實にして至誠なる能く人心を感動せしめたるに基因せずんばあらず、

又群馬縣下南木山柳下事件に當て紛争を惹起し暴力と威力とに因て關係村落の利益を他に壟斷せられんとするや君委囑に因て情況を審査し暴戾を戒め正義を説き遂に村民の希望を貫徹せしめ尙數萬金を投じて植林を計る其行動の熱誠なる眞に敬服に値ひすと云ふ可し、近來水力電氣事業が著しく進歩の趨勢を示せり然も信濃川水力電氣を企畫せるもの究境に陥り其救済を君に請ふや君前途を遠觀し其究狀を憐み一臂の力を割き大に發展の道を講せり、偶々疑きに救済を求めたるもの背信の行爲あり却て其中傷を受けしも正邪炳然として信用舊に倍加せり今や其前途の光明を認むるに至れり、

又十五銀行と共益完全肥料會社との間に紛議を生ずるや君直ちに其實

情を考覈し理非を正し公道に就き正を踏み邪を排し邁往敢行遂に株主の不幸を救ひ圓滿の解決を得せしめたるは識者の謳歌せる所なり、尙其特製に係る調味噌を皇室に献納し、群馬縣南木山の松茸を献納して何れも嘉納せらる其篤行眞に特筆に値ひす、君常に國家公共上に注視し苟も國民の福祉社會の利益となるべき事業は進で其完成を期せしめ正義の爲めには一家一身を顧ざるの氣慨あり、而て又宗教上に多大の趣味を有し曹洞宗總本山總持寺が鶴見に移轉するや其企畫に與り資途を求め成功を遂げしめたる偉績は管長石川素童氏等の常に嘆賞する所に屬せり、君又名士を補佐し學生を親愛し其業を遂げしめしもの殆んど枚擧に遑あらず、吾人又斯の如き清皓の君子に接せず、而も未だ盛名の揚らざるは恭謙の徳あるを示せるなり、虚名に憧憬し榮利に汲々たるの士以て鑑とする所あれ、(日本橋區久松町河岸電話浪花一四七七)

衆議院議員  
自由通信社長

小久保喜七君



君は茨城縣の出身、慶應元年三月廿二日を以て猿島郡新郷村中田に生る。幼にして栃木縣佐野町に移り吉田田沼の二先生に就て漢籍を修む。明治十三年國會請願の議起れり當時君は新井章吾氏と政論を試み大に得る所あり、此年秋歸郷して有志と自由民權の説を唱導し、十六年春館野岩崎の諸氏と共に有志會を組織し又五州志士舟遊會を起し君推されて幹事となる、同年十一月有志總代となり自由黨大會に出席し大井憲太郎氏と相知るに至れり、爾來加波山事件大坂事件等に關して奇禍を招き、二十二年後藤伯大同團結を主唱するに當て有志と大同共和會を組織し君之が幹事たり、大隈伯條約改正問題起るや君中島又五郎氏と共に有志總代となり中止建白書を元老院に奉呈せり、後自由黨本部幹事に推され立憲自由黨の結黨式準備委員として盡瘁し結黨式舉行の當日刺客の爲に刺さる、刀痕今尙其面上に印せり當時折田兼至小山久之助植木枝盛の志士と相並んで四天王を以て稱せらる、二十五年茨城縣會議員となり副議長に推さる、後故あつて自由黨を脱し神輿知常大井憲太郎佐々友房等と非内地雜居論を主張して天下を風靡し、二十八

年茨城縣會議長不信任案を提出す君期する所有て該案を却下して紛擾を惹起し更に臨時縣會に於て副議長不信任案を提出せらる、竟に内務大臣より縣會の解散を命せられたり、君再び縣會議員に當撰したるも議長撰舉に於て二票の差を以て敗れ直ちに議員を辭せり、三十一年南清地方を巡遊し臺灣に於て臺灣通信社を組織せしも三十三年歸朝せり三十四年政友會に入り院外有志會の幹事となり四十一年總撰舉に際し最大多數の得點に因て衆議院議員となり日比谷原頭に一異彩を放てり四十二年政友會の機關自由通信社長に推され盛名中外を歴せり、爾來政友會の重鎮として黨務擴張の爲めに多大の貢獻を爲せり、(四谷區右京町一一電話番町一八一三)

### 實業家 横田千之助君

身を蓬茅の間より起し備さに苦嚙艱難を経て苦學力行の徑路を辿り遂に成功の月桂冠を得るに至る、氣骨稜々として任俠の氣眉宇の間に溢れ常に士を愛し客に接す滾々諄々として盡きさるの親情は人をして敬

服の外なからしむ、當代得易からざる實業家と稱す可し、  
 聞く君は栃木縣平民横田市太郎氏の二男にして明治三年八月二十二日  
 を以て生る、父君市太郎氏商業に従事して一大蹉跌を招き遂に倒産の  
 不幸を見るに至れり、故に君は幼にして種々の艱難に遭遇し汝々汲々  
 家運の興復を計りしも大履の傾覆易そ一柱の支ふる所ならんや、茲に  
 於て或る織物商店に店丁として入り商業の見習に従事せしも熟々前途  
 を洞觀し文學に因て身を立てんと欲し蹶起帝都に出て、苦學に努む、  
 後怪傑星亨の知遇を得同家に寄食して法學院に通學し學績優良を以て  
 業を卒り次て辯護士試験に合格して辯護士となり熱心以て民事一般  
 の事務に執筆し名聲頗る發揚せられたるも實業方面に志を伸へんとし  
 京濱銀行日本旅館火災保險株式會社の各監査役、東京製材株式會社の  
 取締役として一方に雄を鳴らしつゝあり、其熱烈にして皓潔の氣概は  
 常に社會の欣慕を得て家運頓に隆盛を招致するに至れり、(麻布區市兵  
 衛町二ノ一電話芝九〇)

横濱正金銀行 外國課長 今 西 兼 二 君

瀟洒温健磊落不羈にして社交上の機微に通し圓轉滑脱人をして推敬に  
 堪へさらしむるものは久しく泰西文明國に在て交際場裡を往來し上流  
 社會の慣行に習熟して辭禮の巧妙を極むるに因てなり、  
 君横濱正金銀行の海外支店を管掌し歐米各國を巡歴し至誠勤勉を以て  
 一貫し、行務の刷新事務の進捗を計り秩序整然として見る可きものあ  
 り、由來横濱正金銀行たるや創立以來三十有餘年外國貿易機關として  
 其職責を全ふし頭取を更ゆること十數回然れども其營業方針は依然と  
 して特別條例の主旨に準據し曾て變渝あるなし、其事業たるや世界各  
 國の財界に多大の關係を有するを以て時に或は意外の損失を招くあり  
 て一大打撃を受けることなしとせす然れども先見の明識を有するもの其  
 要位を占るに及んては巧みに是を未然に防禦して此の災禍を免かるゝ  
 ことを得んか、茲に於て知る同行外國課長の責任の比較的重大なるを  
 君此の重大なる責任を負て外國課長の要位にあり、非凡の人才たるや

吾人の辯を俟たす二十有餘年間同行の幹部として盡瘁す、其功績の多大なる擧げて敷ふ可からず、常に同行の先輩として將又元老柱礎として推重せらるゝもの豈所以なしとせんや、(府下荏原郡池上村市ノ倉

南波禮吉君

株式界に於て敏腕と精勵とを以て巖然頭角を顯はせる南波禮吉君は愛知縣西春日井郡金城村の出身にして明治六年五月廿一日を以て生る父を傳内氏と稱し君は其長男たり、君家は累代名古屋藩の一諸侯たる石川家の世臣なり、幼にして明敏頗膽略あり、早くも時勢の大要を悟り愛知縣中學を卒業するや上京して慶應義塾に入り、茲に文明の教育を受け明治二十六年を以て卒業せり、偶々安達賢藏氏の主管たる株式仲買店に入り刻苦精勵群に絶せり、書生にして仲買店に入るは蓋し君を以て嚆矢とす、店主不幸にして一蹶墮を招き其創痍癒へずして遂に閉店の已むなきに會せり、茲に於て君木下七郎氏と謀り今井萬吉氏名義を以て刃商店を経営するに至れり、同店か短日月にして急速の進歩發

達を爲せるは君の如き老練の敏腕家か畢世の力を傾注して努力奮闘を盡せるに因てなり、爾來協力和衷し圓滿に店運の進歩を計りしも今井氏退隱の後君代て其後繼者となり、名實共に其當面の責に任し、十有餘年間鍛鍊せる豊富の經驗を提げ獨特の膽勇と才略とを以て邁進し、屢々奇功を奏して店運益々隆昌を極めり、往年撰はれて仲買委員、及副幹事長となり、斯界の爲めに多大の貢献を致せり、爾來徳望隆々たるに及び第一流の仲買人として社會の信認殊に偉大なるに至れり、(日本橋區坂本町一七電話浪花四一八、四三三)

東亞煙草株式會社社長 佐々熊太郎君

官に在ては秀才の名を博し、野に在ては實業界の偉傑を以て稱せらる才識双美の俊秀たるや素より吾人の贊辯を要せず、明治三十年以來煙草專賣に關して多大の貢献を爲し、南船北馬屢々任地を更ゆると雖も終始一貫の努力は内外の信望を繋ぎ、累進して東京第一煙草製造所長となり、明治三十九年感あつて辭任し、在野の人となりしも直ちに東

亞煙草株式會社を創立して社長に推され爾來の健闘は例に因て猛烈を極め鋭鋒犀利尖頭を超越し識者をして三日不遇の嘆を發せしむ、現今聲望隆々として揚り旭日冲天の概を示し帝國有數の實業家たるに至れり、性仁慈宏量にして部下を憐み後進を扶掖す、其滾々たる至情の流露は不識の間に人をして欣慕措く能はさらしむ其高風豈慕ふ可く仰く可きにあらずや、

抑も君は岐阜縣士族佐々仙一郎氏の長男にして元治元年二月四日を以て生る、明治十四年同縣立中學校を卒業し直ちに同縣師範學校に入り翌十五年を以て卒業せり、尋て東京師範學校に入りしか病魔の襲ふ處となり中途退學を爲し、暫く家庭に於て靜養に勉めしも同十八年大藏省主税局に出仕し、翌年九等主税局に任せられて鹿島縣に轉補せらる爾來遞信省、東京府、警視廳其他に歴仕し、常に同儕に推重せらる、同三十年一等煙草專賣所長に任せられ同所設立に關して敏腕を發揮し次て專賣局事務官作業部長、專賣支局長等を経て同三十七年東京第一煙草製造所長となれり、是より先明治三十年正八位に、同三十三年從

七位に、同三十五年正七位に、同三十八年從六位勳六等に叙せらる、同三十九年日露事件の功に因り勳五等双光旭日章を賜ひ金八百圓を下賜せらる以て其盡瘁功勞の大なるを窺ふ可し、此年冠を掛けて野に下り、江副、久米、龜澤、岩谷、杉山氏等と計つて東亞煙草株式會社を創立し、其筋の承認を得て取締役社長となり爾來拮据勉勵以て其局に當り今や清國營口、朝鮮京城に支店及製造所、總販賣所を設け、尙清國は大連、營口、安東縣、遼陽、奉天、鐵嶺、長春、吉林、哈爾濱に朝鮮は京城、仁川、平壤、釜山、元山等に販賣所を置き東洋全般に亘て大活躍を爲し、泰西各國の老雄をして斯界に指を染めさらしむ、現時帝國商業家か獨米商人の爲めに跋扈せられて清韓に於ける貿易の萎縮を嘆しつゝある際に當て益々事業を擴大して販路を増進せる偉觀は吾人をして眞に快哉を叫はしむ、此の盛況を招致せるもの佐々社長の奮闘努力と高級社員の刻苦精勵とに依らすんはあらず、同社の將來は帝國の面目に關する多大の影響を及ぼすへきを以て君の健闘を望むや一層切實なり、

君志操高潔にして國家觀念を抱持するや久矣。曾て京都人飯田新七氏及松崎丹羽氏等と謀て日本武徳會を組織せんと企畫し、當時京都府知事渡邊千秋伯に面して其所信を述へ爾來勇奮各縣を跋渉し有志を勸誘して遂に現今の基礎を確立せり、眞に斯界の恩人たるものなり、君か的確なる牙籌は常に一糸を誤らず、苟も事に當て其肯綮を得ずんば止まざるの氣概は何れに向ふとして發揮せられざるはなし、將來多き君の機器と事業とは實業社會の羨望して措かざる所なり、吾人か刮目して其偉業を頌するの時期蓋し遠きにあらざるを知るへし、(府下千駄ヶ谷町原宿一四〇、電話芝二八八九)

實業家 田邊勉吉君

舉世滔々として榮利に走り浮華輕佻の風上下に浸潤せる當代に於て義氣旺盛にして人の爲めに熱涙を灑き至誠人心を動かし血あり涙あるの行動に出てしむるもの君の如きは眞に異數なり、曾て郡司大尉の壯舉を慕ひ其究乏を憐み福島中佐を訪問して單騎旅行に因て得たる幾多の

資を割て報效議會に義捐せしめたるの一事は天下識者の間に賞讃せられたる一美談たり、當時君は福島中佐及郡司大尉に一面識を有せざる白面の書生時代なりしと云へは如何に其義心の洋溢せるかを窺ふ可し抑も君は貴族院議員錦鷄間祇候田邊輝實氏の長男にして夙に東京帝國大學に入り學績優良を以て卒業し法學士の稱號を領せり、大坂住友銀行に入り新進氣鋭の店員として信用甚だ深かゝりしか更に九州炭礦漁船株式會社に入て支配人となり、社長田健治郎氏を援けて其經營の衝に當り熱實至誠以て其創業に努め健闘數年近年其功を擧ぐるに至れり是より先き君は明治三十七八年戰役中身を馬卒に伍して滿韓地方の状況を視察し、幾許もなく住友家を辭し現時の會社に従事することゝなれり、蓋し大に時勢の進運に鑑みる所ありしなるへし、君尙春秋に富む前途の努力を望むや切なり、請ふ奮起せよ、(牛込區市ヶ谷砂土原町三ノ七電話番町一八四八)

文學家 柳川春葉君

近代文藝界の大斗尾崎紅葉氏の衣鉢を受けて嶄然斯界に頭角を顯し來れる柳川春葉君其艶麗絢爛の筆を揮て時代思潮の轉化に先鞭を着けんとす。想思の緻密なる着眼の奇拔なる情緒の纏綿なる、委曲秀麗雅致幽艶なる眞に讀者をして其書中の人たるを感せしむ、俊秀の偉才たるや吾人の辯を俟たず、其著多く社會の歡迎する所となり洛陽の紙價爲めに高きの概なくんはあらず、聞く君は生粹の江戸ッ子にして明治十年を以て下谷二長町に生る、始め醫師たらんとせしも文學に多大の趣味を有し國民學會に學ひ後尾崎紅葉氏に寄寓して研鑽の功を積むこと數年、所謂紅葉氏の秘藏弟子たりしなり、孜孜勉學に力め文章の練磨に耽りて又他を顧みず、素より名利の何者たるを知らず、一意専心其習熟に力めたりしは到底凡庸の匹儔する所にあらず、紅葉没後其思想的後繼者として一般社會の推重を受け以て現今の大名を成すに至れり(平込區北町三七)

### 成功と宗教

成功の秘訣を説くもの種々の觀察に亘ると雖も歸する處は精神の修養にあり、凡そ人間の活動は皆此の精神より流露せられつゝあるは識者の既に認むる所なり、其源泉を清め其根本を養ふは其成功を大ならしむる所以に外ならず、然らば精神の修養は何に因てか是を成さん曰く宗教の力に依らざる可からず、吾人成功の軌範を擧ぐるに當り各宗教の内に就て其二三を摘記するもの豈徒爾ならんや、

### 宗教家に望む

聖賢法を説き教を垂るゝに當て異説惑世の凶徒と怪まれ暴行迫害の厄に遭遇するは古今東西其軌を一にす、而し其迫害たるや被迫害者に對する他山の石となり、益々宏壯雄大なる入格を發揮せしむるに至る、彼の親鸞聖人は北越に流竄せられて尙ほ口に法を説くを絶たず、益々以て信仰の偉大を加へたるにあらずや、彼の日蓮聖人は龍之口の御難に因て益々其偉徳の廣大なるを世に認められたるにあらずや、近世に至ても教祖の迫害を受けし適例は殆んど數ふ可からざるにあらずや、

小人の管見、世俗の平凡、偉人傑士を見て其俊才を忌み、高德を妬み是を傷け是を陥る、是れ滔々たる社會の風潮なり、是を患ひ、是を悲むもの未だ以て語るに足らざるなり、故に謂はずや、世の迫害の多きは其教理の高大無邊なるを證するものなりと。

是を信して是を疑はず、深く其の幽玄の教理を咀嚼し、其真理を叩て時弊を矯め、其意思を徹底し、窮行實踐に努め、世の喋々俗の喃々を顧みず、法の雨露をして益々世愚の頭上に霑被せしむるもの是れ眞に法の擁護者たるものなり、

古今東西聖賢哲者の跡を踏み波瀾洶湧激浪怒濤の中に立て不遇轉軻を意とせず、苦戰奮闘能く法門の偉力を塵世に加へ、吾人々類をして前途の光明に接せしむるもの果して何人そや、思ふて茲に至れば吾人大に本教に俟つ所多大ならざるを得ず、

謹て我憲法を按するに其第二十八條を以て吾人臣民に信教の自由を保障せられたるにあらずや、千百の迫害決して憂ふるに足らず、吾人は切に本教の蹶起を至囑して已まざるなり、

### 蓮門教教義及略歴

蓮門教は本尊を我大日本根源の元神即ち天之御中主大神と稱し奉り、宇宙之森羅萬象は此の大神の御創造に頼るものと信して是を純正唯一なる神道と定め而して妙法を以て御大神の御作用の現證となし、國土生民は皆悉く此の御恩徳の下に屬するものとし、一念の決定を已心に置き常に自己の心を觀し、絶對自力を以て事の妙法と唱へ、一念三千三大秘法を守り、國家觀、社會觀、人生觀を一念の基となし、十界十如是を經緯とし、身心意を以て本尊戒壇、唱念に充ちたる三大妙法を重しとし、常に餘念なく事相を受持し即身即神の最究竟頂に上り、心の安樂と心の觀喜とを以て利益とし、平常の禍福疾病等は皆其の因を捨て直に果を見るを以て本誓と爲す、故に一念の決定は能く其利益を享け一身の健全、一家の和睦は其現證にして延て社會國家に及ぼし仁義忠孝の道も自から炳然として明かなるに至らしむるの道なり、其の起源は豊前國小倉の藩士柳田素入翁の立つる處にして其の蓮門と

名けたるは日蓮聖人觀心妙法の精髓を以て法門となしたるか故なり、素入翁は寛政六年十一月十二日を以て生れ明治十年十月十二日を以て歿す、齡を受くる八十有四、其の五十年は藩の爲めに職務に従ひ番頭大監察等に歴仕したりしか退隱して専ら形以上の學問に精力を注ぎ遂に我日本の神道は唯一元神に頼らざる可からず、其用語は佛典の用語を借用すれば該博妥當なりと確信し、觀心妙法を以て之を宣説し、終に無量壽の意義を取り不死の眞理を發揚し、人の法に於ける事相に常住の心を以てすれば人と法と常同不二なりと云ふの教理を立て祈禱を以て慰藉の方便に充て又疾病なれば神水を與へ其の疾病者の精神を奮興せしめ大自觀力を誘發するを目的となす、要するに蓮門教は現世教にして現世の利益を以て主となし、未來を以て其蔭となす、故に現世の成神は未來の成神にして現世成神すれば人法一體なりと教ゆ、信徒の目的も現世の務を以て第一要義となし、各々其職業に鞠躬盡瘁し品性を養ひ操行を慎むを以て唯一の信念となすものなり、

斯の教は柳田師寂後島村光津子是を傳へ弘宣流布に努め、一時盛大の勢を示したりしも光津子の晩年柳田師の遺戒に於ける物念を以て法念を損する勿れとの要語に聊か違ふ所ありし爲め、且つ光津子滅後統卒其人無く頓挫の形勢無きにしもあらざりしか世運の振興に従ひ、眞理を研究するの風潮は抑遏す可からず、今日全國信徒大に奮起し、現職員と協力一致し將に獨立の一大教たるの面目を施さんとするに到れり依是觀是蓮門教は世間の唱ふる如く向下的の宗教に非らず、其法脈の相承、眞理の傳統は思ひの外確然たるものあり、殊に妙法の立義を擴充し、是を宇宙的になしたるは髓に向上的の進步の教にして若し統卒其人を得は神佛兩界に於ける一白眉たるを得へし、宜哉蓮門教の幹部諸氏は衆生等一切智と稱へ即ち智的の顯教なりと確言し居れり、

## 朝夕御祈念之次第

蓮前迹門、謗法退治、法華折伏、破權門理、一念三千、三大秘法、之妙法御報恩謝徳、

## 御妙判



在家の御身にては唯た餘念なく事の妙法と御唱へありて供養事たまふか肝心にて候なり、世間の物憂き時も今世の苦しみ左様悲し況して來世の苦しみをやと思召しても復た事の妙法と唱へ、最後臨終の時を御覽せよ妙覺の山に走り登り四方を屹と見ればアーラ面白や法界は皆寂光の土にして瑠璃を以て地となし、黄金の繩を以て八道を界せり、天より四種の花降り虚空に音樂聞へ諸神諸菩薩は常樂我淨の風にそよめき遊戯し樂み給ふそや、我等も其數に列らなりて遊戯し娛むことのはや近つきぬ、信心弱くしては斯かる愛てたき處に到るへからずく

### 板垣伯の祝辭

蓮門教會の機關雜誌『自觀』は突如として本年六月二十日を以て産聲を揚ぐ、同教の梗概は是に依て炳然たるものあり、板垣伯其の發刊を祝して曰く、  
今回余か多年の政友である吉田正春君か蓮門教の發展に資せんか爲め

雜誌自觀を發刊せらると云ふことであるか、余は蓮門教の教理等に就ては未だ深く研究を遂げて居らぬけれども、兎に角く全國に亘りて十萬の信徒を有する點より察するも同教か偉大なる宗教的眞理を含有して居ると云ふことは疑ふ可からざることである、然るに從來は動もすれば淫祠邪教のよふに社會より目されて居つたのは畢竟其の偉大なる宗教的眞理を發揮し得る底の人物を得なかつたか爲めてはあるまいかと思ふ、孔子は「道之を弘むるにあらず、人唯道を弘む」と云ひ、弘法は「法は人によりて現はれ人は法によつて昇る」と云ひ、日蓮聖人は人法一體を唱導せられたるか如く、宗教道德の興亡盛衰は要するに其教法を信して之を布教するところの人物其身に存して居ると云ふも敢て過言てはあるまいと思ふ、  
そこで此の度該博なる學識と熱烈なる宗教的信念を有せらるる吉田君か大に感奮興起するところあつて、蓮門教の爲めに盡瘁せらるるならば同教の發展は必ずや顯著なるものであろふと思ふ、是は唯に同教の爲めのみならず、即ち世道人心を振攝維持する點に於ても多大なる貢

献を爲すへきを信して茲に聊か祝意を表して健全なる發展を希望する  
 次第である。(完)

蓮門教中樞の人物

- 蓮門教會總本院長 中教正 竹嶋末子
- 同總本院總務部長 中教正正六位 吉田正春
- 同總本院庶務部長 權中教正 金山千勝
- 同總本院會計部長 權中教正 渡邊壯六
- 下谷區二長町分教會長 淺草區南元町分教會長 兼任 中山千代
- 下谷區入谷町總本院出張所長 兼任 兼任 金山千勝
- 牛込區袋町分教會長 權少講義 小林ナカ子
- 小石川區西古川町出張所長 權少講義 井野シゲ子
- 蓮門教第一教院長 權少講義 石川ミヨ子
- 深川區富岡門前町分教會長 山鹿乃婦

- 日本橋分教會長 權少講義 大澤春雄
- 本所區綠町分教會長 兼任 渡邊壯六
- 青森市鹽町分教會長 八王寺大横町分教會長 宮臺四郎兵衛
- 横濱本町分教會長 權大講義 江上ツオ
- 北海道夕張分教會長 北海市紺屋町分教會長 權中教正 水谷政次郎
- 長崎市紺屋町分教會長 權中教正 村田かね
- 鹿兒島市山下町分教會長 大講義 米田勝助
- 函館區春日町分教會長 中教正 田代庄九郎
- 同所布教擔當者 權訓導 坂本初太郎
- 同所信徒總代録事 少修教 植田元治郎
- 札幌分教會長 中教正 田代庄九郎
- 小樽分教會長 大講義 田代つま
- 品川分教會長 金山千勝

蓬門教維持財團法人理事

神田區美土代町四ノ五  
小石川區原町十三  
深川區木場町八  
神田區佐柄木町一三  
本所區表町五五  
淺草區永住町五二  
下谷區二長町五二  
日本橋區大傳馬鹽町一四  
橫濱市末吉町二丁目  
府下八王寺町大横町六三

同評議員

竹島 八  
石井 理一  
小松 正一  
矢島 鎌次郎  
日野 要藏  
高浦 林藏  
湯山 政治  
吉澤 政藏  
田邊 佐吉  
藤田 勝五郎  
岡野 茂三郎  
小林 惣三郎  
加藤 政藏

日本橋區本石町二ノ六  
日本橋區本石町二ノ一一  
日本橋區田所町八  
神田區江川町六  
神田區柳原川岸一一號地  
本所區石原町八三  
本所區綠町一ノ八  
本所區柳島梅森町五二  
淺草區南元町五一  
日本橋區濱町二ノ三  
牛込區新小川町二ノ四  
牛込區市谷仲ノ町三八  
麴町區富士見町  
品川町大字南品川宿二三七  
同町大字同一ノ一二

下田 富八  
村松 豐太郎  
福原 録之助  
鈴木 咲太郎  
遠山 芳兵衛  
福田 猪之助  
藤原 邦達  
吉野 繁次郎  
島田 太重  
松原 吉松  
冲安 太郎  
大橋 庄太郎  
長島 彌太郎  
島田 鶴次  
若松 清右衛門

牛込區白銀町二〇  
 小石川區西古川町四  
 横濱市長者町二ノ二五  
 同 市太田町四ノ六二  
 府下大久保町大久保百人町三五〇  
 八王子町大横町八

以上列記の諸氏は蓮門教會の樞機に參與し、蓮門の光輝をして四表に赫灼たらしめ、吾人々類をして其德澤に浴せしめんとす、其志や偉大なりと謂ふ可し、

一四四

塚本平十郎  
 石川卯之助  
 伊藤悦太郎  
 小林清兵衛  
 梅屋庄吉  
 平紋次郎

金光教

同教か世に流露せられたるは安政二年の頃にして今を去ること六十年日尙淺しと雖も滔々天下に流布せられて日に殷盛を見るに至れり、明治十八年六月二日宗教の嫡流直信の徒相謀り金光教會を組織し神道本局に屬して布教に努め、三十三年六月獨立して現今の金光教を成すに

至る、同教は神道十三教中最近の獨立に係り其組織たるや人情の自然に基き信徒より些末の義捐をも求めず其經營大に困難を極むと雖も同教の教師信徒は相一致協力して其布教興學に力むるを以て大に發展を見るに至れり、教祖金光大神一代の御履歴は同教の經典として尊重すへき特種の關係あるを以て最も其事實の考覈を要し數年來其逸事の蒐集に力めつゝあるを以て其發表を見るや蓋し遠からざる可し故に吾人は單に其概傳を述ふるに止めんとす、金光教祖は矢戸安齋守の後裔香取重平の次男幼名源七通稱文治郎、文化十一年備中國淺口郡占見村に生る文政八年十二歳にして同郡大谷川手彖治郎の養子となり天保十二年御年二十八歳にして信仰に歸依し屢々迫害暴行に遭遇して更に屈撓せず明治九年始めて岡山縣令より公然大道の宣傳を允許され道を説くこと三十有餘年八十二ヶ條の神訓を傳へ明治十六年十月十日澁焉易養し給ひたり、

金光教教義要旨

金光教は教祖金光大神か神傳によりて開創せられたる教義を奉し宇宙の本體にして萬衆の大祖たる天地金乃神を信仰するものなり神は晝夜も遠きも近きも隔てなく純愛を以て周く萬物を化育し給ふこと恰も慈母の赤子に於けるか如しされは「我子の可愛さを知りて神の氏子を守りくたさる事を悟り只管感恩の誠意を以て仕へ奉るべきものなりこれ即ち眞の信心にして直くに靈驗の始めなれば禁厭祈禱に頼らす只「今月今日」一心に頼め」と教祖は教へられたり、

本來我身は神徳の中に生かされてあるものなれば干支五行の生剋吉凶等の妄説に迷はさるる事なく「第一に心の疑の雲を拂ひて天と地とは我住家と思ひ生死共に神に任せ縋りて安心自在の生を享樂すべきなり」、神に由らすして我ものとはなきことなれば「我情我慾を離れて眞の道を悟り」本心の玉を研きて人性本來の徳を發揮し至誠一念以て神意に隨ひ奉ること人道の本義なれ、

我皇室は大和民族の宗家にして祖先代代我等に至るまで蒙り來れる鴻恩限りなく又父母生育の大恩は言語に盡し難し是を以て忠と孝とを道

徳の中心となし「神國の人に生れて神と皇上との大恩を知らぬ事」と「幼少の時を忘れて親に不孝の事」を戒め「信心してまめて家業を務むるはこれ君と國とに盡し奉る所以の道なり」、

人間幸福の基礎は家庭の圓滿和樂にあれば「第二家内に不和のなきことを元とすへし結婚は家庭の起る所なれば縁談に相性を改め見合より心の心を見合よ」子孫は家門繁榮の基なれば「懐妊の時腹帯をするより心に眞の帯をせよ」かくて一家の興隆を圖り子孫の教養に力を盡すへし、

人道の根源は彼此同格の心情より發すされは「天か下に他人といふ事は無きものぞ」又人の身か大事か我か身か大事か人も我も皆人と思ひて博愛慈善の旨を行ふべきものなり、

かくて神を信し皇上に仕へ人たる道を全ふせんことは偏に我身心の研修にあり而してこれか工夫は「表行より」は心行を旨とすへし心行とは専ら神の御心を心として苟にも疑の念を懐かず行住坐臥眞に難有し「一念を以て何事にも眞心を盡し力を致すにありされは即て人徳を得神徳を受け得て神人一致の妙趣に體達すへし」と教へらるこれ金光教の要

言なり、

一四八

教祖金光大神身を吠國の間に起し信神の一念を以て神体を得終始一貫の心行によりて天地の眞理を自證し何人もこの芳聞を辿らば能く神人一致の妙果を證得すべきことを示し給へり、

## 大 社 教

本教は天日隅宮に鎮座する大國主神の經國治幽の神意を奉戴遵守し惟神の大道を明かにし斯民の天性を全ふせしめ上は國家に報ひ下は其分を盡さしむるを主要とし、天御中主神高產靈神皇產靈神天照大御神產土神を併せ六神を奉齋するものなり、  
大教正千家尊福氏大道要義を説く其主眼に曰く天地萬物の元始を明かにして造化大神の神徳を辨ふべき事、修理固成の神勅を奉戴して人たる務を怠るへからざる事、博愛の神意を遵守して同胞の信義を全くすへべき事、天地分掌の神誨を確信して報謝する所を知るべき事、幽顯分任の神勅に因て遊奉する所を定むべき事、經國の功德を謝し治幽の恩

頼を仰きて生死依頼すべき事、幸魂奇魂の神助を仰きて自己の功業を勉むべき事、國避の神意を辨へて貪婪の忘念を去るべき事、天壤無窮の神勅を奉戴して國體の尊嚴を辨ふべき事、靈魂は神賦にして祖孫命脈を貫くを信すべき事、靈魂の歸着を明にして神寵榮福の地を求むべき事、善惡の執念は幽冥に貫くを思ひて心行を正直にすべき事、祓禊式を定め給へる神意を奉して汚濁の所業をなすへからざる事、萬物の増進を見て神恩の無窮なるを感すべき事、醫藥禁厭を創め給へる神慮を奉體して衛生の務を全ふすべき事、報本反始の務を全くして自己の分を誤らざるべき事、產土神を崇敬して氏子たるの禮を盡すべき事、夫婦の道を正しくして人倫の大本を亂るへからざる事、政令を遵守して保護の恩を忘る可からざる事、祖先の恩澤を失はすして子孫の永久を保つべき事、教育を嚴にして文化の進歩を求むべき事、交遊扶助の情義を辨へて親愛の誠を欠くへからざる事、是れ最も其綱領を擧げたるもの幽治の祖神たる大國主神の神意を一般社會に普及するを以て目的となすにあり、

一四九

## 貴族院議員公爵

毛利 元 昭君

當家は其先天穗日命より出づ命二十七世の孫を參議左大辨大江音人となす、音人二十六世の孫陸奥守元就藝州郡山より物興し四隣を平定して山陰山陽十餘州を領す、夫より三代輝元に至り天下は秀吉の權に屬せり輝元參議中納言に擧げられ朝鮮征伐に參加して威名を轟かす、其子秀就より十一傳して敬親に至る、敬親夙に尊王の大義を唱へ其子元徳と共に國事に軼掌し遂に克く中興の鴻業を翼賛す、其薨するや皇上震悼諱を賜ふて曰く、首唱勤王回皇運于既衰贊大政于更始維忠維義洵是國家柱石厥功厥績實爲藩翰儀型と因て從一位を贈らる、明治三十四年皇上又舊勳を追懷し更に正一位を贈らる、元徳初め從四位下侍從に任じ松平長門守と稱し後少將に任ず、明治元年議定に任じ從三位に進み廢藩置縣に際し山口縣知事となり同十七年華族令の發布せらるゝや特旨を以て公爵に列し從一位勳一等に叙せらる、君は即ち其長子にして慶應元年二月を以て生る、幼名を與丸と稱せり、明治十三年十二月

現名に改む、三十年一月家督を相續し從三位に叙せられ貴族院議員に勅撰せらる、明治三十四年正三位に叙し四十年勳四等旭日小綬章を授けらる、四十一年從二位に叙せられ四十四年一月躰香間祗候を拜命せり、當家の善行美談に至ては一々列擧するに遑あらず其祖先以來の勳功を説かば尤大なる書冊も以て盡す可きにあらず、元龜天正の戦亂時代より常に勤王の大義を守り屢々皇室に多大の貢獻を重ね常に王室興復に志あり終始一貫の誠忠は遂に明治維新の大業を補翼し奉るに至る其偉勳は有史以來未だ見ざる所なり、濟々たる一藩の多士顯要の地位を占め皇室の殊遇を拜す、君家の名譽永久に赫々たるを知る可し、吾人は帝國貴族社會の模範國民の儀表たるを願し瞻仰以て已まんのみ、  
芝區高輪南町二七 電話芝九五七、一二二九、一二三〇

## 貴族院副議長

正三位侯爵 黒田 長 成君

當家は宇多天皇皇子式部卿敦實親王の子左大臣源雅信の後裔所謂宇多源氏の頭領にして黒田官兵衛孝高の後裔也累世福岡の城地五十二萬餘

石を領せり、明治維新の際は勤王の忠誠を盡し賞典祿一萬石を賜はる名士平野國臣は其藩士なりと傳ふ、長成侯は慶應三年五月五日筑前福岡城に於て生る、幼名桃次郎幸千代と稱せり、明治五年童子塾に通學し後明治十年十月學習院に入校す、同十一年慶應義塾幼稚舎に入塾、同年家督相續、同十二年從五位に叙せらる、同十三年十一月大學豫備門に入り十七年七月卒業同月被授侯爵秋英國留學二十一年十一月劍橋大學卒業、バチエラー、オフ、アーツの學位を領し歐米各國を巡視して歸朝せり、二十二年式部官に任せられ二十三年依願本官を免せらる、同年六月正五位に叙す、二十四年劍橋大學より「マスター・オブ・アーツ」學位を受く、二十五年貴族院議員に列せり、同年七月被任福岡縣立尋常中學修猷館長二十六年六月從四位に叙す、同年八月臨時製鐵事業調査委員會委員被仰付二十七年十月被任貴族院副議長二十九年三月依二十七八年事件之功被授勳四等旭日小綬章、同年六月正四位に叙す、三十一年豊國會々長として豊太閤の墳墓を修理し三百年祭を舉行す、三十二年四月華族令に因り評議員被仰付爾後議院建築調査會副會長被仰付、同年

六月英國劍橋大學學士會に入る、同年七月東邦協會副會頭に推薦せられ、同年十月支那調査委員長に推薦せらる、菅公會々長として一千年祭を舉行す、三十四年華族會館評議員に當選三十七年軍資の一端を補助爲め交戦中貴族院副議長の歳役を辭す同年聯合艦隊慰問三十八年東邦協會々頭に推薦せられ、三十九年韓國皇帝陛下より勳一等大極章を受領す四十年七月華族懲戒委員當選、同年九月三十七八年事件之功に依り被授勳二等旭日重光章、四十一年被叙正三位同年十二月厨香間祇候被仰付四十三年八月宗秩寮審議官被仰付其他數種の會に名譽總裁會頭又は評議員普通會員として關係する所多し或は戰事救恤慰問水火災救助及教育費義捐に對し金銀木盃の賞與枚擧に遑あらず、就中日清日露の兩戰役に際しては巨額の金圓を義捐して舊領筑前の出征軍人遺族を救恤し、戰後自ら戦死者の吊魂祭を執行せられたり、又侯の育英に熱心なる外に於ては舊藩士を海外に留學せしめ内に在ては尋常中學修猷館に多額の資金を投じ舊藩中功勞ある家筋の子孫又は同館卒業生の俊秀なる子弟に貸費の制を設け各其學業を遂げしむる等以て其一斑を



知る可し、茲を以て現今各方面に活動する藩士頗る多数に上れりと傳ふ、寔に華胄上流社會の龜鑑たるを失はざる也（赤坂區福吉町一 電話新橋一三一九）

侯爵 細川 護成君

當家は清和天皇の皇孫鎮守府將軍源經基八世の孫陸奥守足利義康の曾孫細川次郎義季の後なり、義季より三代を経て頼之に至る頼之の弟頼有分れて一家を起す是を侯爵家の祖とす、頼有より七代を経て兵部大輔藤季に至る、永祿八年將軍義輝弒に遇ふ、其弟覺慶を奉じて近江に奔り名を義昭と改稱せしむ、織田信長に説きて義昭を奉じて京師の恢復を謀らしめて功を奏せり、後信長に従ひて戦功あり丹後を領せり、同十年秀吉の兵を中國に出すや應援の爲め因伯の國境に進めり、偶々本能寺の變を聞て京師に歸還し即日剃髮して幽齋と號せり、後秀吉の麾下に屬し中國九州の役に従ひ殊功あり、彼の朝鮮征討の際に雞林八道に雄名を鳴らし、秀吉薨去の後は徳川家康に黨せり、關ヶ原の役前

に領國丹後城に籠り亂平ぐに及んで豊前三十七萬石に封せらる、寛永九年改めて肥後一圓及豊後國鶴崎の地を領し五十四萬石を賜はる、其子忠興より十代を経て従三位護久侯に至る、幼名を義之助又は澄之助と稱せり、頗る經世の才略あり、明治元年議定となり、翌二年參與に任じ、同四年海軍少將に任せられ同月陸軍少將に轉任せられ同十七年七月侯爵を授けらる聰明穎習にして勤王の志厚く同家中興の英主を以て謳はる、君は其長子なり、父侯爵の衣鉢を受けて穎敏活達の稱あり、明治十五年十二月従五位に、同二十四年十二月正五位に、同二十七年十二月従四位に叙せらる、同三十年六月二十七八年戦役の際私財を獻じ軍費を資け報國の誠を表す洵に奇特とす依て勳四等瑞寶章を賜ふ、同三十年十二月正四位に叙せらる、是より先明治十八年英國に留學し後佛國「エコール・ポルニク」に轉じ碩學大家に親炙して研修の功を積み學蹟優良を以て鳴る、其業を卒はるや滿腔の抱負を以て歸朝せり、同二十六年九月家督を相續せられて貴族院議員に任せらる、同三十五年十二月従三位に叙せられ、同三十九年四月三十七八年事件の功に依り旭

日小綬章を賜はり、同四十二年十二月正三位に進み皇室の信認殊に優渥なりと傳ふ、同家は祖先以來誠忠を以て一貫し文武の勳功最も偉大なり、君は固より其嫡流にして尊王の志深く鞠躬以て皇謨翼贊の功を擧げ下國民の福祉を増進す、殊に仁慈博愛にして公共事業の爲めに盡瘁せられ育英事業の爲めに苦衷せらる、東亞同文書院の如きも君の院長たるに因て面目を一新し有爲の俊才を輩出せられつゝあり、日清日露の兩大役に當ては卒先して出征軍人遺族扶助の爲めに多大の資を投せらる、天下皆其仁徳に感佩せざるはなし、今や上院の權威者として侃諤の説を唱へ天下の輿望を一身に擔ひつゝあり、眞に上流社會の模範的人材たるの名に背かざる精神なりと謂ふ可し、(小石川區高田老松町七六 電話番号町四五〇)

伯爵 松浦 厚君

華胄界に於ける新進の英才として將來の大成を囑望せられつゝある伯爵松浦厚君の経歴を按ずるに抑も君家は嵯峨天皇第十八の皇子正一位

左大臣源融の後裔に屬せり、八世の孫太夫判官久肥前松浦郡宇野御府檢校となり、延久元年西に下り松浦郡に居る因て以て氏と爲す、松浦彼杵二郡及び壹岐を領し肥前今福の梶谷に住す因て梶の葉を以て徽章と爲す六世を経て八郎定に至る、驍勇絶倫世人呼んで鬼八郎と云ふ、後醍醐帝の勅を奉じて北條氏を討ち、勳功によりて肥前守に任せらる、建武二年足利尊氏叛するに及び、後醍醐天皇皇子尊良親王を以て東國を管せしむ、鬼八郎新田脇屋等と俱に親王を奉じ各所に轉戦して屢々殊功を樹つ帝御する所の錦袴を解き寸断して將士に賜ふ、公も亦之に與る、帝吉野の行宮に崩御せるに衆情沮喪せり、吉水院僧宗信遺詔を傳へ、天下忠義の士を擧て曰く筑紫に松浦鬼八郎ありと、是に於て名聲益々顯る、既にして南朝勢微に力屈すと雖も、終身其の正朔を奉じて改めず、薨後祠を建て是を祀る崇めて若宮明神と稱す、爾來十世の後鎮信に至る、鎮信法眼に叙せられ後式部卿法印に進む天正六年八月正親町帝繪旨を賜ひ、修法の事を掌らしめらる、十五年豊太閤島津氏を征するに従ひ薩摩に赴き太閤に太平寺に謁す、親昵衆に超ふ人皆以て

榮と爲す時に肥前平戸の城主として六萬千七百石を領す、後文祿征韓の役に當り、宗義智等と小西行長に従て出征し朝鮮に在ること七年前後凡二十四戰未だ嘗て一度も敗衄せず、諸將相語て曰く義智の勇鎮信の智徹りせば、行長豈名譽を博するを得んやと、二十九世天祥は學文武を兼ね宋の文天祥の人と爲りを慕ひ、其室に扁して天祥庵と曰ふ、嘗て山鹿素行に従て韜鈴の術を修めて其蘊奥を極め、又片桐宗關に就て點茶の儀を學び深く悟る所あり、新に一機軸を出す、世是を鎮信派といふ、七傳して靜山に至る、公亦學文武を兼ね夙に勤王の志を抱き京師の皆川淇園に師事して其の經義を講ずるを聴き、京師に入れば必ず天機を奉伺せらる、常に景山樂翁の諸公及進齋一齋善庵の諸儒に師とし事へ著書數種あり就中甲子夜話の如きは二百七十有餘卷あり、公の後二世を経て詮公に至る、亦少壯文武を兼修し精通せざるなし、傍ら風流韻事を嗜み、和歌點茶、俱に蘊奥を極む、維新の前後、王事に奔走して貢獻せし所尠からず、殊勳により賞典祿三千石を賜はる、明治十一年六月縣香間祇候を命せられ十二月御歌會贊者を命せらる、明

年一月御歌會始奉行を勤む十月明宮祇候を命せらる、十七年七月伯爵を授けられ、二十一年十月宮内省御用掛常宮御養育主任を命せらる、二十三年七月選ばれて貴族院議員となり、三十二年六月從二位に進み三十六年四月勳三等に叙せらる、翌年七月再び選ばれて貴族院議員となる四十年九月三十七八年戰役の功を以て旭日中綬章を賜ふ四十一年四月十一日病革るや正二位勳二等に叙し瑞寶章を賜ふ此日遂に薨去せり、當主厚君は先代詮氏の長男にして元治元年六月を以て生る、君亦學を好み文を能くす、曾て英國劍橋大學に遊び政法の學を究む、餘事詩を善くし又和漢の學に精通せり、資性謹厚にして敏活常に同族間の推重する所となり改革派の領袖として聲望頓に揚れり、明治四十四年七月貴族院議員改撰期に當り最大多數の得點に因て當撰せらる、今期の改撰に於て改革派の全勝を占めたるは以て將來の大勢を卜するに足らん、同派の活動將に刮目に値ひす、吾人は天下國家の爲め期待する所大ならざるを得ず、伯の双肩に擔ふ所亦重しと謂はざる可けんや、  
(淺草區向柳原町二ノ一 電話下谷八八九 別邸豐島郡巢鴨一五三五)

貴族院議員 子 爵 黒田 和志君

謹んで當家の系統を按ずるに宣化天皇の曾孫多治比古王の子、左大臣島の後裔丹治峯房の後也基房、經家、助季、行季、季光、季頼、規季、季憲、實季、季國、氏季、季仲、家勝、家範、照守、直定、直守、直張を経て豊前守直邦に至り始めて姓を黒田と稱す、徳川氏に仕へて寛保二年上總國久留里三萬石に封せらる、直純、直享、直弘、直英、直温直方、直候、直静を経て直質に至る、君其後を繼ぐ實は宗義和の第六子なり、明治十四年五月從五位に同二十年十二月正五位に同二十五年七月從四位に、同三十年七月正四位に敍せられ現今從三位の榮位にあり君は嘉永四年八月十三日を以て生る、明治十四年四月家督を相續し同十七年七月子爵を授けらる、同三十九年四月勳四等に敍し旭日小綬章を授けらる、資性皓潔にして活達同族間稀に見るの徳聲家なり往年推されて貴族院議員となり上院の一角に雄名を鳴らし最も清硬の稱あり

四十四年七月改撰期に際し尙友會の推撰に因て再撰の榮を擔へり、將來の發展は龜卜を待たずしてそれ炳乎たるものあらん乎、(四谷區傳馬町新一ノ二〇 電話番号町三〇三五)

貴族院議員 子 爵 丹羽 長徳君

貴族社會中名聲噴々たる君の閱歷を按ずるに其祖先は桓武天皇十七の皇子大納言大將良峯安世の後胤にして丹羽修理亮長政の男越前守長秀の後なり、長秀幼名萬千代後に五郎左衛門と稱す天文十九年十六歳にして織田信長に近侍し寵遇日に厚く領地屢加増あり、信長姪女を以て是に娶はす後幾多の戦場に驍名を轟かし武功赫々たり、太閤秀吉未だ木下藤吉郎と稱せし頃丹羽長秀柴田勝家の武徳を慕ひ、信長に請ふて丹羽柴田の姓一字づゝを取りて羽柴筑前守と名乗られたるも寔に故ある事なり、元龜二年近江國佐和山の城主となり領地合せて十八萬石餘を領す、天正十年信長明智光秀の弑逆に逢ふや羽柴秀吉と共に光秀を誅す、信長の死後織田家相續の事につき秀吉勝家と隙を生ずるや、秀

吉を助けて勝家を滅ぼし大に武勳を奏す。依て越前若狹兩國及び加州半國江州の二郡合せて百二十三萬石を領し北陸探題に補せられ越前北の莊に居城す。同十三年同所に於て薨去せり。其嫡子長重幼名鍋丸後五郎左衛門と稱す。織田右府の女を以て配せられ、天正十三年家を継ぎ同十四年秀吉佐々成政を征討の際長重が士卒に軍令を犯すものあり爲に領地を除かれ若狹一州を領す。同十五年筑紫陣の時長重が士卒再び軍令に背くを以て又封を削られ加州松任の城主四萬三千石となる。文祿四年加州小松八萬餘石を加へられ從三位參議に任じ小松城に移る。封祿合せて十二萬五千四百五十石餘なり。慶長五年關ヶ原の役後長重前田利家と争ひたるの故を以て復た封を奪はる。同八年常州古渡の庄一萬石を賜はり官位舊に復し元和五年二萬石に加増し、同八年奥州棚倉の城主五萬石と爲る。寛永四年更に奥州白河に移り十萬七百石となり寛永二十年同國二本松に轉じ十五世長國氏に至る。君實は侯爵伊達宗徳氏の六男にして明治六年八月四日を以て生る。同三十五年先代長國氏の養子となり、同三十五年從五位に敍せられ同三十七年家督を相

續し襲爵被仰付、同十年正五位に敍せらる。明治四十四年七月貴族院議員改選期に當り尙友會の推す所となり以て當撰の榮を擔へり。資性温厚にして篤實恭謙身を持し鞠躬王事に勤む。寔に華胄社界の高徳家にして社會の推敬一方ならず。今や或る方面に於て一大活躍を企畫せられつゝありと聞く至誠君の如くにして始めて成功の效果に接することを得ん。吾人は切に奮起以て國家の福祉を増進せんことを至囑して止まざる也。(麻布區六本木町一 電話芝一八九八)

樞密顧問官 海軍中將子爵 中牟田 倉之助君

抑も當家は攝政關白藤原鎌足公の末裔、六郎兵衛の後なり。六郎兵衛龍造寺隆信に従て屢々軍功あり。天正十二年島津久光と島原に戦ひ遂に隆信と共に戦死す。其子三右衛門家を繼ぎ、文祿元年朝鮮征討に従事して戦功あり後ち數代を経て武貞に至る武貞學識衆に優れ藩黨指南役に擧げられ大に後進扶掖に盡瘁せり。君其後を繼ぐ實は佐賀藩士金丸武七氏の次男にして、天保八年二月二十四日を以て生る。出で、中

牟田家を相續す藩公の選拔を受け安政年間蘭學の研究仰付られ、次で三年長崎に出で、海軍の操縦を研修し、大に造詣する所あり、文久元年清國に渡り各地を踏査して歸朝す、明治元年關東御親征の擧あるや君海軍の先鋒となり東北各地に轉戦して偉功を奏す、翌二年函館五稜廓の亂起るや再び艦隊を指揮して平定の功を奏し、累進して海軍中佐に任じ、同四年八月海軍大佐に進み同年十二月榮進して更に海軍少將となり十年西南の役起るや故海軍大輔川村純義氏を扶けて、軍功渺なからず、平定後勳二等に敘し、翌十一年一月海軍中將に任じ、同十七年七月特旨を以て子爵を授けらる、此前後職を海軍大學校々長、海軍參謀長、海軍機關學校長、國防會議々員、横須賀鎮守府司令長官、吳鎮守府司令長官、海軍々令部長、兼將官會議々員、海軍勳功調査委員を経て現今に至る、今や從二位勳一等樞密顧問官海軍中將子爵の榮位にあり、

君は幼より聰明穎智にして沈毅宏量を以て名あり、夙に尊王之志厚く錦旗を擁護して維新の大業を補翼す、爾來忠誠一貫一日の荒怠を見ず老熟圓滿の好將軍として聲望隆々たるものあり、眞に後進の龜鑑たるを失はざる也、(赤阪區青山南町六ノ六七 電話芝二六四五)

宮内省式部官  
從三位子爵 稻葉正繩君

資性謹厚にして恭謙の徳を備へ、夙に和漢の學に精通して出藍の賞譽あり、早くも職を宮内省に奉じ、忠烈義膽を以て推重を受く祖先盡忠の美風を傳へて君に至る、敢て顯榮利達を希はずと雖も天寶の幸福沛然として到る是皆積徳の陽報たらすんばあらず眞に美望に堪へざる也君は孝靈天皇の皇子彦狹島命の後裔對馬守通有公の後なり數代の孫稻葉内匠頭政成に至り筑前中納言秀秋に仕ふ之より先き齋藤利三の女を娶り丹波守正勝を生む、母齋藤氏後ち三代將軍家光の乳母となる之を春日局と稱せり、年甫めて八歳實母の縁に因り將軍の君側に召され城主に昇り後ち山城淀城十一萬石に封せらる、君は正四位正邦君の養子にして實は正二位伯爵松浦詮君の男なり慶應三年七月二日を以て生れ明治十二年十二月先代正邦君の養子となり同十三年九月從五位に敘し

同二十二年五月英國に留學し同二十五年十二月歸朝し同三十一年七月襲爵仰付られ宮内省に出仕し、同二十八年一月東宮侍從に任じ、同三十二年七月式部官に轉任し、主事を命せられ高等官三等に昇り位階亦從三位に陞彼せられ子爵の榮を擔ふ筈に當代貴公子中の俊傑なりと云ふ可し、(豊多摩郡澁谷町元青山北町七ノ一 電話芝四一五)

子爵 長岡護孝君

聞く當家は清和天皇の皇孫鎮守府將軍源經基八世の孫、陸奥守足利義康の曾孫、細川次郎義季十世の孫兵部大夫藤孝の後裔にして藤孝より忠興、忠利、光尙、宜紀、宗孝、重賢、治年、齊茲、齊樹を経て從四位下越中守齊護に至る其五男護美分家して性を長岡と稱す、君は其後を襲ふ、君實は子爵細川利文の二男にして明治二十九年八月二十二日を以て生る、幼名を利功と稱し温厚篤實頗る清高の君子たる風ありて上を敬し下を憫み徳望同族間に高し、明治三十九年先代護美侯の後を繼ぎ家督を相續し名を護孝と改む、蓋し先代の一字と藤孝公の一字と

を以てし其徳に則らんとせられたるならん歟、其年直ちに襲爵仰付らる、夙に學習院に入り中學二年を修業せられ目下陸軍幼年學校に入りて勉學中に屬し品行方正を以て稱せらる君の陸軍幼年學校に入るや抑も理由あり、君の義兄細川護全君は日露戦役に際し陸軍騎兵少尉として出征し各所に轉戦して功あり、殊に遼陽の激戦に當て部下を督勵して突撃を試むること數回實に古英勇の面影を偲ぶものあり、敵弾心なく飛び來て少壯少尉の命を奪ふ當時少尉の功勞は其大なる影響を敵の全線に及ぼすものあり、長官は感狀を附して其功績を賞す、而も少尉の英魂は忠義の鬼と化して天國に逝けり、君は義兄の志操を繼ぎ陸軍に従事して忠君報公の義務を全ふし、皇室の藩屏たる殊遇に報じ奉らんと意思に依るものなりと傳ふ、

其志操の堅實なる誠忠義烈の注溢せる誰か亦感佩せざるものあらんや  
(日本橋區濱町二ノ一二 電話浪花一一〇七)

法學博士 村瀬春雄君

學識經驗共に群を抜き、徳望偉大にして夙に噴々たる名聲を内外に轟かし、奇智明敏以て事務の擴張を計れり、曾ては有望なる官海を一擲に附して顧みず驟然立て實業界に入る前途亦矚目する所なからんや、果せる哉君の敏腕大に効果を改めて帝國海上運送火災保險會社をして現今の隆盛を致さしむ寔に實業界裡稀有の俊才と謂ふ可し、抑も君は舊福井藩士、故關戸由義氏の二男にして明治四年三月二十九日を以て生る、夙に普通學を修め十六年兵庫縣立商業學校に入り、螢雪四年を経て十九年最優の成績を以て卒業せり、是より先明治十六年東京府の人村瀨定子の死續を相續して其姓を冒し後兵庫縣に轉籍せらる、明治二十年東京高等商業學校に入り同二十二年保險學研究のため白耳義國に遊學し同廿五年同國「アントワープ」高等商業學校を卒業し尋で獨國「ライプツヒ」大學に入りて研鑽の功を積み同二十六年歸朝せり直に職を東京高等商業學校教授に奉せしも同二十八年辭任せり次で帝國海上運送火災保險株式會社の招聘する所となり入つて同會社の副支配人となり後支配人に推さる同三十六年衆望の歸する所終に常務取締役に推撰せ

らるゝに至れり、君は謹嚴方正を以て身を處し未だ曾て世俗の汚流に染まず、超然一見地を存せりと傳ふ、尙一面商業學校講師及び商船學校講師を囑托せられ後進扶掖に盡瘁しつゝあり明治四十年博士會の推撰する所となり法學博士の學位を授けられ名聲大に發揚せらるゝに至れり、(本郷區春木町三ノ二四 電話下谷七一一三)

東京女子師範  
學校 校長 中川謙二郎君

學殖豊富にして經驗亦淺からず五十年來の生涯を通して一意教育事業に盡瘁し、比較的困難の評ある女子育英事業に従事して偉功を奏せり、教育界の古老白眉として社會の推敬を受くるもの亦故なきにあらず、資性温厚にして恭謙良妻賢母の薰育に勉めて聊か瑕疵あるを認めず、寔に教育界の泰斗たるに耻ぢざるもの也、

君は丹波國桑田郡馬路村の人にして嘉永三年九月二十一日を以て生る、維新の際は西園寺公に従て山陰道の鎮撫に力め北陸道及東北の征討に功を奏せり、維新の後東京開成所及共學舎に學び更に東京開成學校に



入つて製作學製煉學を修む、明治九年七月新潟學校百工化學の教員となり、次て同縣鑛山の調査を命せられ在留三年、更に東京女子師範學校教諭となり、同十六年六月文部省普通學務局に入り爾後文部省御用係、東京女子師範學校教諭、高等師範學校教諭、女子師範學校教諭兼幹事等を歴仕し二十五年「エロンパス」世界萬國博覽會出品審査委員となり、二十七年文部大臣官房書記課兼勤を命せられ、三十一年東京工業學校教諭兼高等師範學校教授となり、尙工業教員養成所主任、徒弟學校主事、師範學校幹事、教育博物館主事、文部省中等教員檢定委員等の職に就けり、次で文部省視學官兼東京工業學校教諭、高等會議員となり、三十九年仙臺高等工業學校々長に轉じ、四十三年三月高等女子師範學校長に補せられ以て現今に及べり、斯の如く教育事業の爲めに献身的盡瘁の勞を執らる、斯界に多大の貢獻せられたるもの誰か崇敬の意を表せざるものあらんや、(本郷區駒込西片町一、八ノ一七號 電話 下谷二八四六)

### 實業家 田村利七君

帝國紡績界の偉傑として夙に名聲噴々たる田村利七君は發瀾たる敏腕を以て早くも紡績事業の國家的有利の經營たるべきを認め率先して其創設に盡瘁し往年東京紡績株式會社成るに及んで其社長に推され爾來の健闘能く功を奏して現時の如き尨大なる一大會社の基礎を確立せるに至る其功勳や亦偉大なりと云ふ可し、

概傳に因れば君は宮島義右衛門氏の令男にして嘉永元年三月を以て深川の私邸に生る、君家は累世酒店を以て名あり後故ありて田村家の養嗣子となり其姓を冠せり、始め金座附兩替店に於て商務の見習を爲し更に三井御用所に轉じ、横濱支店の整理に當て功を擧げらる明治九年三井銀行と改稱するや横濱支店長となり幾多の經營に當て着々効果を收め名聲大に發揚せり、當時君は世界萬國の形勢を遠觀し紡績事業の急務なるを感じ大藏卿に向て建策する所あり、偶々松方伯歐米實業界の視察を遂げて歸朝するあり、政府當局の意見も亦合致して嶄新の機

械を輸入し是を民間有志に貸與して斯業の發展を計るに至れり、君乃ち小津清左衛門、長谷川次郎兵衛、西川庄六の諸氏と謀り深川區東大工町に一大工場を建設し以て東京紡績會社を創立せり、時維明治二十年にして抑も本邦紡績事業の嚆矢たりしなり、君銳意是が發展擴張に努め漸次増資して現今四百八十萬圓の一大株式會社を爲すに至れり、明治三十六年南清地方視察の途に上り上海漢口武昌の各地を踏査し大に得る所あつて歸朝し、府下南千住町橋場の地を相し一大工場を建設し新式機械を購入して専ら純良なる製品を供給しつゝあり、君は夙に有望なる三井家を脱して献身紡績事業に従事し以て現今の大成を見るに至る、社會の推重して措かざるもの亦宜なるにあらずや、  
〔神田區駿河臺北甲賀町八 電話本局二〇二〕

### 實業家 清水彦次郎君

氣骨稜々として武士的志操に富み一諾千鈞を重んずるの美風は澠季の今日最も珍とする處たり、其六十年間の曲折ある生涯は皆是れ社會公

益に關せざるはなし、其物質的成功は餘り偉大ならずとするも精神的大成功者たるに至ては誰か亦否定せんや、其操行の純誠潔白なるは眞に社會の模範たるに愧ぢず今其概歴を草して其人格如何を窺はん哉、抑も君は滋賀縣野洲郡西河原村清水彦次郎氏の長男にして嘉永四年七月三十日を以て生る、夙に穎智活達を以て稱せらる、固より土地の名望家たるを以て推されて以て村會議員村長等の職に在り、村内貧困者の救濟策として有力者に説き五十圓宛を貧民に貸與せしむ、後數年の凶歉の爲め是を償却する能はざるものあり、茲に於て乎君祖先傳來の有體動産を賣却して債權者に代償し尙赤貧者の救恤に力む、斯の如きは最も成し難き所にして君の英斷果決たるを窺ふに足らん、君は斯の如くにして大坂に出で松屋町の某菓子商に寄る、明治十八年政府は菓子税法を制定して重税を課せり爲めに同業者の失職を見るに至る、義氣旺盛なる君は默視するに忍びず立て税制の改正及菓子税の廢止を唱道し全國八萬六千の菓子製造者及二十餘萬の菓子販賣者を同盟し爾來十年間に亘れる運動は實に慘憺たるものありき、後遂に目的を貫徹して

同業者は總計九十萬圓の税金を免かるゝことを得たり、茲に於て衆議一決して是が記念たる一大生命保險會社を設立するに確定し茲に愛國生命保險會社の設立を見るに至れり、是れ偏に代議士たる鈴木萬次郎氏及君の功勞に基因せずんばならず、君は先づ大坂支店の主任となり明治三十六年三浦篤次郎氏の後任として本店支配人と爲り以て現今に至れり、君又品川製菓會社の整理を囑せられ僅かに二年ならずして一萬八千圓の負債を償却し更に二萬圓の積立金を残せるが如き偉功を奏したる事ありき、君は此の如き敏腕を有すと雖も比較的文事に疎なるを慨し後進育英の爲に盡し資を給して學ばしむるもの數十人に及べりと傳ふ、是れ君の性質としては決して怪しむに足らず、斯の如く君は常に國家的觀念を以て盡瘁し殆んど自家の存在を度外視する傾向あり世の皓潔なる人材を求めば先づ君を以て第一と推さざるを得ず、今や六十一歳の高齡に達するも意氣旺盛壯者を凌ぐの概あり寔に有數の實業家と稱すべき也、(芝區高輪南町三〇 電話芝五六六)

### 實業家 堀井松之助君

任侠の氣概は江戸時代のそれの如く一諾千斤を重んじ、公共事業の爲め多大の援助を與へ社會の信望甚だ偉大なり、此の美質此の氣概あり更科本店の聲價が一層の發揮を見る豈偶然ならんや、君幼時家運の不振を見て慷慨に堪へず、辛酸努力遂に家政を回復して現今の盛況を招致せり、此の間の奮闘は決して一朝の談にあらざる也、而も能く世情の眞微に通じ艱難辛苦の狀を知る、茲を以て屢々義捐を爲して世の貧民を救恤し、德望溢れて名聲籍甚たるに至る、更科の名譽る君に因て高きを致せるもの寔に當代の俊傑たるに愧ぢざる也、抑も君は布屋大兵衛(舊更科の店名)の長男にして慶應元年八月を以て生る、夙に穎明の資あり幼時維新の變動に因て家産の究乏を來たし徳川時代數百年の名家たる更科の老舗も誠に微々として振はざるに至れり、元來更科蕎麥の緣由は最も古くして江戸名物の一に加へられ風味佳良にして千代田の大奥に迄嗜好せられたる名品なるを以て食道通の垂涎して措かざ

るは今も昔も渝らざる所なり、君奮起して一意其回復を計り、製造方を改革し綿密の注意を以て顧客の嗜好に適應するを期し銳意發展を計りしかば上流社會の眷遇を得て益々好潮を呈し三十五年日本橋區三代町四番地に支店を設け叔父藤村源三郎氏をして監督の任に當らしめ、尙又神田區錦町三丁目五番地に支店を置き姉婿堀井丈太郎氏をして經營の任に當らしむ、而て孰れも皆盛況を極めて家政洋々たり更に又更科蕎麥粉を製出版賣して高評を博し爾來家運最も隆昌を致せり、往年區會議員となりて公共事業に盡瘁し、更に麻布銀行の大株主となりて重役の地位を占め同區内屈指の名譽家なるに至れり、(麻布區永坂町一三 電話芝一〇四〇)

子 樞密顧問官 伊 東 巳 代 治 君

明治聖代の偉傑伊藤博文公夙に英明の資を以て帝國施政の基礎を樹立し内治外交に多大の効果を奏し本邦の位置をして一躍して世界列強の首班に置かしむ洵に空前絶後の大偉勳たらすんばあらざる也、而て公の背後に稀世の俊才ありて常に其企劃に參與し所謂智囊を以て稱せられたる伊東巳代治子あるを忘る可かざる也、子と公との間は最も親密の關係を有し、兵庫縣の一屬吏時代より相補翼して頭角を顯はし、公一步を進めば子も亦一步を進め、公一功を擧ぐれば子亦一功を奏せり恰も形影相添ふが如く一進一退其軌を一にす、其親情父子も及ばざるものあり、往年公不幸にして他界に入る子轉た今昔の感なき能はざる也近來銳鋒を收めて靜に心身の勞を慰す、然も東洋の風雲是急にして隣邦既に慘禍を醸す、子の厥起を促すや固より其所也、乃公出でずんば彼の蒼生を奈何の慨蓋し其胸臆に往來するものあらん、邦家の子を待つ久矣子亦晏如たるを得ざる也、

抑も子爵伊東己代治君は長崎の出身にして安政四年を以て生る、資性  
 穎敏夙に蘭英佛の語學に通じ明治六年兵庫縣譯官に擧げらる、偶々伊藤  
 博文公に知られて内務省に出任し、十三年内務省權少書記官に任せら  
 る、累進して太政官大書記官兼參事院議官補に進み、十五年伊藤參議  
 に隨ひ憲法取調の爲め歐洲に航し歸朝後内閣總理大臣秘書官となり、  
 正五位に敘せらる、伊藤大臣の樞密院議長に轉するや君亦た議長秘書  
 官として樞密院に入り憲法起草に盡瘁して特旨を以て勳三等を授けら  
 る、同二十三年貴族院議員に勅選せられ後内閣書記官長となり法典調  
 査委員を命ぜらる、二十七八年戰役に當ては媾和全權大臣書記として  
 馬關に至り、尋て全權辦理大使に陞任し清國芝罘に出張し全權大臣伍  
 廷芳に會し媾和談判批准交換の事を結了せり、同二十八年八月功に依  
 り男爵を授けらる、同三十一年農商務大臣となり尋て樞密顧問官に親  
 任せられ正三位勳一等に進めり、後特旨を以て子爵を陞授せられ從二  
 位に叙せらる、其報國盡忠の赤誠は天下既に認むる處、伊藤公の薨去  
 は君の一大打撃たらずんばあらず、然も先天的英敏の大才は政界に超

然たるものあり、其蘊奥を披瀝するの時期當に涼きにあらざるを知る  
 可し、(麴町區永田町二ノ一七 電話新橋八一三、別邸北豊島郡巢鴨町  
 六一五 電話番町一二六二)

貴族院議員 子爵 加藤 泰 秋君

抑當家は内大臣藤原鎌足の曾孫左大臣魚名四世の孫越前守高房十一の  
 裔加藤左衛門大夫光員十四世之孫權兵衛尉景泰長男遠江守光泰の後な  
 り、光泰初め織田氏に仕へ木村、生駒、前野、等と共に羽柴秀吉の部  
 下に屬せらる、爾後秀吉に従て戰功多し、由て天正十八年甲斐國一圓  
 二十四萬石を賜はり、秀吉の寵遇殊に厚し文祿年間朝鮮の役に出軍し  
 陣中に卒せし時に際し讒者の舌鋒に罹り終に其所領を沒收せられ更に  
 其子左近太夫貞泰に濃州黒野四萬石を賜ふ、慶長五年關ヶ原の役戰功  
 ありて後ち六萬石に加増し伯州米子に移り慶長十九年大阪征討の役又  
 功あり厚き臺命に依り轉じて豫州大洲の城主と爲り爾來世々相承け十  
 三世に至る君は從五位下遠江守加藤泰幹氏の四男にして弘化三年八月

十二日を以て生る、幼名を廉之進と稱す元治元年十月兄泰社氏の養嗣子と爲る、同年十一月廿六日襲封伊豫國六萬石同二年二月三日叙從五位下任遠江守、明治元年二月廿日御親征先陣供奉同閏四月七日御陣後衛供奉を勤め、同年九月八日命を受け御東幸先驅同十二月八日還幸亦先驅供奉を勤む、明治二年四月廿二日版籍奉還を出願す同年六月十九日版籍奉還を聞食し届けらるゝと同時に大州藩知事に任命せらる、同三年九月十三日積年王事に勤勞其功不尠叙威被爲在依之位階二等昇進被仰付叙從四位、同四年七月十五日免本官同十一年六月廿六日宮中祗候被仰付同十七年五月十七日依願免宮中祗候、同年七月八日授子爵同十八年三月廿一日明宮祗候被仰付、同十九年免祗候、同廿年十二月廿六日被叙正四位、同廿六年六月十六日被叙從三位同三十四年六月廿一日被叙正三位、同四十四年八月廿一日被叙從二位、同年十月貴族院議員補缺選舉に當り一の反對を見すして當撰の榮を擔ふ以て其德望の如何を知る可し、資性温厚篤實仁慈にして教恤に努む、其の德望偉大なるは敢て怪しむに足らざる也、(下谷區御徒町二ノ二六、電話下谷一

九二五

貴族院議員  
青木信光君

當家は宣化天皇の曾孫、多治比古王の子、左大臣四郎冠者武峯の後なり夫より實直經房元房を経て直兼に至る、直兼青木武藏守と號す、それより實直、實村、實季、重實を経て刑部卿重直に至る重直土岐家に仕へ、後織田氏に徴され又豊臣秀吉の家臣となる、其子民部少輔一重秀吉に仕へ廿四武士黃母衣衆の一人たり、秀吉又其中より七士の番頭を選べり一重亦其一人となる、後徳川氏に仕ふ、夫れより重兼、重正、重安、一典、一都、見典、一新、一貫、一貞、重龍、一興、一成を経て攝津國麻田一萬五千石の藩主として從五位重義に至る、君其後を繼ぐ實は中山信徹氏の第四子にして明治二年九月二十日を以て生る、同十年一月十九日先代重義の養子となり、同十七年十二月家督を相續して襲爵仰付られ同二十二年九月從五位に叙せらる、明治三十二年十二月從四位に進み、現に貴族院議員にして正四位子爵たり、君學識深遠に

して沈毅宏量常に温雅閑潔を以て推重せらる。曩きに同志と共に貴族院に一旗幟を樹立し尙友會派の錚々を以て聞ゆ。四十四年改選期に當り再撰の榮を擔ふて貴族院議員たり。夫人楠枝氏は從四位男爵川口武定氏の第二女にして温良貞淑の稱あり。家庭の圓滿なる更に吾人の喋々を要せず。上流社會稀に見る縉紳也と謂ふ可し。(四谷區大番町八五 電話番号町一二六一)

錦鷄間祇候、貴族院議員

日本赤十字社 副社長男爵 小澤 武雄君

君は舊小倉藩士小澤美房の男にして、弘化元年十一月十日豊前企救郡足立村に生る幼にして文武を藩醫思永館に學ぶ。十三歳父を喪ひ家を繼て士籍に列す。文久二年君將に弱冠ならんとす。時に天下漸く多事志士晏如として郷里に在り。咕嚕に從事す可きの日にあらず乃ち自ら請ふて江府に祇役し。同三年任滿ちて小倉に歸る。慶應二年幕府再び防長追討の軍を興すや小倉藩其の先鋒たり。君兵士より參謀に擢てら

れ又歩兵隊長に轉任す。事寢むの後與事に擧げらる。既にして王政維新に會し。明治元年八月奥羽征討の軍に従ふ。尋て若松民政局に出仕を命せらる。二年一月職を辭し東京に至る三月徴されて軍務官吏に任せられ幾くもなく、兵部權少丞に擧げられ。四年陸軍武官の官制更革せらるゝの日、陸軍少佐に任せられ累進して陸軍中將と爲る。實に明治十八年なり此の間陸軍卿副官、同官房長に補し太政官大書記官一等法制官陸軍少輔に兼任し。又陸軍省總務局長、參謀本部次長、陸軍士官學校長、砲臺建築部長等に補せられ歐米諸國に派遣せらるゝこと二回に及べり。二十年五月勳功に依り男爵を授け華族に列せらる。君陸軍の要地に居り樞機を乘ること二十年。殊に陸軍草創に際し法規の立案事務の措置殆ど關與せざるもの莫し。十年西南の役軍團高級參謀の要職を奉し。功を以て勳三等旭日中綬章を授け年金を賜はる。二十三年九月貴族院議員に勅選せられ。爾來帝國議會の開會せらるゝや毎回常任又は特別委員に選まれ。常に一方の領袖として議場に莅み提議討論蹇々屈せず。我が立法府の翹楚と稱せらる。二十九年三月錦鷄間

祇候に勅任せらる、三十五年十一月日本赤十字社副社長に選舉せらる君の事に従ふや、深思善謀瑣事と雖も苟もせず、即ち就職の初めに當り過去を視現在を察し將來を慮り、以て社業整理の方針を提議せり、同社が三十六年已來實行せし有名なる十年計畫即ち是なり、三十七八年戦役の救護には臨時救護部長として職務に鞅掌し、功を以て勳一等旭日大綬章を授けらる、四十年八月第八回赤十字萬國總會を英國倫敦に開くに方たり、日本赤十字社委員として派遣せられ同總會副議長に推さる、抑々君が副社長たる殆んど身を以て犠牲と爲し、事務の刷新と社業の發展とを圖り、華々汲々惟れ日も足らざるが如く、就中支那業務査閲規程を設けて地方社務の整理を企て、また救護員教育制度を改良して看護婦養成の革新を圖れり、之れが爲め屢には東京に在り、夕には地方に赴き、南船北馬席煖かなるに及ばざるの狀あり其の熱心にして強健なる人稱して精力主義の權化と爲すに至る、實に日本赤十字社の柱礎と謂ふ可し、夫人桑子河村氏の出なり、夙に日本赤十字社篤志看護婦人會の事業に盡瘁し久しく幹事の任に在り、三十七八年戦

役に際し、出征軍人の爲に創を裹み病を恤み功を以て勳五等に叙し寶冠章を授けらる、亦我が婦人慈善家の龜鑑と爲すべし、(東京市麴町區下二番町七十番地 電話番号町三六)

郵船會社 副社長 加藤 正義君

郵船會社が我帝國に貢献する所の偉大なるは既に世の定評たり、本年同社長近藤廉平氏が男爵の榮譽を辱ふせるも這般の消息を語て餘蘊なきを覺ふ、副社長加藤氏身を蓬茅より起して敏腕を揮ひ遂に同社の副社長たるに至る、君は固と官僚派の代表的人材にして同社經營上の大偉勳者たり、勇往敢爲にして百般の企畫を施し縦横の智略を揮へり、同社創立以來の大計畫大飛躍寧ろ君に俟つ所大なり、日清日露の大役に當て運輸の神速を謀り一意誠忠を振てられたるは世の齊しく嘆賞する處勳二等の光榮に接せるもの誰が亦美望せざるものあらんや、吾人今君と交遊せる某氏に因て其概傳を得たり、聞く、君は鳥取縣加藤良吉春昌の次男安政元年二月廿三日伯耆國日野郡渡村に生る、君十歳隣



村の寺僧に就き禪學を修む十七歳藩命に依り藩籍祿高調査の事に任して効あり、廢藩置縣後鳥取縣參事關義臣氏置賜縣令に轉任するや君の才幹を愛し其の縣吏に拔擢し且餘暇修學する所あらしむ、又改租の事あるに當り、一方面を擔任せしむ其成績頗る見るべきものあり同縣の山形に合併するや、三島縣令亦君の才幹を認め厚く任用する所あらんとす、偶々政論抑壓の干渉極端にして縣吏の政治を講究するを嚴禁す君謂へらく政界の大勢立憲に移るは近き將來に在り國民をして國體に基き善良なる政治思想を養成せしむる必要の時機に際し如斯は頗る其當を得すと大に其非を鳴し官祿を棄て、決然勇退す兵庫縣令森岡純氏君が硬骨敏腕の用ゆべきを知り、同縣勸業課長に任す其在職中事績の一斑を舉んに君は専ら産業の獎勵輸出貿易の發展を企圖し先づ關西地方製茶事業の改良を急務とし其第一着手として製茶共進會を關西の輸出地に官設し製造業者をして普く製法改良の必要を知悉せしめ且講究の機會を與へんと欲し、其の方法を明治十五年春滋賀縣に開かれたる關西府縣勸業會に提案し一致の贊同を得て同年秋冬の候森岡縣令の旨

を承け抱負滿腹出京し諄々之を當路に説く時の農商務卿西郷參議品川農商務大輔大に之を贊し即ち廟堂の議に上り同年十二月太政官布達を以て翌十六年製茶共進會を神戸に開設せられ關西茶業の發達に就き偉大の効果を與へたり、十八年森岡縣令農商務少輔に轉任するや、君亦農商務書記官に任す此時に當り海運界に三菱共同兩會社の大競争起り頗る慘劇を極め終に帝國海運の元氣を阻害し復た起つ可らざるに到らんとす、政府森岡農商務少輔に命じて善後の策を講せしむるに當り君をして補佐の責を取らしむ乃ち三菱共同兩社の資本を併せ新たに日本郵船會社を創立し、茲に帝國海運の基礎を確立す此間に處し、君が苦心經營補佐の効最も多しとす、森岡少輔新設日本郵船會社の社長に官選せられ尋て君亦た其理事に官選せらる二十六年十二月時運の進歩に伴ひ役員の官選を止め商法の規定に準據し純然たる株式會社に變更するや、其定款社則悉く君が起按に成る而して新組織第一回の株主總會に於て君は取締役を選任せられ尋て副社長となり以て今日に至る其間二十有六年一意専心社務に勵精すると一日の如し、抑も郵船會社が

當初兩社競争の餘弊を承け六萬噸の衰弱船舶を以て起り航路は内地沿岸近海に止り、資産は一千萬圓と稱するも實價は約其半額に過ぎざりしもの今や船舶は參拾萬噸に進み航路は殆んど世界に普く資産の實價は五千萬圓以上に達し全世界海運業者の第六位を占め今日の隆盛を致したるもの君が勤勉經營の効與りて力ありと謂はざるを得ず、其間君は卅四年夏秋の候朝鮮北清及南清地方を巡視し鐵道に鑛業に種々の手段に依り列國競ふて其勢力を彼地に扶殖せんことを勉むるの實勢を看取し、當時排外熱の最も熾んにして他國の未だ一指を染むること能はざる湖南省の彼我兩國の前途に重大の關係あるを認識し窃に總督張之洞巡撫俞廉三に謀るに日清兩國人の資本を以て漢口より洞庭を経て湖南省の首府長沙に至る、汽船航路開設の事を以てし、乃ち張俞兩人の内諾を得酌朝じ之を政府當局に謀る當局者亦た時機の失ふべからざるを以て速に之に着手せんことを慫慂す於是事業界有力者と謀議し一會社を創設す之を湖南汽船會社と爲す、君は推れて其社長となる蓋し日清合同事業經營の嚆矢たり後他の同業者と合同す、今の日清汽船會社は

れなり、君は三十九年より四十年に渡り歐米各國及印度に於ける海運業發達變遷の實況を視察し以て從事する所の社業經營に資益する所多しと云ふ、以上君が事業の概要なり君が公職としては法典調査會委員司法省破産管財人、東京商業會議所特別議員、東洋拓殖會社創立委員築港調査會協議委員等なりとす、君は二十七八年戦役の功に依り勳四等に叙せられ、三十三年北清事變に於ける功に依り勳三等に叙せられ、三十七八年事件の功に依り勳二等に叙せらる、資性温雅閑潔にして最も謹嚴なり、常に士を愛して後進扶掖に盡瘁し任侠の高風慕ふ可く仰ぐ可きものあり徳望日に殷盛を加ふるもの豈偶然ならんや、(麴町區元園町一ノ二 電話番町三〇五)

實業家 神田 鐺 藏君

帝國實業界の飛將軍として名聲噴々たる神田鐺藏君機略縱横の怪腕を揮ひ徒手空拳を以て數百萬の資財を蓄積せり、天下傳へて今太閤と評す、蓋し機敏にして成功の迅速なるを稱する也、固と是れ愛知縣海東

郡の出身にして明治五年を以て生る三百年來の酒造家として門地甚だ賤しからず邸前楓樹あるを以て紅葉屋と號せり、幼より活達の譽れあり、始め名古屋に出で、株式界に奔馳し巧みに機會を捉へて一舉に數萬金を利せり、人多く其慧眼と勇膽とに服し其快舉を賞揚して措かず血氣未だ定まらざる君は尙一鞭を加へて邁進し却て一大蹉跌に遭遇せり、是れ君が再舉して現今の豪富を成さしめたる前提たらずんばあらざるなり、明治三十二年蹶起上京して一小店舖を坂本町に設け、熱心と勤勉、機敏と堅忍とを以て自から丁店と伍して奮闘す、熱誠と確實とは漸く有力者間に喧傳せられ澁澤男今村氏佐々木氏等の眷遇を受くるに至り、一瀉千里の趨勢を以て向上發展し現今の大成を遂ぐるに至れり、其商風は眞に獨特の一流を爲し多く公債の取扱に因て信用を博せり、是れ君が非凡の商略の存したる所也、今や紅葉屋商會紅葉屋銀行等の直營は洋々として隆盛の域にあり、君又仁慈博愛の資性に富み各種公共的事業に賛し救済事業に盡瘁せり、恩賜財團濟生會の如きは卒先して賛同せる所巨萬の義捐は眞に其性格を發露したるもの也曠世

の偉材として社會の推重を受くるもの豈偶然ならんや、(店日本橋區坂本町六 電話浪花長一三八、特長三〇六、長一五〇五、長一五四六、長二八〇二、長三七七二、長四四七三、長五一八〇 邸牛込區市ヶ谷砂土原町一ノ二 電話長番町八〇三)

#### 實業家 袴田喜四郎君

帝都有數の質商として徳望隆々たる袴田喜四郎君は元と是れ府下南足立郡淵江村の出身也、累世農桑を業とし土地の名門を以て名あり、君幼にして聰悟早くも和漢の諸學を修めて頗る造詣する所あり、蓬茅の間在ては驥足を伸ぶるに足らざるを悟り、豁然東都に出て下谷區池之端仲町金田紙店に勤仕して刻苦勵精同儕を壓せり、其機敏なるや斯業の濫奥を極め主家の爲めに貢獻せるもの幾干なるを知らず、偶々先代袴田喜右衛門氏に知られて其養嗣子と爲り以て其姓を冠せり、是れ實に明治十四年なり、爾來大に奮勵して祖業たる質商に勉め、誠實と熱烈とを以て邁進し一層の發展を見るに至れり、元來同家は有名なる質商に

して資産の豊富なるは世の齊しく認識せる處然も君の精勵は能く金融の圓滿を謀り數倍の富を増し家政をして益々隆昌の域に進めり、明治三十一年東京瓦斯會社の取締役に推され、同三十四年中村、岩崎の諸有力家と謀り倉庫銀行の設立に盡瘁し、同三十五年其創立の運に至るや推されて取締役たり、斯の如く潑刺たる手腕を以て實業方面に駢馳して名聲を博し、一面公職としては三十三年區會議員となり次て又府會議員となり爾來毎改撰期に再撰せられて今日に至れり、曾て府會議長の指名に因り市部參事會員となり滿腔の抱負を披瀝して公共事業の爲めに多大の盡瘁を爲し府下人民の囑望する處となれり、君仁慈博愛の性に富み、各種救濟事業に義捐して賞杯を受領せるもの尠からず、恩賜財團濟生會の如きは卒先して巨額の贊助を與へて其素志を知らしむ眞に稀世の俊傑たりと謂ふ可し、(本所區長崎町六、電話長浪花一一一五)

實業家 北里 綏 袈 男 君

帝國生命が保險會社中最も堅實の定評あるは其創立の最も古くして他會社に比して特色の點少からざるを以て也、第一資本の豊富なること第二積立金の多大なること、第三保險契約者の多數なること等最も顯著なりとす、而て實業界中最も困難たる可き保險會社をして幾多の支障を排除し此の如く名聲を博せしめ、確固たる基礎を樹立せしもの實に學識經驗共に優越せる北里袈袈男君の如き新進氣鋭の士が帷幕に參して萬般の施設を補助したる結果に外ならざるは識者の既に認むる所也、果せる哉君は數年ならずして累進以て常務取締役たる榮譽の地位を占むるに至れり、爾來の健闘は例に因て異彩を放ち社會の信用偉大を極め遂に同社をして現今の如く一大盛況を呈するに至らしめたり、其功勳亦偉なりと云ふ可し、抑も君は熊本縣の人北里惟信氏の二男にして慶應三年四月三十日を以て生る、幼にして既に麒麟兒たる賞譽あり、早くも帝國大學法科大學に入り、養辛雪苦の功を積み遂に優等を以て卒業せられ法學士の稱號を領せり、直ちに帝國生命保險會社に入り、爾來の奮闘は例に依て劇甚を究め、累進して常務取締役となり以